

**このマンションから
うら・み・はら・せ**



目次

プロローグ	1
いえさがし	3
二〇四号室の住人	12
二〇三号室の住人	15
一〇三号室の住人	19
可愛い住人	23
原田太一	31
浦川優香	40
見市麗子	45
迷惑な隣人	51
一〇二号室に引っ越します	53
壁に耳あり	55
志賀の思い	59
三浦の部屋の秘密	61
荒れた名門	71
辻野校長	78
フランケンシュタイン	84
うら・み・はら・せ	89
ハニートラップ作戦	97
三浦の思い	103
校内放送	106
エピローグ	112

プロローグ

前の公園では蝉がジージーと派手に鳴いている。あまりにうるさいので、これからの話の邪魔になる。わたしは窓を閉めエアコンをオンにした。冷たい風が顔に当たる。

わたしは部屋の真ん中にある小さくて白いテーブルの前に正座した。このテーブルを娘の香代子とこの部屋に運びこんだ日がつい昨日のこのように思い出される。

あの時の夢と希望に満ちた香代子の晴れ晴れした表情を見て、わたしは娘と離れ離れで暮らす寂しさにも耐えることができると思った。

それなのに、なぜこんなことになってしまったのだろう。

テーブルの上には写真立てがポツンとひとつ置いてある。写真の中からわたしに笑みを向ける男と香代子の姿を見ると、胸が締めつけられて涙が溢れてくる。

先に隣に座っていた夫も同じ気持ちなのだろう。夫は写真立てを一瞥してからボタンとテーブルに伏せた。そして、前に座る男に睨むような視線を向けた。

「それでは、君の相談内容を訊かせてもらおうかな」

夫は感情を殺し平坦な口調で男に言った。一年前にビール片手にプロ野球の話題で盛り上がっていた二人と同じ人物とは思えない。

男は背筋をピンと伸ばし、肺に息を吸い込んで大きな胸を膨らませてから口を開いた。「俺の気持ちの整理がつくまで、この部屋に住まわせてもらいたいです。お願いします」

男はそう言ってわたしたち夫婦に向けて、白いテーブルに額をこすりつけた。

わたしたちの知っている写真に映る優しかった頃の男とは別人のように変わってしまったので、この申し出を受け入れるべきか、わたしは頭を悩ませた。

夫を見ると腕を組み唇を噛みしめていた。夫も同じように悩んでいるのだろう。

あんなことがあったのだから、男の気持ちは痛いほどわかる。というより、わたしたち夫婦もこの男と同じ気持ち、いやそれ以上に辛い気持ちだ。

このままではわたしたち夫婦も気持ちの整理がつかないままだ。どこにこの気持ちをぶつければいいのかわからない。あれ以来、わたしは生きていくことに苦痛を感じ死んでしまいたいと何度も思った。

それから、しばらく白いテーブルを囲む三人は誰も口を開かなくなった。

沈黙が続く。男はテーブルに額をつけたまま顔を上げない。男の大きな体は小刻みに震えている。男の様子を見て、わたしはこの男に任せてもいいのではないかと思い始めた。

「じゃあ、一年間の約束でどうだろう。お互いのためにも期限は切った方がいい」

男の申し出を正座したまま黙って腕を組んでいた夫が、男の後頭部に向かって声を発した。夫もわたしと同じ考えのようだ。

男は夫の言葉を聞くとすぐに顔を上げ、「本当ですか、ありがとうございます」と言って夫とわたしを交互に見た。その時、真っ赤に潤んだ男の目から一筋の涙が伝った。

その涙を見て、この男はあのころと変わっていない。昔の優しい男のままだと思った。男の顔をじっと見つめる夫の目も赤く潤んでいた。唇を噛みしめ涙を堪えているのがわかった。

夫がわたしの方に涙目を向けたので、わたしも同じ気持ちですと、コクリと頷いてみせた。

今度は、男がわたしに真っ赤な目を向けてきた。わたしは男に向けて言葉を発することができなくて、何度も小さく頷いて見せた。

男は、もう一度「ありがとうございます」と言って、後ろに下がり、今度は床に額をこすりつけた。

「ただし」

そこで、夫は男に向かって強い口調で言った。

「はい」男は顔を上げた。

「二度と警察の厄介になるような真似はやめてくれ。もし、また、同じようなことがあれば、その時はすぐにここから出ていってもらおう」

「はい、わかりました。約束します」

「この件については、不動産屋の志賀さんに、私から話しておくから」

「ありがとうございます」

「志賀さんには、今回の件で大変迷惑をかけてしまったから、これ以上迷惑はかけたくない。くれぐれも頼みます」

「はい、二度とあんな真似はしません」

「私と志賀さんとは、大学時代からの友人でね。いろいろと今回の件も気にかけてくれてるみたいだ。この先も、きっと君の力になってくれると思います。では、そういうことで」

夫が立ち上がったので、わたしも腰を上げた。

「ご無理を聞いていただいて、ありがとうございます」

男は慌てて立ち上がり、わたしたちに向けて腰を二つに折った。

いえさがし

「瀬川、五月十一日付で川西店への異動が決まったぞ」

大手家電量販店に勤務する瀬川次郎は忙しかった新生活のシーズンとゴールデンウィークを終えて、これから少し落ち着くなど思っていたところに店長からそう告げられた。

あまりに急で、その上通勤時間が大幅に長くなることに少し不満を感じたが、雇われの身としては突っぱねることなど出来ない。

入社五年目、そろそろ仕事にマンネリを感じていた時期でもあるし、いいタイミングなのかもしれないと自分に言い聞かせ、気持ちを切り替えることにした。

転勤先は自宅から通えなくもないが、この際引っ越して一人暮らしすることに決めた。さっそく次の休日の朝一番に不動産屋に電話をかけた。次郎が不動産屋に希望条件を告げると、不動産屋はすぐに条件に合った物件が紹介できると早口で言った。

次郎もすぐにでも決めたかったので、その日の午後一時に不動産屋と約束した。昼食を不動産屋の最寄り駅の駅前にある牛丼屋ですませてから不動産屋へと向かった。

不動産屋は駅から歩いて五分くらいのところにあった。ガラス張りの壁にたくさんの物件情報が貼ってある、昭和の臭いが漂う昔ながらの地元密着の不動産屋だ。

次郎は重いガラスのドアを押し開けて中に入ると、年配の男性と若い女性が椅子に腰掛けていた。年配の男性が朝の電話で対応してくれた人だろう。

「すみません」

ドアを開けたところで次郎が言うと、椅子に腰掛けていた二人は同時に次郎の方に顔を向けてから立ち上がり、「いらっしゃいませ」とにこやかな表情を向けた。

感じのいい人たちで、紹介してもらった物件も期待が持てそうだった。しかし、次郎は困ったことに気づいていた、

中年の男性の方が次郎のところまで歩みよって「瀬川次郎さんですか」とふっくらした満面の笑みを見せた。

男性の年齢は五十代後半くらいだろうか、体が風船のように膨らんでいて手足が短い。太りすぎたペンギンのようだと思った。

「はい、午前中にお電話した瀬川です」

次郎がそう言うと、男性は「お待ちしておりました。さあ、さあ、どうぞ」と言って、奥のテーブルへと案内してくれた。

「よろしく願います」

次郎はテーブルの前に立ち、男性に向けて頭を下げた。

「はい、どうぞお掛けください」

男性は次郎の座る椅子を引いてくれた。

次郎が椅子に腰を下ろすと男性も資料を持って、テーブルを挟んで次郎の前に腰を下ろした。

「はじめまして。私が、瀬川さんを担当する志賀と申します。今日はよろしくお願いたします」

志賀はそう言って、次郎に名刺を差し出した。

「よろしくお願いたします」

次郎は頭を下げてから志賀が差し出した名刺を受け取り、名刺に視線を落とした。名刺には『志賀佐衛』と書いてあった。

「しがさえいさん？」

次郎はそう呟いて、志賀に顔を向けた。

「はい、私は『しがさえい』と言います。よろしくお願いたします」

『しがさえい』

次郎は首を傾げた。これは本名ではなく、不動産屋だからこの名前にしたのか、それとも本名がこれだから不動産屋になったのか、訊く必要もないことだが、次郎はすごく気になった。

「朝の電話のお話では、川西方面で家賃が六万円くらいで一人でお住まいの部屋をお探しということでしたね」

志賀はニコニコした表情を浮かべている。

「は、はい」

次郎の声は小さくなってしまった。朝の電話で次郎は志賀に希望条件を通勤時間が三十分以内で家賃六万円とお願していたが、正直家賃が六万円だと家計がきつくなることに後で気づいた。これが次郎の困ったことだった。

「お電話いただいてから、家賃六万円前後の物件で良さそうなのをいくつかピックアップしておきましたよ。きっと気に入ってもらえると思います」

志賀はニコニコと自信たっぷりの表情を浮かべた。

「そ、そうですか」

次郎は志賀のその表情を見て、後ろめたい気持ちになった。

「たまにね、川西で五万円以下の部屋がないかって言われるんですけど、そうなるほとんど紹介できないんですよ。けど、お客さんは六万円前後でということですから、そこそいい物件がありますよ。期待してください。まずはね、特に私のおすすめの物件を五つピックアップしておきました。これらの資料を見てください。今から順に紹介していきますね」

志賀は言ってから五枚の資料をテーブルに広げた。

「そうですね、まずは、どの物件から紹介しましょうかね」

志賀はテーブルに並べた資料に視線を巡らせた。その様子はなんとなく楽しそうに見えた。

それから、志賀が順に全ての物件を紹介してくれたが、次郎は決めることが出来なかった。予算オーバーだからだ。

志賀が紹介してくれた物件の中で一番安いのは家賃が五万七千円だった。それに共益費を含めると、月々の出費は六万円近くになってしまう。

今さら、志賀に五万円以下で探しなおしてくれとは言い出せなかった。かと言って、今紹介してくれた物件で契約するとなると、月々のやりくりは本当に厳しくなる。

次郎は答えることもできず俯いてしまった。次郎が俯いてしまったせいかな、志賀もさっきまでとは違い、言葉数が少なくなった。

しばらく志賀の視線が俯く次郎の脳天に刺さるのを感じた。次郎は一段と顔を上げづらくなった。

志賀の口から、「ハァー」というため息を漏らす音が聞こえた。

次郎はそっと目だけを上げて志賀の様子を窺った。志賀は分厚い下唇を突きだして短い腕を組み次郎の方をじっと見ていた。

「どの物件も気に入らないですかね」

志賀はそう言って首を折った。ベテランの志賀は二十代の若輩者の次郎に対して、熱心に条件に合う物件を探してくれ、それぞれの物件について細かく丁寧に説明してくれた。

気の弱い次郎は、今さら志賀に向かって家賃五万円以下で探しなおしてくれと言い出せなかった。

「す、すいません」

次郎はペコリと頭を下げた。

「いいですよ。家賃六万円なら、まだまだ他にもいい物件がたくさんありますからね。ちょっと待っててください。すぐに次のおすすめ物件をピックアップしますから。よし、次はどれにしようかな」

志賀は気を取り直すようにして両膝を叩いて立ち上がり、背後にある棚に体を向けた。棚には青いファイルがズラリと並んでいる。志賀はその中の一冊を抜き取りページをパラパラとめくりはじめた。

五万円以下の物件にしてくれと、早く言わないといけない。次郎は慌てて口を開いた。

「待ってください」

次郎にしては大きな声が出た。

志賀は、「はっ？」と言って次郎に向き直った。

「どうかしましたか」

志賀は次郎に訝しげな顔を向けてきた。

「いや、あの、そのですね」

次郎はモジモジした。

「私の紹介する物件には興味がありませんか」

志賀は呆れたように言った。

「いえ、志賀さんの紹介してくれた物件はどれも良かったです」

「ありがとうございます。では、物件の紹介続けてもよろしいでしょうか」

「いや、いいんですけど」

「いいんですけど、どうかしましたか」

「実は、朝ここに電話した後、計算してみたんですが思ったよりお金が足りなくて、家賃が六万円だと生活が厳しいかなと思って、それで五万円以下でいい物件がないかなと

思いまして、あの……、すいません」

次郎は頭を深々と下げた。志賀にキレられるのではないかと思った、
「なるほどそういうことですか。川西界限で五万円以下とはなかなかきついこと言いますね」

志賀は苦笑いを浮かべた

「本当にすいません」

次郎は上目遣いで志賀を見た。

「川西で家賃五万円以下ですか」

志賀が一旦椅子に座りなおして腕を組んで、「うーん」と唸りながら天井を眺めていた。

志賀はそこからしばらく分厚い下唇を突き出して目を閉じたまま固まっていた。

次郎はあきらめて帰った方がよさそうだなと思った。

「やっぱり、川西で家賃五万円以下なんて無いですよ。お手数おかけしてすいません。あきらめます」

次郎は椅子から立ち上がった。

きっと志賀は、それなら最初から電話でそう言えよ。無駄な時間を使わせやがってと思っているのだろう。

「お客さん、名前は瀬川次郎さんでしたよね」

志賀が目を閉じたまま急に次郎の名前を確認してきた。

「あ、は、はい。瀬川次郎です」

「なるほど、いい名前ですね」

志賀が目を開けて立ち上がった次郎を見上げた。志賀の分厚い唇の両端がギュッと上がった。

自分の名前がいいなんて思ったことない。『しがさえい』の方が不動産屋らしくていい名前だ。

「僕の名前がいいですか」

次郎は首を傾げた。

「うん、絶対いい名前です。これでぴったりです」

「何がぴったりなんですか」

全くわけがわからなかった。わかるのは志賀は怒ってないということだ。なぜかニコニコしている。

「じゃあ、あなたに特別な物件を紹介しますよ」

志賀は勢いよくソファから立ち上がった。

「五万円以下であるんですか」

「ありますよ、それもすごい特別なのがね。特別な人にしか紹介していない物件があるんですよ」

志賀は右の口角だけを上げた。

志賀は立ち上がり背後の棚に並ぶ青いファイルに芋虫のような人差し指を這わせた。

「よし、これだ」

志賀はそう言って棚から背表紙に赤色で大きく『特』とだけ書いたファイルに人差し指を掛け抜き取り、次郎の方に体を向け、ニヤリと笑みを浮かべた。

「瀬川さん、どうぞ座って下さい。これから瀬川さんにここにある特別な物件を紹介しますから」

次郎はよくわからなかったが、とりあえず椅子に腰を下ろした。

志賀も椅子に座って、ファイルをテーブルに置き、二、三ページめくったところで一枚の資料を抜き取った。

「ありましたよ。これです。これこそがうちのとっておきの特別な物件です。これがダメでしたら、うちが紹介できる物件はないですから、違う不動産屋をあたってもらうしかないですね。でも、あなたはここに決めなきゃダメなんですよ」

志賀が資料を次郎の方に向けた。そのあとギョロっとした大きな目で次郎をじっと見ている。まるで相撲の立ち会いの時のような真剣な眼差しだった。

「こ、これが特別な物件ですか」

次郎は資料を手にとり視線を落とした。

『川西マンション。築三年、洋室六畳・キッチン三畳、川西駅から徒歩五分、家賃三万円、共益費、敷金、礼金なし』

次郎は見間違いではないかと何度も何度も見た。家賃が三万円で駅まで徒歩五分。古いボロボロの建物かと思ったが築三年と新しい。築三十年の記載間違いではないのかと思った。

「築三年って新しいですよ。三十年の間違いじゃないんですか」

「いえいえ、まだまだ新しいきれいなマンションです」

「でも、これ、本当なんですか」

「ええ、本当です。すごいでしょ。それが、うちのとっておきの特別な物件なんです。気に入ってもらえましたか」

「なぜ、こんなすごい破格の条件なんですか。これまでのとは比べ物になりません。なにか、理由があるんじゃないですか」

次郎は物件のあまりの条件の良さに何かウラがあるんじゃないかと疑った。

「嫌なら、いいですよ」

志賀は拗ねたように口元を歪めた。そして、次郎から資料を取り返そうと、短い右手を伸ばしてきた。

嫌なわけがない。こんな条件、他を探しても絶対に見つからない。これを逃すわけにはいかない。

「い、いえ、ぼ、僕、こ、ここにします。ここを紹介してください」

次郎は立ち上がって志賀に向けて深々と頭を下げた。

「そうですか。決めてくれますか」

志賀がニヤリと口角を上げた。

引っ越しの荷物を全て部屋に運びこみ、次郎はこれからこのマンションの住人に挨拶に回るつもりになっている。

一人暮らしのマンションで引っ越しの挨拶に回るのは少数派かもしれないが、これから同じ屋根の下で暮らす住人たちに手土産を持って挨拶して、損することはないだろう。どんな人たちが、このマンションに住んでいるのか、前もって知っておくと、後々なにかと役に立つはずだと思っている。

引っ越しの挨拶の手土産は何がいいかとネットであれこれと調べてみると、クッキーのような焼き菓子がよいと書いてあったので、駅前の関急百貨店で買い求めることにした。

不動産屋の志賀から川西マンションは現在十部屋のうち四部屋が埋まっていると聞いていた。駅近の好立地で破格の安さのわりに自分を含めて半分しか埋まっていないことが、少し不思議に思ったが、この時は、それについて、それほど深く考えることはなかった。

志賀はとっておきの特別な物件と言ってこのマンションを紹介してくれた。確かに条件は良すぎなので、とっておきの特別な物件なのはわかるが、志賀は何故とっておきの特別なこのマンションを自分のような若輩者に紹介してくれたのかが不思議だった。

『瀬川次郎』という名前が気に入ったと言っていたが、なにが気に入ったのかはわからない。瀬川次郎という名前に何か意味があるのだろうか。次郎はそんなことをぼんやりと考えながら関急百貨店へと歩いて向かった。

女性客が行き交う中、菓子の甘い香りや香水の香りが鼻孔から入ってくる。店内に流れるアナウンスやBGMと床を打つ靴音、店員やお客さんの声が次から次へと耳に飛び込んでくる。次郎はこういう華やかな場所は気後れして得意ではない。

普段、来ることのない百貨店に来て、次郎は落ち着くことができず、おどおどしながら店内を見渡していた。

地下一階の洋菓子専門店がずらりと並ぶフロアに来てみたが、人の多さや雰囲気は馴染むことが出来ず、次郎は息苦しさを覚えた。

華やかな服を身に纏う女性客、ショーケースの奥でキラキラと満面の笑みを浮かべる女性店員。この空間にいる自分は場違いな男ではないかと感じた。

次郎はショーケースにケーキやバームクーヘン、シュークリームが照明に照らされ輝いているのを遠くから眺めることしかできなかった。煌めくショーケースに近づくことが出来ず、どの店で買えばいいのかも決められない。店員に声をかける勇気もなくただひたすらフロアをグルグルと何周も回っていた。

同じフロアを何周も回っているのも、そのうち女性店員たちの次郎に突き刺す視線が冷たくなってきた。それを感じて、次郎は一段と店に近づけなくなった。

ショーケースに並ぶ生菓子のケーキが美味しそうだったが、挨拶に持っていく手土産は日持ちのするものにした方がいいとネットには書いてあった。ケーキは魅力的だが、それは自分用に一つだけ買うことに決めた。

「いらっしゃいませ、こちらは季節限定のフルーツたっぷりゼリーケーキですよ。今しか買えない限定販売です」

高く清んだ声が次郎に向けられた。声のする方に顔を向けると黒目がちの大きな目をクリクリと小動物のように動かす若い女性店員が小首を傾げ次郎に向けて微笑んでいた。

次郎は彼女を見た瞬間に心が跳ねた。自分の口元が緩んでいくのがわかった。

彼女は白のフリルのついた黒地のワンピース姿がよく似合っていて、陶器のような肌にピンク色の頬が人形のようなようだった。可愛いすぎるだと次郎は思った。

次郎は夢遊病者のように彼女の立つショーケースの前へと足を踏み出していった。

「いらっしゃいませ」

次郎がショーケースに近づくと、女性店員は満面の笑みで迎えてくれた。それだけで次郎の顔は熱くなった。

「季節限定のフルーツたっぷりゼリーケーキ、こちらがあたしのおすすめですよ」

次郎は彼女の輝く笑顔を見てから、ショーケースの方へと視線を下げた。女性店員がおすすめと言うフルーツたっぷりゼリーケーキがショーケースの真ん中でキラキラと輝いていた。

この可愛い女性店員が、おすすめしてくれているし、美味しそうだったので、これをひとつ買うことに決めた。あと、引っ越しの挨拶用の菓子をどれにしようかと、今度はショーケースの上に並ぶクッキーの方に視線を上げた。クッキーの並ぶ奥に女性店員の膨らんだ胸元が見える。つい、そちらに視線がいつってしまう。

女性店員に声をかけた方がいいのではと思うが、なんと言っているのかわからず無言のままクッキーとその奥に見える彼女の胸元を見ていた。

ショーケースの上には五百円から三千円までのクッキーの詰め合わせが所狭しと並んでいた。

千円のでいいだろうと、千円の値札のついたクッキーの見本を覗きこんだ。

「お客様、こちらのクッキーをお求めでございますか」

女性店員が声をかけてきた。アニメのキャラクターのような鼻に抜けるふんわりとした甘い声だ。

次郎は女性店員の方に顔を上げ、彼女の顔を見てから、もう一度小さく膨らむ胸に視線を下げた。そして名札に書いてある『浦川』という名前を確認した。

「浦川さんか」と心の中で呟いて、頭の中に浦川という名前を刻みこんだ。

「え、ええ。引っ越しの挨拶にと思って探してるんです」

次郎はやっと口を開くことが出来た。

「それでしたら、お客様が、今ご覧になっております当店オリジナルのクッキーの詰め合わせがおすすめです。特にこちらの缶に入ったタイプは缶のデザインも可愛いですし、この店の人気の商品です」

女性店員の魅力的な薄い唇が動く。最後になっこりと笑みを浮かべ小首を傾げた。その仕草が可愛すぎた。心臓がピョンピョン跳ねて、次郎の思考はおかしくなっていた。

「じゃ、じゃあ、こ、これにします」

次郎は生唾を呑み込み、ショーケースの上に並ぶクッキーを指差した。

「五百円から三千円までございますが、どのくらいのご予算でお考えですか」

女性店員がまた少し小首を傾げながら笑みを浮かべた。女性店員が可愛いデザインだと言う缶入りのタイプは二千円と三千円のタイプだった。

次郎が買おうと思っていた千円のタイプは箱入りだ。

「二、二千円のを四つ下さい。そ、それとこのフルーツたっぷりゼリーケーキも二つ下さい」

女性店員の笑顔のせいで、次郎は見栄をはり、千円のクッキーのつもりが二千円になり、自分用に一つでよかったフルーツたっぷりゼリーケーキも二つになった。一人で二つのケーキが食べられるだろうか。予定していた出費が倍になってしまったが、そんな

ことは今はもうどうでもいい。彼女と会話できたことだけで満足だ。

「こちらのクッキーが四つとフルーツたっぷりケーキゼリーがお二つですね。先にお会計よろしいですか」

「あっ、はい」

次郎は財布をポケットから取り出し中身を確認した。一万円札が見えてほっとした。

「全部で九千九百三十六円になります」

次郎は財布から一万円札を抜き取った。

「こ、これで」

女性店員が出すトレイに一万円札を載せた。おつりを受け取ってから、大きく息を吐いた。

「では、商品を包装しますので、もうしばらくお待ちくださいね」

またまた女性店員が少し首を傾げながら笑みをくれた。次郎はその仕草にメロメロになり、心臓は爆発寸前になっていた。

一つ一つ丁寧に包装する彼女に見惚れた。次郎の視線は彼女の瞳から薄い唇、胸元へと下りていく。もっと彼女と話がしたい。知り合いになりたい。体をカッカさせながら包装が終わるのを待った。

包装が終わり彼女が、ショーケースから前に出てきて次郎の前に立った。

「大変お待たせいたしました」

女性店員は二つの紙袋を次郎の前に両手で差し出した。

「あ、ありがとうございます」

次郎はペコリと頭を下げた。それからしばらく紙袋を受け取った体勢のまま動かさず、彼女をじっと見つめていた。

女性店員はニコニコと笑って「ありがとうございました」と頭を下げた。

次郎はそのあとも、しばらく彼女を見つめていた。

「お客様？」

彼女が首を傾げて声をかけた。

「は、はい」

「まだなにか、ご入り用でございますか」

「えっ、い、いえ、だ、大丈夫です。こ、これ美味しそうですよね」

次郎はショーケースの中のフルーツたっぷりゼリーケーキを指差した、

「ええ、季節限定のおすすめ商品でございます」

「ぜ、絶対、ま、また買いに来ます。そしてあなたに会いにきます」

次郎は腰を半分に折った。

「楽しみにお待ちしております」

女性店員が丁寧に頭を下げた。

「は、はい」

次郎はフロアーに響くくらいの今日一番の声を上げた。

二〇四号室の住人

百貨店の女性店員の笑顔が頭から離れないまま、ルンルン気分で部屋に帰ってきた次郎は、このマンションの住人に挨拶に回る準備をはじめた。

買って来たクッキーを可愛い女性店員が別につけてくれた小さめの手提げの紙袋に一缶ずつ入れかえてテーブルに並べた。まず、そのうちの一袋を手に部屋を出た。

このマンションに入居しているのは四名で、二階は二〇三号室と二〇四号室、一階は一〇三号室と一〇四号室に住んでいると不動産屋の志賀から聞いている。

まずは隣の二〇四号室のドアの前に立ち、インターフォンのボタンを押した。

どんな住人が出てくるだろうかと、次郎の胸に緊張が走った。次郎は無機質なブラウン色のドアをじっと見つめ、大きく息を吸った。

しばらくすると、インターフォンから「はあ」という張りのないしゃがれた低い声が聞こえてきた。気だるく不機嫌そうな声だった。それを聞いて嫌な予感がした。

「お忙しい時間にすみません。本日、このマンションに引っ越してきた瀬川といいます。引っ越しのご挨拶にお伺いしました」

次郎が言うと、インターフォンの向こうから「チェッ」と舌打ちする音が漏れた。

この住人はすこぶる機嫌が悪そうだ。忙しかったのだろうか。ちょうど夕食の時間くらいだから食事中なのかもしれない。もう少し遅い時間にした方がよかったのか。しかし遅い時間に訪ねるのも非常識だ。明日にすれば良かったのか、いや、明日にしても同じことだ。挨拶は出来るだけ早い方がいいはずだ。

やはり一人暮らしのマンションで引っ越しの挨拶は嫌がられるのだろうか、やめた方が良かったのか。

ドアの前で待っている間、インターフォンを見つめながら、そんなことが次郎の頭の中をめぐった。

部屋の中からドタバタと激しい音がして、次郎の胸は早鐘を打ちはじめた。一度ゴクリと生唾を飲み込んだ。

カチャッと鍵の開く音がして、ブラウン色のドアが少し浮いた。次郎は髪の毛を整え深呼吸した。そのままドアがゆっくりと三十センチくらいだけ開いた。

次郎は三十センチのドアの隙間に回りこんで、「失礼します」と頭を下げた。フンと鼻を鳴らす音がした気もするが、男からはっきりした反応はなかった。

顔を上げてから、ドアの隙間を覗きこむと、薄暗い空間の奥に無精髭を生やした彫りの深い男の顔が見えた。男は次郎を睨みつけていた。その目は鋭く光っていて、海底で岩の隙間から獲物を狙ううつぼのようだった。

「お忙しい時間に申し訳ありません」

深々と頭を下げた。

ドアの隙間から男を見ると口元を歪め、次郎の頭の天辺から爪先までを鋭い目で舐めるように見ていた。男の年齢は三十歳くらいだろうか、自分よりは年上だろう。

「それで？」

男は面倒くさそうにボサボサの頭をポリポリと掻いた。

「あ、あの、と、となりに引っ越してきた、瀬川です」

「それは、さっきインターフォン越しに聞いたけど」

男は不機嫌そうに頬の辺りを掻いた。

「あ、そ、そうでしたね。こ、これ、お近づきの印にと思ひまして」

次郎はクッキーの入った紙袋をドアの隙間から差し出した。

「隣か？」

男は顎の先を二〇五号室の方に向けた。

「はい、隣の二〇五号室です。よろしくお願いいたします」

男は部屋の中を次郎に見られたくないのか、ドアを大きく開けようとはせず、三十センチほどの隙間から自分の大きな体をスルリと滑らせて外に出てきた。外に出てから後ろ手にドアを閉めた。

前に立つ男は次郎より二十センチくらい背が高く、がっちりとした体格をしていた。男は次郎を見下ろした。

次郎の目の前には男の厚い胸板が広がり、次郎は男を見上げるような形になった。

次郎を見下ろす男と目が合って縮みあがりながらも、「こ、これを、ど、どうぞ」と、もう一度男の前に紙袋を差し出した。

「なんで隣なんだよ」

男は上から次郎を睨みつけてきた。

「すみません。空いていたので不動産屋さんに二〇五号室をお願いしました」

どこの部屋に引っ越してこようがこっちの勝手だろうと思ったが、間違ってもそんなことを口に出せる相手ではない。口に出した途端、きっとボコボコにされるだろう。

「あんまり、物音たてんなよ」

男は後頭部のあたりを掻いていた。

「あ、は、はい。それは気をつけます」

「絶対だぞ」

男は次郎の鼻先に人差し指を向けた。

「は、はい、ぜ、絶対に」

こんなことを言われると、ちょっとした生活音にも気をつかわなければならない。いきなり厳しい展開になった。

「それならいい。わかった」

男はドアノブに手をかけ部屋に入ろうとした。

「そ、それと、こ、これを」

次郎は男が受け取ろうとしないクッキーの紙袋を男の目線まで上げた。

「これなに？」

男が顎で紙袋を指した。

「お口に合うかわかりませんが、クッキーです。よろしかったら召し上がってください」

「ふーん、クッキーね」

男は紙袋を片手で受け取って、紙袋の中を覗きこんだ。

「よろしくお願いします」

次郎は頭を下げてから、この人はなぜこんなに不機嫌なんだろうとぼんやりと男の厳つい顔を眺めていた。

「もう入っていい？」

男はドアノブを引いた。

「あっ、あの、お名前をおうかがいしてもよろしいですか」

「俺のか？」

男は口元を歪めた。

「そ、そうです」

お前以外に誰がいるんだよと、心の中だけで呟いた。

「あ、あー」

男は後頭部を掻いて、顔をしかめた。

「ダ、ダメなら結構です。すいません」

「三浦、だけど」

「三浦さん？ あ、そ、そうですか。で、では、三浦さん、これからよろしくお願いします」

次郎は深々と頭を下げた。

「わかった、じゃあな」

三浦はドアノブを引いて、また三十センチほどだけドアを開けて、滑り込ませるようにして体を部屋の中に入れた。三浦の体が中に入った途端にドアが勢いよくバタンと閉まった。

次郎は閉まったドアをじっと見つめ、いきなり一癖も二癖もある住人だったなどため息を吐いた。

胃に鈍く差し込むような痛みを感じた。ここに住む残り三人はどんな住人たちなんだろう。残りの三人に挨拶に回るのが少し憂鬱になった。

このまま挨拶はやめてしまおうかとも思ったが、どうせ顔を合わせることになるなら、前もってどんな人たちか知っておいた方がいいと、勇気を奮い立たせた。

次郎は一旦、部屋に戻って一息つくことにした。

二〇三号室の住人

次郎は二つ目のクッキーの紙袋を手を持って次の二〇三号室のドアの前まに立っていた。

「フー」と息を吐いてからインターフォンに人差し指をのせた。

二〇四号室の三浦という男のせいで、なかなかインターフォンを押す勇気が出せなかった。

また怖そうな人が出てきたら嫌だなど、胃の痛みがきつくなるのを感じた。もしかすると、このマンションは反社会的な人ばかりが入居してるのではないだろうか。

だから、新しくてきれいで好立地なマンションなのに家賃が安いんじゃないだろうか。一般の人が入居してもすぐに出ていくから、こんなに空きが多いんじゃないだろうか。

そんなことばかり考えて、インターフォンのボタンに人差し指をのせたまま時間が過ぎていった。

「何してるんですか？」

背中から鋭利な刃物のような高く響く冷たい声が聞こえた。慌ててインターフォンから人差し指を引っ込め、声のする方向に視線を向けた。

そこには女性が立っていた。ひつつめ髪の黒縁のメガネをかけた化粧っ気のない女性だった。年齢は次郎より少し上、二十代後半か三十歳くらいだろう。女性は眼鏡の奥の一重瞼のつり上がった細い目で次郎を射ぬくように見ていた。

「あなた、誰？」

女性は眉間に皺を寄せ、訝しげな表情で次郎を見てきた。次郎は金縛りにでもあったかのように動けなくなった。

「あっ、え、えっと」

「もしかして、あなた、下着泥棒、それとも、チカン」

女性は次郎の顔を覗きこんできた。女性の眉間に一段と深い皺が入った。

「い、いえ、ち、ちがいます。ちがいます」

次郎は右手と首を同時に何度も横に振った。

「じゃあ、なんで人の部屋を覗いてたのよ」

女性が一步二歩と詰め寄ってくる。

「覗いてなんてしていません。誤解です」

「嘘おっしゃい。今、ドアの隙間に顔を当ててたじゃない」

「そんなことはしていません。インターフォンを押そうとしていただけです」

「そんな言い訳はいいから、ここからさっさと立ち去りなさい。さもないと警察呼ぶわよ」

女性はヒステリックにキンキンと高い声を出した。
「本当です。部屋を覗こうなんてしていません。インターフォンを押そうとしてただけです」

「そんな嘘が通用するわけないでしょ」

女性は悲鳴のような大声を張りあげ、持っていたバッグを頭の上に振り上げて、次郎の頭めがけて振り下ろしてきた。次郎は後ろに下がり、それを何とかかわした。

女性の振り下ろしたバッグは空を切った。女性の細くて華奢な体は遠心力のついたバッグに振り回され、前のめりに体勢を崩した。

次郎は目の前で倒れそうになった女性を支えようとして、右手を差し出し女性の左の二の腕を握った。

「大丈夫ですか」

次郎が女性の二の腕を握ったまま言うと、「キャー、チカーン」と女性は大声を張り上げ次郎の右手を振り払った。

「このチカン、いい加減にきなさい」

女性はそう言って、今度はバッグを横に勢いよく振った。遠心力のついたバッグは次郎のこめかみにヒットした。当たった瞬間、目の前に火花が散った。次郎は頭がクラッとして膝から崩れ落ちた。

それでも女性は容赦することなく、地面にひざまづく次郎の頭に向けてバッグを何度も振り下ろした。

「すいません、すいません。このとおりです。もう許してください」

次郎は床に膝をついたまま、両腕で頭を庇いながら謝り続けた。

「このチカン。早くこのマンションから立ち去りなさい。でないと本当に警察呼ぶわよ」

女性はひつつみの髪を振り乱し、キンキン、キンキンと怒鳴った。

「本当に怪しい者じゃありません」

「怪しい者じゃないわけないでしょ。他人の部屋の前でじっと立ってるんだから、怪しいに決まってるでしょ。それにさっき私の体を触ってきたじゃない。チカンの現行犯よ。警察に連絡されたくなかったら、すぐにここから立ち去りなさい」

次郎の前で女性は仁王立ちし、肩を上下させ息を切らしながら次郎を睨みつけていた。

次郎は泣きそうになりながら女性を見上げた。女性は肩で息をしていた。色のない唇はきつく結ばれ、黒縁眼鏡の奥に光る細い目は一段と細くなり次郎を睨み続けた。

「今日、二〇五号室に引っ越してきた瀬川次郎といます。決して怪しいものではありません」

次郎は胸の前で両手を組み神様に祈るようなポーズをとった。

「ここに引っ越してきた？」

女性は口元を歪めた。

「は、はい。そ、それで、引っ越しのご挨拶にと思ひまして、こ、これを」

バッグで殴られた拍子に床に飛んでしまったクッキーの紙袋を拾い上げ、ひざまづいたまま女性の目の前に両手で差し出した。

「関急百貨店ね」

女性は紙袋に書いてあるマークを首を傾げながら見て呟いた。

「はい、さっき駅前の関急百貨店で買ってきました」

女性は、「ふーん」と言いながら、紙袋を受け取った。

「これからよろしくお願いします」

そのまま土下座した。

「引っ越してきて、挨拶にきたことはわかりました。これは遠慮なく受け取らせていただきます」

女性は抑揚のない声で言った。

「はい、よろしくお願いします」

「ですが、あなたを信用したわけではありませんから、こんなものでわたしを釣って近づこうとはしないでください」

「あ、い、いや別にこれで釣ろうなんて気はありませんが……」

「あなたは男性でわたしは女性です」

女性は次郎の言葉を遮った。

「は、はい」

下心があるように思われてしまったのだろうか、決してそんなつもりはないのに、どう説明すればわかってもらえるのだろうか。

「今後、くれぐれもわたしには近づかないでください。言葉もかけないでください。挨拶もしなくて結構です」

「挨拶もダメなんですか」

「以上。それでは、すぐに立ち去りなさい」

女性は次郎の質問には答えようとせず、どこかにある銅像のように右手を腰にあて、左手の人差し指を二〇五号室の方に向けた。

「えっ、あ、はい。あの一」

「なんですか。用件は終わったはずですよ」

「お、お名前だけでもお聞かせ願えませんか」

次郎が言うと、女性は唇を噛みしめ、細かった目を今度は大きく見開いて次郎を睨み付けた。

やばい、本当に警察に通報される。

「い、いや、いいです。す、すみません。すぐに帰ります」

次郎は慌てて立ち上がり、踵を返して二〇五号室の方へとフラフラしながらも早足で歩いて行った。

二〇三号室のドアが『バーン』と激しく閉まる音を背中で聞いた。その音に体を竦めた。

部屋に入ってドアを閉め、ドアにもたれるようにして玄関に立つと、「ハァー」と深いため息が勝手に出た。

二〇四号室の三浦は無愛想で厳つい感じだし、二〇三号室の女性はヒステリックな感じだし、これから物音を立てないように注意し、廊下などで顔を合わせても挨拶せずに、出来るだけ刺激しないようにしなければならない。

このマンションに住む限りずっと神経をすり減らさなければならないのかと思うと、次郎は憂鬱な気分になった。

同じ二階に住む二人の挨拶だけで疲れはピークに達してしまった。日中の引っ越しで疲れたと思っていたが、今から思えば、あんなのは屁みたいなものだ。

これから残りの一階に住む二人の住人に挨拶に行く気持ちは削がれてしまった。

関急百貨店の女性店員は愛想が良くて可愛かったのと思う。ここに引っ越してきて、手土産を買いに関急百貨店へ行き女性店員に出会った時は、引っ越し初日から幸先がいいと思っていたのにとため息が出た。その後、こんな最悪な展開になろうとは思ってもしなかった。

あの関急百貨店の女性店員のような女子がこのマンションに入居してくれていれば、薔薇色の一人暮らしになったろうにと、次郎は天井を見上げた。

少し休憩をとり、気を取り直してから三つ目の紙袋を手にも部屋を出て一階へと階段を降りていった。

一階に下りて、挨拶に向かう前にポストでさっきのヒステリックな女性の名前を確認することにした。

二〇三号室の下に書いてある名前は『見市』となっていた。ついでに二〇四号室を見ると『石中』と書いてある。さっきの凶暴な男は、確か『三浦』と名乗ったはずだがと首を捻った。あの男性が嘘をついたのか、その可能性は十分にある。まあ、どちらでもいい。この先、あの男性と関わることはないだろうから。

今から向かう一〇三号室は『浦川』となっていて、もうひとつの一〇四号室には名前が入ってなかった。

男性だろうか女性だろうか、それは、この際どちらでもいい。とりあえず普通の人が出てきてくれとポストに向かって手を合わせた。

一〇三号室の住人

二〇三号室のこともあるので、一〇三号室では、躊躇することなくインターフォンのボタンを押した。

次郎が緊張して待っていると、インターフォンから「はい」という女性の声が聞こえた。高くて澄んだ声だ。さっきの二〇三号室の見市というヒステリックな女性とは声の質が違う。少し胸を撫で下ろした。

「お忙しい時間に申し訳ありません。今日、このマンションに引っ越してきた瀬川といいます。ご挨拶におうかがいしました」

インターフォンに顔を近づけ、一気に言った。言い終わってから、「フー」と息を吐いた。

「ちょっと待ってくださいね」

インターフォンから聞こえてくる声を聞いて若くて可愛い女性の姿が頭に浮かんだ。うん、今度はまともそうだし期待が持てる。

しばらくすると、ガチャと鍵がはずれる音がして、ドアが少しだけ開いた。

次郎は一つ咳払いをしてからドアの隙間に向かって声を発した。

「お忙しい時間に申し訳ありません」

頭を下げてから、目だけを上げてドアの隙間から住人の顔を覗き見た。

どんな人だろう。インターフォンの声の感じだと若い女性のように思えた。今度はチカンと間違われないように注意しなければならない。

「えー、うそやろ。まさかと思たけど、やっぱりそうやん」

一〇三号室のドアの隙間から高くて裏返る声が聞こえた。

次郎がドアの隙間から声の主を見ると、彼女は人差し指を次郎に向け、大きく開けた口に手のひらを当てていた。

「あーっ」

次郎も住人の顔を見た瞬間、思わず声を発した。そして、その住人と同じように人差し指をその住人に向け、大きく開いてしまった口に手のひらを当てた。

「すっごーい、偶然。ビックリやわ」

その住人は目をパチクリさせていた。

「そ、そうですね」

次郎の声は上ずってしまった。

そう言えばポストの名前は『浦川』となっていた。次郎の心臓が一気にはね上がった。関急百貨店の女性の名札を確認した時、『浦川』だった。まさかここで会えるとは思ってもみなかった。

「あー、それ、持ってきたんやね」

彼女は次郎の持つ紙袋を指差した。

「はい、あなたがおすすめてくれたクッキーです」

次郎の声は興奮して上ずった。さっきの関急百貨店の女子店員が、今日の前にいるのだ。このクッキーを買った時に一目惚れしたかもしれない、可愛い女子が目の前にいる。まさかまさかの展開だ。

彼女にまた会いたいと思っていた次郎は完全に舞い上がった。こんな偶然があるとは。これは絶対に運命的な出会いに違いない。この時は二〇四号室と二〇三号室の挨拶での災難は次郎の頭から一気に吹き飛んでいた。

「そっかー、あん時、このマンションの人ってわかってたら、もっと高くて美味しいもんおすすめたのになー。あー、失敗したなー」

可愛い女子は髪の毛がグシャグシャになるくらいに頭を掻きむしった。

「えっ、ど、どういうことですか。あの時、これが店の人気商品でおすすめてですって笑顔で言ってくれましたよね」

「あたし、そんなこと言ったっけなー。覚えてへんわ。なんせ、あん時はもう帰る時間やったしさー。そやのに、あんたが買いに来たから帰られんへんようになってしもうて、だから早く終わらせたかったんよね。で、あんたがそのクッキー、見てたから適当におすすめたんよ」

彼女はそう言った後、口を横に広げてニッと笑った。

適当におすすめただと、次郎は耳を疑った。関急百貨店の洋菓子売場での彼女の態度は適当だったってことなのか。今、目の前にいる女子は、あの時の女子店員と同一人物とは思えなかった。

可愛いらしい顔は同じだが、話し方や仕草は洋菓子売場での清楚でおしとやかな印象とは全く違いがさつだ。

百貨店の制服の白いフリルのついた黒のワンピースはすごく似合っていたが、今はシワの残る派手な赤色のスウェットの上下を着ている。百貨店でベレー帽を被っていた頭はさっき髪の毛を掻きむしったせいで山姥のようにボサボサになっていた。

「そうだったんですか」

次郎の声は錆びたように掠れた。そして、次郎の首はガクリと折れた。

「誤解せんといてや。別に騙したわけやないで、そのクッキーが店の人気商品なんは、ほんまなんやから」

彼女は項垂れる次郎の顔を覗きこんだ。

「そ、そうですか」

次郎の発する声は語尾が掠れ消えそうになっていた。

「それよりさー、あんた、引っ越しの挨拶に来たんちがうの」

彼女が口を尖らせた。

「そ、そうですが」

次郎は項垂れたまま蚊の鳴くような声で言った。

「そしたら、さっさと名前とか、教えてーや」

彼女は腕を組んで口を尖らせた。

「あ、ああ、二〇五号室に今日引っ越してきた瀬川次郎と言います。よろしくお願ひします」

心が折れていたが、彼女に向かって丁寧に頭を下げた。

「あっそう。瀬川の次郎ちゃんね。二〇五号室やったら二階の一番奥の部屋やんね。あたしは浦川優香。優香ちゃんって呼ばせてあげるわ。関急百貨店で働いてるのはバレてるよね。ところで、あんたは何してる人なん？」

いきなり初対面(正確には二回目だが)の人間に対して次郎ちゃんはないだろう。それもこっちは年上だぞ。この女子も変わっている。

「あっ、僕は家電量販店のカマダ電気で働いています。急に転勤が決まったので、今日ここに引っ越してきました」

「ヘー、カマダ電気か。じゃあさ、携帯とか家電とか買う時は願ひするわ。従業員価格とかで安く買えるんやろ」

「いや、えー、そりゃあ、少しは安くはなりますが」

いきなりこんなことを願ひしてくる神経もわからない。

「あっ、それから、あん時、あれ、買わなかったっけ」

優香が次郎に人差し指を向けた。

「あれってなんですか？」

次郎は首を捻った。

「あれあれ、あれやんか。フルーツたっぷりゼリーケーキやん。たしか二つ買ってたやんな」

「あ、あー、買いました」

女性店員が、自分に微笑んでくる顔が可愛く魅力的すぎて、自分の食べる分一つだけでよかったのに見栄をはって二つも買ってしまったのだ。その店員が目の前にいるこのがさつな女子だったのかと思うとやはり女は怖いと思った。

「もう食べたん？」

「えっ、何をですか」

「あんた、頭悪いんか。今、フルーツたっぷりゼリーケーキのこと言うてたやろ。そんならフルーツたっぷりゼリーケーキに決まってるやろ」

「ああ、そうですね」

「まさか彼女といっしょに食べたなんて言わんといてや」

優香は頬を膨らませ目をつり上げていた。

「いや、まだ食べてないです。今、冷蔵庫に入れてあります」

「じゃあさ、今からいっしょに食べへん？ どうせ、あんたは彼女とかいてへんやろうし、二つもいらなかったんちがうん？ だからあたしが食べたげるわ。あたし、前からあれ食べたかったんよねー」

「あたしが食べたげるですか」

「そうやで」

なんてわがままなやつなんだ。自分が買ったケーキなのに、なぜお前が食べると勝手に決めるんだ。それも『食べたげる』とは、生意気にもほどがある。食べさせてくれと願ひするならまだわかるが、やはり、この女は絶対に頭がおかしい。

「うん、今から二〇五号室に行っていっしょに食べようや」

「いや、あれは僕のケーキですから」

「それくらいわかってるわ。あたしか売ってあげたんやから」

あたしが売ってあげただと、こっちが買ってあげたんだ。大人げないことを言っても仕方がない。今日から住むマンションの住人だし、これまでの二人よりは好意的だし、まだましかと気を取り直すことにした。

フルーツたっぷりゼリーケーキは、この女子のせいで二つも買ってしまったが、どうせ二つもいらぬし、この女子に食べさせてやってもいいのかなと思ひ始めた。

「じゃあ、部屋に戻ってケーキ取ってきます」

次郎はそう言っ一〇三号室を後にしようとした。

「あんた、なに言うてんの」

優香がなくてキツイ声を発した。

「はあ？」

なぜ、この女子が声を荒げたのかがわからなかった。

「次郎ちゃんの部屋でいっしょに食べようや。あたし、さっきそう言うたやろ。やっば、あんた頭悪いんか」

彼女が自分の頭に人差し指を向けた。

「僕の部屋でいっしょに食べるんですか」

次郎は目を見開いた。この女子は一人で自分の部屋に来るつもりなのか。そうなると、次郎はこの若い女子と部屋で二人きりで過ごすことになるわけだ。これまで女性と付き合い合ったことのない次郎にとって、はじめての経験だ。それを一人暮らしの初日にして、達成してしまうことになるのか。

「そうやで。今から準備するから、ちょっと待っててや」

次郎が呆然としていると、優香は一度奥の部屋へと姿を消した。部屋の奥からガサコソ物音がした。次郎は部屋の中に首を伸ばした。

「覗いたらあかんでー」

優香の音がして、伸ばしていた首を引っ込めた。

次郎は嬉しいような怖いような、期待と不安を抱きながら、優香が出てくるのを待った。

可愛い住人

「お待たせ、じゃあ、行こっか」

優香が玄関に姿を現しサンダルをひっかけた。本気で次郎の部屋に一人で来るつもり
のようだ。

彼女はさっさと部屋に鍵をかけ、「よし」と言って、先を歩いて行った。次郎は早足で
歩いていく優香の背中を追いかけた。

優香は軽やかにサンダルをタンタンと鳴らしながら階段を上って行った。次郎も続
いて階段を上った。先に階段を上がる彼女の小さなお尻が目の前で揺れている。次郎
の下半身が反応した。次郎はブルブルと頭を振った。

「あ、あのー」

次郎は優香のお尻から少し視線を上げて背中に向かって声をかけた。

「なあに？」

彼女は階段の途中で振り向いて次郎を見下ろした。その時の笑顔は関急百貨店で見た
時と同じ可愛いものだった。

「いや、僕がこんなこというのもなんですが、若い女性が、男の部屋に一人で入るのっ
て抵抗ないのかなと思ったんですけど」

「男の部屋って、どういうこと？」

優香は眉間に皺を寄せて首を捻った。

「いや、あのですね、こんな時間に男の部屋に女性が一人で入るのって抵抗ないのかな
と思ひまして」

「言ってる意味がようわからへんねんけど」

言ってる意味がわからないという意味の方がよくわからない。

「えっ、いや、あのですね、あなたは今から僕の部屋に一人で来て、そこでフルーツたっ
ぷりゼリーケーキを食べるつもりなんですよね」

「そうやけど。それがどないしたん？」

優香はもう一度首を捻った。

「だから、君は一人で僕の部屋に入るつもりってことですよね」

「だから、なに？」

優香がイライラした様子で口を尖らせた。

「えっ、い、いや、だ、だからですね、これから僕の部屋で僕と君と二人っきりになるわ
けですから、男と女が同じ部屋に二人っきりっていうのは、どうなのかなと思ひまして、
それで……」

次郎は俯き加減にモジモジと話した。

「あ、あー、そうかそうか、そういうことかー。次郎ちゃんも男だってことを言いたいわけか。ハハハ、次郎ちゃんが男やってこと完全に忘れてたわ。それよりフルーツたっぷりゼリーケーキを食べれることで頭がいっぱいになったわ。ハハハ」

優香が手を叩きながら笑った。

「忘れてたって、そ、それ、ど、どういうことですか」

「次郎ちゃん、会って間もないけど、なんか男って感じしないんよね」

優香が腕を組んで首を傾げた。

「一応、男なんですけど」

次郎は少しムツとして口を尖らせた。

「機嫌悪したん？ ごめん。次郎ちゃんはあたしに男として見てほしかったのかな」

優香は次郎の顔を覗きこんできた。

「そりゃそうですよ。僕は男なんですから」

「それって、もしかして、今からあたしを部屋に連れ込んで変なことしようとか、思ってたからなんやろか」

変なことをしようと考えていたわけではないが、自分の部屋に若い女性が一人来るとなると、少しは頭をかすめてしまうのは当然のことだろう。それに連れ込むわけではなく、そっちが強引に部屋に来ようとしているのだと心の中で反論した。

「ち、ちがいます。僕から見たら、君は女性というよりまだまだ子供です。僕も君のことを女性としては見てません」

次郎は優香の顔を見ることが出来ず、俯いたまま言った。

「そっか、そっかー、確かに次郎ちゃんから見たら、あたしはまだまだガキやもんね。変な女やし、頭の中はまだまだ子供でパッパラパーやからね」

自分でも変な女という自覚はあるようだ。

「そ、そう。ほんと、君は、まだまだ子供ですよ」

やっぱり優香の顔を見ることはできなかった。

「でもねー、頭の中は子供でも、体は意外と大人の女なんだよねー。胸とか、そこそこ自信あるんやけど。次郎ちゃん興味あるんやったら、ちょっとだけ見せただけでもええよ」

優香は赤くて派手なスウェットのチャックを下げた。

「そんなのに興味あるわけないです。子供は、さっさとケーキ食べて、部屋に帰って歯磨いて寝てください」

次郎の視線は一瞬、優香の胸元にいってしまった。スウェットのチャックが開いて見えるTシャツからだど、胸の膨らみがはっきりとわかった。確かに視線が釘付けになってしまうほど魅力的だったが、次郎は無理矢理に彼女の胸元から視線を剥がした。

「へへへ、次郎ちゃん、興味ありそうやね」

優香が次郎に向けて胸をつきだしてきた。

「興味あるわけないでしょ。早く行きますよ」

次郎は慌てて、彼女の横をすり抜けて階段を上がって行った。階段を上りきって、優香の方に振り向くことなく、そのまま廊下をまっすぐに早足で歩いて行った。心臓が飛び出しそうなくらい胸がバクバクした。下半身が反応するのを必死で堪えた。

「次郎ちゃん、待ってよー」

優香の声が廊下に響いた。

ここで大きな声を出すな。三浦の怒る顔が浮かんで、優香の方に振り向き、口の前で人差し指を立てた。

「シーッ、静かにしてください」

次郎は声を殺した。

「はい」

優香が幼稚園児のように、笑みを浮かべて右手を上げた。それを見て不覚にもやっばり可愛いなど見惚れてしまった。

ここで大声を出されるのは絶対ヤバイ。三浦の厳つい顔が脳裏をかすめた。

「早く、中に入ってください」

二〇五号室のドアを開け、まだ片付いていない部屋へと優香の背中を押した。

「キャー、エッチー」

背中を押された彼女がまた声を上げた。

「シッ、静かにして下さい」

次郎はまた人差し指を口の前に立てた。

「次郎ちゃん、どうしたん？」

「隣の三浦さんって人、騒がしくすると怒ってくるかもしれないんです。さっき挨拶に行ったら、物音たてるなよって凄まじまりました。ですから、ここでは静かにお願いします」

「はい」

優香はまた右手を上げた。今度は声を殺して返事をした。

「その調子でお願いします」

「はい。じゃあ静かに邪魔しまーす」

優香は声を殺したまま言って、部屋に入り、上下左右に首を動かし次郎の部屋を見渡した。

「まだ片付いてないですけど、空いてるところに適当に座ってください。すぐにケーキ出しますが、飲み物は缶コーヒーくらいしかないのですが、いいですか」

次郎は落ち着くことができず、部屋のなかをウロウロと歩いた。

優香は「うん」と言ってテーブルの前に腰を下ろし胡座をかいた。

次郎は冷蔵庫からケーキの入った箱と缶コーヒーを取り出し、「はい」と言ってテーブルの上に置いた。

優香は「ありがとね」と次郎に向けてニッと笑った。その笑顔も可愛かった。

次郎は「は、はい」と返事したあと俯いてしまった。興奮して彼女の顔をまともに見ることが出来なかった。

「フォークかなんかないの？」

優香が箱を開けてケーキを取り出した。

「あ、はい、そうですね、スプーンでもいいですか」

フォークはないが、どこかにスプーンならあったはずだ。まだ開けていない段ボールの中を探してみた。

「次郎ちゃんも座って、いっしょに食べようやー」

「ちょ、ちょっと待ってください。今、スプーン探してますから」

段ボールの中からスプーンを見つけだして、さっと洗って彼女にひとつ渡した。

関急百貨店でこのケーキを買う時には、まさかその女子店員といっしょに、しかも自分の部屋で二人きりでケーキを食べることになろうとは夢にも思わなかった。次郎は興奮をおさえようと大きく息を吐いてから、スプーンを手にして優香の前に腰を下ろした。

「このマンションの住人の挨拶は、まだ終わってないの？」

優香がテーブルの上に置いてある残り一つになった髪袋の中のクッキーを覗きこんだ。

次郎はそこで大事なことを思い出した。この後、残りの一〇四号室に挨拶に行くつもりにしていた。優香とケーキを食べている場合ではなかった。

「そうだ、まだ一〇四号室の人の挨拶がまだだったんです。僕、今からちょっと行きます」

次郎は慌てて腰を上げた。

「今はいてへんで」

優香が言ってケーキを口に放り込んだ。

「はっ？」

次郎は優香の顔を見た。彼女は次郎を見上げて口をモグモグさせながら頷いた。それから缶コーヒーのプルトップをパチッと開けた。

「一〇四号室はね、原田太一くんっていう男の子が住んでんやけど、今はいてないわ」

「今はいないんですか」

「そう。太一くんは駅前の『ドンドン』っていう居酒屋で働いてるから、帰るのはいつも夜遅いね」

「そうですか。それなら、今行っても無駄ってことですね」

「だから、次郎ちゃん、ゆっくりしとき」

優香は次郎を見上げてニッと笑った。

「その一〇四号室の原田太一くんと君は仲がいいんですか」

「そうやね。太一くんとはこのマンションで一番仲良くしてるかな」

次郎はそれを聞いて、なぜか胸がモヤモヤとした。優香はその原田太一という男の部屋の一〇四号室にもこうして平気で入っているのだろうか。

「そいつの歳はいくつくらいですか？」

つい、原田太一のことを『そいつ』と言ってしまった。

「うーん、たしか二十三歳だったと思うけど、体がでかくて歳より老けて見えるけどね。もし今日会えなかったら明日にでも、『ドンドン』に行ってみたらいいよ。体がでかくて目立つから、すぐにわかると思う」

「二階に住む二人のことは知ってますか」

さっき散々な目に合った二人について訊いてみた。

「二〇三号室のろくろっ首と二〇四号室の無愛想なフランケンやろ」

優香はケーキにスプーンを刺しながらそう言った。

「ろくろっ首と無愛想なフランケンって、それなんですか」

「あたしが勝手にあだ名つけてんねん。ついでに太一くんはヌリカベ」

ろくろっ首とフランケンは無愛想なあだ名だと思いが、確かにヒステリックな二〇三号室の女性は首が細くて長かったし三浦という男はがっちりした厳つい体をしていて。そ

れなら、今、目の前で遠慮もなく他人のケーキを食べながら生意気な口をたたくこの女はわがままな猫娘だろうか。

「なぜ、原田君はヌリカベってあだ名になったわけですか」

「すごく体がデカイからね。それだけの単純な理由」

優香はスプーンを咥えたままニッと笑みを浮かべた。

次郎はこのあと自分にはどんなあだながつけられるのだろうかかと気になった。

「二〇三号室の女の人は、ポストで名前を確認しましたが、見市さんでいいんですか？

さっき、本人に訊いたんですけど教えてもらえませんでした」

「そう。ろくろっ首の本名は見市麗子さん。あたしには、すごくいい人なんだけどね。太一くんも苦手って言ってた」

「さっき、僕のことを下着泥棒か痴漢と勘違いしたみたいで、ほんと散々でした」

次郎は箱のなかから、残っているフルーツたっぷりケーキゼリーを取り出した。

「勘違いじゃなくて、本当に下着でも盗もうとしてたんちゃうん？」

優香が次郎にスプーンを向けて笑みを浮かべた。

「失礼なこと言わないで下さい。神に誓ってそんなことしませんよ」

「そんなマジにならんでもええやん。冗談やん。ろくろっ首は男嫌いみたいやからね。男の人が近づいてくるのが耐えられへんみたい。めっちゃ美人やのにもったいないわ」

「あの人、男嫌いなんですか」

「太一くんも、ろくろっ首には避けられてるって言ってた。挨拶もしてくれへんし、いつもバイ菌でも見るような目で見られるんだって。麗子さん、あたしには普通に挨拶してくれるし話もするんだけどね」

「僕に対してもバイ菌でも見るような目をしてましたね」

「ろくろっ首は高校の教師だから、ちょっとお堅いんよね」

「あの人、高校の教師ですか。言われてみれば、そんな感じがしますね」

「東上学園高校ってどこだけど、次郎ちゃん知ってる？」

「ああ、頭のいいお嬢様学校ですよ。名前くらいは有名ですから知ってます」

「みたいだね。あたしはあんまり高校のこと知らんのよね」

「出身は地元じゃないんですか」

「地元だけど、頭のいい高校には縁がなかったし、興味なかったからね。うーん、やっぱり、これ美味しかったわ。次郎ちゃん、ありがと」

優香がフルーツたっぷりゼリーケーキを食べ終えて、次郎に向けて両手を合わせ笑みを浮かべた。

「そうですか、それはよかったです」

「ろくろっ首女史は、男の人は下手に近づかない方がいいみたいね。そうしとけば特に害はないよ。問題はフランケン。あれは厄介な気がするな」

優香が顔をしかめた。

「三浦さんのこと、よく知ってるんですか」

「うーん、知らない。挨拶しても無視されるからね。こんなに可愛いあたしにもこーんな感じの怖い目で睨んでくるし」

優香が目を細めて怖い顔を作って見せた。その顔も可愛い。

「そうなんですか。僕もさっき挨拶に行った時に面倒くさそうに怖い顔して睨まれました。挨拶なんて、さっさと終わらせろって感じでした」

「フランケン、なんか怪しいよ。犯罪のにおいがプンプンする。あたしね、フランケンは指名手配犯じゃないかなと思ってんの。人と顔を合わすのを絶対に避けてるからね」

「言われてみれば、僕と顔を合わせようとしませんでした。それに部屋の中を僕に見られないようにしていました」

「フランケンはこっちの部屋でしょ」

優香が人差し指で三浦の部屋側を差した。

「そうです」

「たまーに、あたしの部屋の天井から変な物音が聞こえてくるんだよねー。たぶん、フランケンの部屋からやと思うねん」

優香は三浦の部屋側の壁に近づき、壁に耳を当てた。

「変な音ですか」

優香が「シッ」と言って、壁に耳をあてたまま口の前で人差し指を立て目を閉じた。次郎は「はい」と言って右手で口を塞いだ。

優香はしばらく壁に耳を当てたまま黙って目を閉じていた。部屋が静まり返り冷蔵庫のモーター音が部屋に響いた。

次郎は優香の横顔をじっと見つめているうちに鼓動が激しくなった。整った長い睫毛に肉薄の鼻梁、薄くて淡いピンク色をした唇、やはりこうして見ると可愛い。次郎は優香の頬に顔を近づけていった。

次郎は息を殺し、優香の頬まで三十センチくらいの位置まで自分の顔を近づけた。それでも優香は壁に耳を当てたままじっと目を閉じていた。優香きらい匂いがした。次郎はもう我慢できなくなった。優香の頬に触れたい、キスしたいと思った。次郎の鼻息は荒くなった。

「フゥン、フゥン」

その鼻息で優香が大きな目をぱっと開けた。

次郎と優香の目が間近で合って見つめ合う形になった。次郎はそこでまた「フゥーン」と一段と大きな鼻息をたてた。

「うわっ、顔でか」

優香が大きな声を発して、後ろにのけ反った。次郎は優香の声にビクッリして尻餅をついた。

「な、なにか聞こえましたか」

次郎は尻餅をついたまま慌てて訊いた。

「なーんにも聞こえへん。それより、次郎ちゃん、今、あたしに変なことしようとしてたんちゃうか？　すごい顔近かったし鼻息もめっちゃ荒かったよ」

優香が目を細くして次郎を横目で睨んだ。

「ち、ちがいます。僕も壁に耳を当てて三浦さんの部屋の物音を聞いてみようとしただけです」

「そうかな」

優香は疑いの目で次郎を見た。

「そ、そうですよ」

「それにしても、次郎ちゃん、近くで見ると顔でかいね。子泣きじじいみたい。これから次郎ちゃんのこと、エロい子泣きじじいでエロ子泣きって呼ぼうかな」

「そんな変なあだ名はやめてください。僕はエロじゃないです」

「そうかな。さっきの顔はなかなかエロかったよ」

「別にエロい顔なんてしてません」

次郎は顔が熱くなった。

「いやいや、そこそこというか、めっちゃエロかったで。あたし犯されるか思ったもん」

「君みたいな子供に興味はありません」

「あっそ。ろくろっ首みたいな大人の女の方がええんかな」

優香がすねたように口を尖らせた。

「それも絶対はないです。これからあの人と顔合わせるだけで、怒られそうで緊張しそうなのに」

「ろくろっ首は綺麗な顔してるし魅力的やで。化粧もせんと暗ーい表情してるから、あれやけど、眼鏡はずして化粧したら、男は放っておかんと思うけどな」

「確かにスラッとして、スタイルはよかったですね」

次郎が宙に視線を向けて、頭の中に見市麗子の全身を思い浮かべた。

「あー、やっぱりエロ子泣きや。引越しの挨拶やいいながら、ろくろっ首の体ばかり見てたんやろ。うわー、クソッ、妬けるなー。ろくろっ首に引越してきた瀬川次郎っちゅう男は、エロい目で麗子さんの体ばかり見てるから気ィつけるように言うとかなあかんわ」

「バ、バカ。そ、そんなこと絶対に言わないでください」

「じゃあ、絶対にろくろっ首と浮気せえへん？」

優香があまえるような声を出して次郎を見つめた。

「う、浮気って、ど、どういう意味ですか。も、もしかして、ぼ、僕たちは……」

次郎はそこで生唾をゴクリと呑み込んでから、次の言葉を発しようとした。

「次郎ちゃんって必死になるからおもしろいな。おちょくり甲斐があるわ」

優香が次郎の言葉を遮って手を叩いて笑った。

「えっ、なに笑ってるんですか」

「浮気なんて冗談に決まってるやん。なに本気にしてんねん」

優香が腹を抱えた。

「もう、いい加減にしてください」

冗談と聞いて少しショックを受けた。

「ごめんごめん。これ以上おちょくると、次郎ちゃんマジで怒り出しそうやからやめとくわ。そろそろ帰るけど、これからもよろしくね。ケーキごちそうさまでした」

優香は立ち上がった。

「あ、ああ。そ、そうですか。もう帰るんですか」

次郎は優香がそのまま帰ってしまうことに少し未練を感じながら立ち上がった。

「また店に買いにきてな。その時は、今日みたいにあたしの分も買っといてや」

優香はそう言ってドアへと向かった。

「今日は別に君のために買っておいたわけじゃありません」

ドアに向かう優香の背中に向けて言った。

「あっ、そうだ」

優香がドアの前で振り向いて手を合わせた。黒目勝ちな大きな目で次郎を見つめた。

「な、なんですか」

次郎は優香が何を言い出すのか期待した。

「次郎ちゃん、明日の七時頃、時間あいてる？」

「七時ですか」

「そう、午後の七時。明日は仕事何時まで」

「明日は残業がなければ六時にはあがれますけど」

もしかしてこれはデートの誘いではないか。

「じゃあ、明日、太一くんの働く居酒屋に行ってみいひん？ ケーキのお礼に太一くんを紹介してあげるわ。もちろん飲み代は次郎ちゃんのおごりやけど」

優香はそう言ってニターと笑った。

ケーキのお礼といいながらこっちがおごるのかよと思ったが、原田太一にも早く会っておきたかったし、生意気な小娘だけどやっぱり優香の顔は可愛いし、女性と二人っきりで飲みに行くのははじめてのことなので、お願いすることにした。

「じゃあ、明日、駅前に七時前に来て。それから次郎ちゃんの連絡先教えてくれる」

優香と携帯の番号を交換して、優香は帰って行った。部屋には微かに優香のいい匂いが残っていて、次郎は思いっきりそれを吸い込んだ。

引越しの初日は、この先このマンションで何かが起こる予感がたっぷりする一日だった。

原田太一

原田太一は今春に大学を卒業したが、就職はせずにフリーターとして居酒屋のアルバイトを続けることにした。

それまで暮らしていた学生寮は大学卒業と同時に住まなければならないので、家賃の安い部屋を探した。

なかなか安い部屋が見つからなかったが、たまたま入った街の不動産屋で格安の川西マンションを紹介してもらった。

駅から五分の好立地で、築三年とまだまだ新しくきれいなマンションだ。家賃はこの辺りの相場の半額以下という破格値だったので、即入居を決めた。

紹介してくれた不動産屋は、とっておきの特別な物件だと胸を張っていた。それなのに、入居しているのは、二〇四号室に男が一名と二〇三号室と一〇三号室に女が各一名ずつの計三名だけだった。なぜ、こんなに空きが多いのかと、入居した時太一は首を捻った。

二〇四号室に入居している男は、三浦という体が大きく厳つい男だ。たまに顔を合わせることもあるので、太一の方から挨拶しても、三浦は絶対に挨拶などしてこない。返ってくるのは、きつく睨むような視線ばかりだ。

二〇三号室の見市麗子という女も顔を合わせた瞬間から蔑むような視線を太一にぶつけてくる。だから、つい目を逸らしてしまうので、まともに言葉を交わしたことはない。

唯一、一〇三号室の浦川優香だけが、太一に親しく挨拶をしてくれ話しかけてくれる。

優香は見た目だけはアイドル並みの可愛さだが、見た目とは違い、がさつでマイペースな女だ。いっしょにいと、こっちがいつも振り回されてしまう。

優香と最初に言葉を交わしたのは引っ越しした当日だった。荷物の片付けが一段落ついてコンビニでコーヒーでも買いに行こうと、太一が部屋を出た時、ちょうど隣の部屋から優香も出てきた。

ドアの前で顔を合わせた瞬間、彼女のあまりの可愛さに心が跳ねて、なんと声をかけていいのか戸惑ってしまった。

優香はこっちが戸惑っていることなどお構い無しに、いきなり満面の笑みを浮かべて、「こんにちは」とキラキラした声で挨拶してきた。

太一は思いがけない彼女からの挨拶に、「あ、ああ」とだけしか返せなかった。

「今日、引っ越してきたんやね」

優香は続けて親しげに話しかけてきた。

「は、はい、よ、よろしくお願いします」

太一は戸惑ったが、体が熱くなるのがわかった。めちゃくちゃ可愛いじゃないかと素直にそう思った。

「今日は引っ越しの荷物運ぶ音がうるさかったわー」

優香はニコニコしながらクレームを言ってきた。

「すいません」

太一は頭を下げた。

「別にええよ、お互い様やし。その代わり、今度なにか美味しいもんでも奢ってよ」

「あ、はい、わかりました」

太一の方が優香より年上だと思ったが、なぜか敬語になってしまった。それにしても初対面で奢ってくれという神経がよくわからない。

「名前まだやったね。あたしは浦川優香。よろしくね」

「浦川優香さん……」

「そう。あんたは？」

「お、おれは原田、原田太一」

「原田太一くんね。オーケー、覚えた。じゃあね」

優香はそう言って手のひらをヒラヒラさせ、先にマンションを出て行った。

太一はスタイルのいい優香の後ろ姿を呆然と見送った。

それから、会う度に優香の方からいろいろと話しかけてくれたので、すぐに仲良くなれた。

最初は図々しい奴だなと思ったが、顔は可愛いし話していると楽しいので、その図々しさも許せてしまうというかクセになってしまう。

優香は駅前の関急百貨店で働いているので、優香の仕事に、関急百貨店に何度か訪れたことがある。別に何を買うわけでもなく、彼女の顔が見たいだけで、勝手に関急百貨店に足が向いた。

関急百貨店で働いている時の彼女は言葉遣いや立ち振舞いがマンションにいる私生活の時とは全くの別人のようだった。百貨店で仕事をしている彼女は清楚でおしとやかな女性に変身する。

太一は、私生活のがさつで図々しい優香を自分だけが知っていると思うと、なぜか嬉しかった。

昨日の夜、仕事を終えて着替えてからスマホを見ると優香からラインが届いていた。ラインには太一たちの住む川西マンションに今日新しい男性が引っ越してきて、その男性は少しエロいが悪い人ではなさそうなので、太一にも紹介したいというメッセージがあった。

太一は『少しエロい』という言葉に引っかかった。優香とその男性の間に、その『少しエロい』と思わせる何かがあったということなのだろうか。

なぜか、少し心がざらついた。仕事の帰り道、ざらついた気持ちを取り除こうとしたが、考えれば考えるほどざらついた気持ちは膨らんでいった。

明日の七時頃に太一の働く『居酒屋ドンドン』にその男性を連れて行くとラインの最後に書いてあった。

太一は優香の誰とでもすぐに仲良くなる性格に感心した一方で、これまで自分に対し優香が仲良く接してくれていたのが、特別なものではなかったのかと思うと、少し残念な気持ちになった。

今日、引っ越してきて知り合ったばかりの男性と明日居酒屋へ飲みに行く約束をするのは、若い女子のくせにちょっと無防備すぎないかと、また、そこで太一の心はざらついた。

優香のことだから、無理矢理に明日、『居酒屋ドンドン』に飲みに行く約束をその男としたのだろう。

きっと、明日の『居酒屋ドンドン』の会計はその男が支払うことになるのだろう。優香はそういう女子だ。しかし憎めないのが彼女の魅力だ。

優香と知り合って最初の頃に、「何している人？」と訊かれた。

駅前の『居酒屋ドンドン』で働いていると、太一がこたえと、「じゃあ、近いし飲みに行くから、お勘定、お願いね」と言ってきた。

知り合って間もないのに、図々しい女だなと思う気持ちと、こんな可愛い子が職場に来てくれるという嬉しい気持ちが太一の頭の中で入り乱れたことを思い出した。

今日引っ越してきた男もきっと今はそんな気持ちのはずだ。図々しいと思いつつも、優香と飲みに行けることを喜んでいるに違いない。そして、その男は優香に心を奪われていくだろう。そう思うと太一のざらつく気持ちは膨らむ一方だった。

今日は焼き場の担当で、煙に巻かれながらずっと焼き鳥を焼いている。

午後七時前、入口のドアが開き、店員の誰からともなく「いらっしゃい」の声が飛ぶ。その度に、太一は「いらっしゃい」と声を掛け、入口に視線を向けた。優香と引っ越してきた男がそろそろ現れるのではないかと思うと、そわそわして落ち着かない。

午後七時十分。やっと入口に立つ優香の姿を確認した。

優香はいつものようにニコニコと笑みを浮かべていた。いつもと違うのは、その笑みは隣に立つ男に向けられていたことだ。いつもなら、優香はニコニコしながら店内を見回して太一を探すのだ。

優香の隣に立ち、優香の笑みをひとりじめしている男がどんなやつなのか気がなくなってしかたがない。一旦、焼き鳥に視線を落として、すばやく焼き鳥を全てひっくり返してから、視線を上げどんな男なのか確かめた。

優香と男は店員に席へと案内されていた。優香は太一に気づく様子もなく、隣の男に何やら笑顔で話しかけている。男の身長は優香と変わらないくらいだ。小柄で痩せた気の弱そうな男だった。

男は優香の言う通り、悪い人間ではなさそうだが、優香に向ける、鼻の下を伸ばしたにやけた表情がどうも気に入らない。

二人が席についてから、優香が店内を見渡していた。太一を探している様子だったが、太一は手を上げることも、声を出すこともせずに、優香が自分を見つけるのを待った。

優香は太一を見つけることが出来ない様子で首を捻っていた。太一を探すことを諦めたのか、その後、テーブルに肘をつき、前に座る男の顔を覗きこんで何やら笑顔で会話を始めた。

「クソーッ」と心の中で喚いて、ムカムカする気持ちをおさえながら焼き鳥の火加減を調節した。

しばらくすると、「太一くん」と優香の声が耳に飛び込んできた。顔を上げると、優香が席についたままニコニコと太一に手を振ってきた。

太一はさっきまでのイライラした気持ちはぶっ飛んで口元を緩めてしまった。そして優香に向けて手を振り返した。

前に座っている男も太一に視線を向けてきた。目が合うと男が頭を下げてきたので、太一も仕方なくペコリと頭を下げた。

優香はこれまでも何度か店に来てくれたが、いつも一人で来て、太一に向かって手を振ってこっちこっちと手招きをして太一を呼んだ。

こっちは仕事で手が離せない時でも、優香は気にかけていない様子だった。でも、なぜかそれが嬉しかった。

しかし、今日の優香は太一を呼ぼうとしない。太一に手を振ったあと、また前に座る男と会話を始めた。

「クソッ」とまた呟いた。

「どうした？」という声に振り向くと二歳上の先輩が立っていた。

「いえ、なにも」

「なんか、機嫌悪そうじゃないか」

先輩に「クソッ」と呟いた声を聞かれてしまったようだ。

「機嫌悪くないすよ」

太一がふてくされたように言うと、先輩は太一の耳元で、「彼女が来てんな」と優香の方に視線と顎を向けた。

「別に彼女じゃないっすよ」

太一は口を尖らせた。

「照れんなよ。まっ、いいわ。ちょっとだけ焼き場かわってやるから、とりあえず行って挨拶だけでもしてこいよ。そしたら、お前の機嫌もなおるだろ」

先輩が太一の背中をポンポンと叩いた。

「別に機嫌悪くないすよ」

「わかったわかった。でも、彼女がせっかく来てくれてんだし挨拶だけでもしてこいよ」

「そうすね、すいません、じゃあ行ってきます。ありがとうございます」

太一は先輩に頭を下げた。

「今日は彼女、一人じゃないな。男連れてきてんぞ。それで太一の機嫌が悪いのか。恋のライバル出現みたいだぜ。早く行かないと盗られちゃうぞ。絶対、負けんなよ」

先輩はそう言って太一の背中を叩くように押した。

「だから、そんなんじゃないですって」

太一は先輩に押され、前のめりになりながら先輩の言葉に反論した。

「はいはい。わかったから早く行けよ」

先輩はニヤニヤと笑みを浮かべていた。先輩の好意に甘え、優香と男の座る席へと口を尖らせながら向かった。

優香と男は太一が近づいてくることに気づく様子もなく、何やら二人で話し込んでいた。

太一が二人の座るテーブルの前まで来て二人を見下ろすと、やっと優香と男が顔を上げた。

優香と目が合って、「オーッ」と太一は不機嫌そうな声を発した。

「あらー、太一くん」

優香は小さく手を振って満面の笑みを浮かべて太一を見上げた。この笑顔が可愛いので、つい口元が緩んでしまう。

「太一くん、紹介するわ。昨日、川西マンションの二〇五号室に引っ越してきた瀬川次郎さん。次郎ちゃんって呼んであげて」

優香が言うと、瀬川という男は椅子をガタガタと音をたてながら立ち上がり、「は、はじめまして、瀬川次郎です。こ、これからよろしくおねがいします」と直立不動で言うてから、四十五度のおじぎをした。

堅い奴でどんくさそうだが、好感は持てるなと思った。優香に手を出さない限りは嫌いにはならないだろう。

「どうも、はじめまして、原田太一です。よろしくお願ひします」

太一も瀬川に倣い深めのお辞儀をした。

「瀬川さんはカマダ電気で働いてるんだって。テレビとかエアコンとか、家電買うなら安くしてくれるっばいよ。太一くんもお願ひしといたらええねん」

優香のことだから、瀬川に断りもなく勝手に安くしてくれると決めつけているのだろう。

「そうなんすか」

太一は瀬川に確かめるように訊いてみた。

「ええ、まあ、できる限りは勉強させていただきます」

瀬川は頭を掻きながら、少し困った表情だった。

「でも、おれは金欠なんでテレビもエアコンも買い替える余裕はないですし、今使ってるので十分す」

「じゃあさー、この機会にスマホ買い替えたならええんとちがう。太一くんの画面割れるしね。スマホも次郎ちゃんにお願ひしたら、まけてくれると思うで」

優香がまた勝手に決めているようだ。

「本当っすか」

太一はまた瀬川に顔を向けて訊いた。

「ええ、まあ、できる限りは」

またまた、瀬川は困った表情だった。

「とりあえず、ゆっくりしていつて。おれ、今日は焼き場担当だから、あまり相手できないけど、悪いな」

「ええよ。その代わり、太一くんの焼いた焼き鳥を盛り合わせにして一皿、太一くんのおごりで頼むわ」

その代わりの意味がわからない。こっちは工作中だから、優香たちの相手ができなくて当たり前じゃないかと、太一は不満に思うが、結局おごるはめになる。

「一皿だけだぞ」

太一は人差し指を一本立てて優香に念を押した。そうしておかないと、次から次へと太一のおごりと決めつけて注文してくる。

「まっ、一皿だけでいいか。次郎ちゃんも一皿で我慢してあげてな。これくらいで太一くんのこと、せこい奴とか言うて嫌いにならんといてな」

「そ、そんな一皿でも申し訳ないですし、ありがたいことです」

瀬川は恐縮するように小さな体を一段と小さくし肩を竦めた。

瀬川の様子を見て、川西マンションに自分以外でやっとまともな住人が入居してくれたと思った。

「じゃあ、焼いてくるわ。焼き鳥盛り合わせ一皿だけな」

太一はもう一度念を押してから、焼き場に戻った。

焼き場を代わってくれていた先輩に礼を言うと、先輩は、「また彼女にたかられたのか。彼女をゲットするのも大変だな。まっ、頑張るって」と笑いながら太一の肩を叩いて焼き場から離れていった。

「ほんと、そんなんじゃないっすよ」

先輩の背中に向かって反論すると、先輩は背中を向けたまま右手だけを上げて去って行った。

この日、早番だったので、さっさと仕事を切り上げ、客として来てくれた優香と瀬川と三人でマンションへ帰ることにした。

優香を真ん中にし、右側に瀬川、左に太一と横一列に並んで歩いた。

「なかなか安くて美味しい店やろ。あの店はおすすめやで」

優香が瀬川の方を向いて言った。

「そうですね、ほんと美味しかったです。これからも、たまにこうして飲みに行きたいですね」

瀬川が優香を見てから太一の方に視線を向けて言った。

「じゃあ、これからも一緒に行ってあげてもいいけど、次からは全部次郎ちゃんのおごりやで」

「えっ、次からって、今日も僕のおごりじゃなかったですか」

「なんでやねん、半端の小銭はあたしが出してあげたやん」

「二百二十五円ですよ。残りの四千元は僕が出したじゃないですか」

「次郎ちゃん、顔に似合わず細かいこと言うな。そんなこと気にするんや」

「いや、別に気にしてるわけじゃないですけど」

「二百二十五円を覚えてるんは、ちょっと細かすぎちゃうか。男やったら、ほんまは一万円札、ポンと出して、釣りいらんわくらい言わなあかんで」

「いやー、そんなキャラじゃないですし」

瀬川が頭を掻いた。

「そんなことより二人であれだけ飲んで食べて四千元ちょっとやで。安いよなー」

焼き鳥盛り合わせ一皿は自分がおごったんだと言いたかったが、それを言うと優香が細かい男言うやつやなど嘸みついてきそうなので言葉を呑み込んだ。

「あー、楽しくて美味しかったー」

優香はそう言って満足そうに両手を高く上げた。優香の上の服の裾が上がり、くびれた腰あたりの肌が覗いた。自然とそこに視線がいつてしまう。瀬川を見ると瀬川の視線も同じだった。

優香が「あれー」と声を上げた。

「どうした？」

太一が優香に顔を向けるのと同時に瀬川も優香に顔を向けた。

「あれ、あの人だよな」

優香が道の前方を指差した。

優香の指差す方に視線を向けると、大柄な男が歩いてくるのが見えた。ズボンのポケットに両手をつっこみ背中を丸め、大きな体を小さくしてこっちに向かって歩いて来る。

「あれ、二〇四号室の三浦さんだよ」

太一はこれまでも仕事の帰りに何度かこの道で、三浦とすれ違ったことがあるので知っていた。

「やっぱり、そうやんな」

「おれ、仕事帰りに、三浦さんとの道でよく会うわ」

「へえー。ほら次郎ちゃん、向こうから来るのはフランケンやで」

優香が瀬川に向かって言うと、瀬川は「ああ」とだけ言って目を逸らした。瀬川が震えているように見えた。

「次郎ちゃん、フランケンのこと怖いんやって」

優香が太一の肩を叩いて笑った。

太一も三浦は苦手だ。たまにここですれ違う時も絶対に目を合わさないようにしているし、向こうも絶対に目を合わそうとしない。たまに目が合ってしまうと、いつも鋭い目で睨まれる。

三浦との距離が近づいてきたが、やはり三浦は太一たち三人の存在を無視するかのようには視線を合わそうとしなかった。すれ違いざまにも三浦は太一たちの存在を無視していた。

すれ違ってから、優香が立ち止まり振り向いて、離れていく三浦の方を見た。

「フランケン、どこ行くんやろ」

優香は三浦の離れていく後ろ姿をじっと見た。

「いつも、玉の湯に行ってるみたいやな」

太一が言うと、優香と瀬川が同時に「玉の湯？」と言って太一に視線を向けた。

「向こうの角を曲がったところにある銭湯やで」

太一が道の向こうの方を指差した。

「銭湯はわかってるわ。なんで、マンションにお風呂あんのに、わざわざ銭湯に行くんや」

優香が首を捻っていた、

「ゆっくり湯船に浸かりたいからちがうかな」

太一はそんなこと気にすることでもないだろうと思った。

「マンションでも湯船に浸かろう思たら浸かれるのどちがう？」

「マンションの風呂は三浦さんには狭いんやろ」

「そっかー。フランケン、体でっかいもんな。太一くんも体でっかいから、玉の湯に行くの？」

「おれは、ほとんどシャワーだけだからな。たまーに、湯船につかりたい気分の時は玉の湯に行くけど」

「フランケンは、毎日、玉の湯なん？」

「さあー、多分そうやと思う。しょっちゅうこの道で会うからな」

「なんでやろ？ シャワーだけやと嫌なんかな。人に会おうの避けてるみたいやのに、なんで銭湯には行くんやろ」

優香はずっと三浦のことを気にしていた。

「三浦さんのことなんてどうでもええやろ」

太一は三浦が苦手で嫌いだ。

「けど、気になるな」

「そんなに気にするところ見ると、優香ちゃんは三浦さんのことが好きなんちがうか」

太一は軽い冗談のつもりで言った。

「そーやねん。あの人のことちょっと気になってんねん。なんか野性的でかっこええとは思うんよなー。けど、あたしがなんぼ色目つかっても、なかなかあたしの方に振り向いてくれへんねん。フランケンはどんな女の子がタイプなんやろか」

優香はそう言って口を尖らせた。

太一は今日一番心がざらついたかもしれない。隣の瀬川は目を丸くしていた。瀬川もきっと心がざらついているに違いない。瀬川も優香に惚れている。

「瀬川さんは彼女とかいるんすか」

太一は話を変えるために瀬川に話をふってみた。

「僕ですか？ いやー、ほしいとは思いますが、この見た目じゃ、なかなか難しいですね」

瀬川が頭をポリポリと掻いた。

「そっかなー。次郎ちゃん、優しそうやからモテると思うんやけど。あたしは次郎ちゃんみたいなんもタイプやで」

優香がそう言って、瀬川の顔を覗きこむと、瀬川の顔がトマトのように赤くなった。

三浦と瀬川は全くタイプが違うのに、優香はどっちの男もタイプなのかよと、太一の心はまたざらついた。

「おれは？」と優香に訊きたくなったが、さすがに勇氣はなかった。

「ついでに言うと太一くんもタイプやで」

こっちから訊きまでもなかった。男なら誰でもいいのかよと突っ込みたくなった。瀬川のトマトのように赤くなった顔はすぐに色が落ちて白くなっていた。

「じゃあ、またねー。次郎ちゃん、ご馳走さま。太一くん、お疲れー」

川西マンションに着いて、優香が先に自分の部屋へと姿を消した。優香を見送ってから瀬川と二人きりになった。

「これから、よろしくお願いします」

瀬川が笑みを浮かべ、右手を差し出したので、太一も「こちらこそ」と言って右手を出し握手した。

瀬川の手は薄っぺらで、力を入れると、グニャリと潰れてしまいそうな手だった。

「それじゃあ、また」

握手する手をほどくと、瀬川はそのまま手を上げて微妙な笑みを浮かべた。そして踵を返し階段を上がって行った。

「おやすみなさい」

階段を上がっていく瀬川の背中に向けて言うと、瀬川は振り向いて、「おやすみなさ

い」と言って、やわらかい笑みを浮かべた。

確かに頼りなさそうだけど、優香の言う通りすごくいい人だと思った。

浦川優香

母一人、子一人、同じ屋根の下で過ごした二十年間はあっけなく終わった。

母親の倫子があなたも二十歳になったことだし、そろそろ家を出て一人で暮らしたらどうなのと言われたのは、今年に入ってすぐのことだった。

なぜ母親がそんなことを言い出したのかはわかっている。母親は一年ほど前から中森という十歳も年下の男性と交際をしている。そろそろ中森と二人で暮らしたいと思ったからだろう。

優香は母子家庭で育ったが、母親から可愛がられた記憶、母親の愛情を感じた記憶は全くなかった。

優香が生まれてすぐに離婚した母親にとって、幼なかった優香の存在はお荷物だったのかもしれない。母親が新しい人生を踏み出すには優香の存在は邪魔だったのだろう。

そう思うと空しくて、悲しくなるが、とりあえず、二十歳までは親の義務として、自分の欲望をおさえ、我慢して育ててくれたことに感謝することにした。そうでもしないと、この先、前を向いて生きていく自信がない。

高校を卒業してから、関急百貨店の川西店の洋菓子売場で正社員として働いている。そんなに多くはないが、毎月安定した収入もあるし、少しの貯金もできた。一人暮らしをはじめたい気持ちもあったので、優香は母親からの提案にのることにした。

新しい部屋探しのためにスマホで検索して探したり、直接不動産屋を訪れて資料を見せてもらったりしたが、家賃五万円以下で、今の職場に一時間以内で通えるという条件をクリアする部屋はなかなか見つからなかった。

家賃か通勤距離のどちらかを妥協するしかないのかと諦めかけていた時に、職場の店長から比較的安い物件を紹介してくれる地域密着型の不動産屋を教えてもらった。

その不動産屋に直接出向き、びっくりする条件の部屋を紹介してもらった。そのマンションは、築三年、川西駅まで徒歩五分で行けて、家賃がたったの三万円という。

関急百貨店は川西駅前にあるので、歩いて五分で職場まで通えるし、家賃は予定より二万円も浮いてくる。

建物は少々オンボロでも仕方ないと覚悟していたが、ところがどうして築三年で綺麗なマンションだった。

紹介してくれた不動産屋の志賀という男は風船のような体を揺さぶりながら、自信たっぷりに紹介してくれた。

最初は、担当者の志賀に部屋の希望条件を伝えると、それまでに回った不動産屋と同じく、そんな物件があるわけないだろうという渋い表情だった。

やっぱりダメかと思っていると、志賀が急にニカッと笑い、特別な物件を紹介すると言ってきた。

「仕方ないですね。とっておきで特別な物件を紹介しますよ」

テーブルを挟んで優香の前に座っていた志賀はすくっと立ち上がり優香に丸い背中を向けた。

志賀の背後には壁一面に棚があり、そこには青いファイルがずらりと並んでいる。青いファイルの背表紙には間取りや地域が書いて仕分けされているようだった。

志賀はその青いファイルの並ぶ中で、背表紙に赤い字で『特』とだけ書いたファイルに人差し指をかけ、それをスッと引き抜いた。

「普通なら、お客さんのいう条件に合った物件は、まず見つからないですよ。けどね、お客さん、あなたはめちゃくちゃラッキーです。ひとつだけ、とっておきで特別な物件があるんですよ」

志賀は優香の方に振り返り、短い人差し指を立ててニッと口角を上げた。

「とっておきで特別な物件ですか」

優香は特別という言葉に弱い。すぐにテーブルに身を乗り出した。

「そうです。とっておきで特別です」

志賀がファイルを手に持ったまま、椅子に腰を下ろした。

「どんなところですか」

「気になりますか」

志賀はギョロリとした目を優香に向けた、

「ええ、もちろん」

優香はもう一段体を乗り出した。

「ここは特別なんでね。誰にでも紹介するってわけにはいかないんですよ」

志賀がニヤニヤと笑みを浮かべる。

「そうなんですか」

優香は口を尖らせた。ジジイ、なにもったいぶってんだよと心の中で毒づいた。しかし、優香はそんな態度は志賀には見せず職場で見せる浦川優香を演じた。

「でもね、お客さんの可愛い顔と名前が気に入りましたからね、このとっておきの特別な物件を紹介することにしますよ」

「ほんとですか」

優香は胸の前で両手を合わせ志賀の顔をじっと見つめた。可愛い顔はわかるが、浦川優花という名前がなぜ気に入ったのかはよくわからない。

志賀が優香の顔をじっと見てきたので、優香は志賀に向かってウインクした。すると志賀はニヤリと笑い、ファイルをめくりながらウンウンと嬉しそうに頷いていた。

「これ、なんですけどね」

志賀はファイルから資料を一枚抜き取り、優香の前へと滑らせてきた。優香はすぐにその資料に視線を落とした。

『川西マンション。築三年、洋室六畳・キッチン三畳、川西駅から徒歩五分、家賃三万円、共益費、敷金、礼金なし』

資料には確かにそう書いてある。優香は顔を上げ志賀を見た。志賀はニヤニヤしている。

これまで紹介してもらった物件のなかで築三年が一番新しく、そして六畳と三畳の二

間あるのは一番広い。駅から五分なので駅前にある関急百貨店まで歩いて通える距離だ。何より家賃三万円は破格の安さだ。

「どうですか」

志賀は自慢気な表情で優香の顔を覗きこんだ。優香は「ここに決めました」と即入居を決めた。

引っ越し屋のトラックに優香の荷物が全て積みこまれた。これで生まれ育った実家を去ることになるのだが、特にこみ上げるものもなく、なんの感情も湧かなかった。

母親と中森が家の前に出てきて並んで立っている。母親は中森の腕に手をまわし、幸せそうな表情でトラックを眺めていた。実の娘が実家を去り寂しくなるといった感情は湧いてこない様子だ。母親と中森は二人でコソコソと笑みを浮かべてイチャイチャと話していた。実の娘が生まれ育った家を出て、一人暮らしをはじめのだから、一応母親の義務として見送っているだけのようにしか見えなかった。寂しくなる、娘がこれから一人で暮らすことが心配だといった気持ちは無さそうだ。

それよりも、これから邪魔者がいなくなり中森と二人だけで暮らせることにワクワクしているのだろう。

引越屋のトラックが先に川西マンションへと出発した。優香は後を追って電車で川西マンションへと向かう予定だ。

「それじゃあねー」

優香は母親に向かって右手を上げた。

「うん、じゃあ、元気でね」

母親は中森と腕を組んだまま右手を振った。実の娘の引っ越し先の住所を訊いてくることもなかった。

携帯の番号を知っているから、なにかあっても特に問題はないだろうと、優香の方から住所を教えることもせずに、リュックを背負い一人で駅へと向かって歩きはじめた。

振り返る気にもなれず前を向いたまま歩いていった。少し歩いたところで、母親はまだ自分を見送っているのかが気になった。すでに中森と腕を組んだまま家に入っているかもしれない。そんなことを考えながら前を向いたまま歩いた。

角を曲がる時に、ふと振り返ってみた。母親がいたら手を振ろうと思ったが、やはり母親の姿はなかった。

「ハァー」と勝手にため息が出た。わかっていたことだがやはり寂しい。

全ての荷物が川西マンションの一〇三号室に運びこまれて、引っ越し屋を見送ってから、優香はこれから一人暮らしをするマンションをぼんやりと外から眺めた。

二階建てで、明るいベージュ色をしたタイルの壁に、ベランダや廊下の手摺の部分が白いスチールのメッシュ状になっている。とても家賃三万円のマンションとは思えない外観だ。

道を挟んだ向かいには緑豊かな公園が広がる。これから春に向けて、もっと緑が増えるだろう。そしてカラフルできれいな花が咲き乱れるのだろう。

ここなら通勤時間は歩いて五分だ。これまでより朝は一時間ゆっくりできるし、夕方は一時間早く帰れる。

時間に余裕ができるので、将来のためになにか資格をとるための勉強をするのもいい

かもしれない。健康のために朝は前の公園をジョギングするのもいいかもしれない。そんなことを考え、これから始まる一人暮らしは希望に満ちていた。

優香には一人暮らしをはじめるとあって、ひとつの大きな目標がある。それは、このマンションの住人たちと仲良くなり、家族のような付き合いをすることだ。

いっしょに食事に行ったり、前の公園をいっしょに散歩したり、たまにはいっしょにお互いの部屋でテレビを見たりしたいと思っている。ちょっとした身の上相談などでできれば最高だ。

そのことを職場の店長に話すと、一人暮らしのマンションで住民同士が仲良くするのは、あまり聞いたことがないし、仲良くするのは若い女性の一人暮らしだからやめた方がいいと忠告された。

店長も独身の頃は一人暮らしをしていたそうだが、一人暮らしを始めて早々に危険な目に遭ったことがあるそうで、出来るだけ近隣の付き合いは避けたそう。女性の一人暮らしだと気づかれないようにすることにも気をつけたと言っていた。

しかし、優香は店長の忠告を聞く気にはなれなかった。せっかく同じ屋根の下に住むんだから、その縁を大切にしたい。だから家族のように仲良くなりたいたいという気持ちの方が強かった。

優香は二十年間、母親と二人で暮らしてきた。家族だけどお互いに冷めていた。母親の愛情を感じることなく、優香も母親に心を開くことはなかった。

母親と姉妹のように買い物や映画、コンサートに出掛ける友達が羨ましかった。相談できる家族がいる友達が羨ましかった。

優香もそんな家族がほしかった。だから、このマンションの住人と仲良くなって家族のような付き合いがしたいと思っている。

優香は住人と仲良くなるために、ここの住人と会う度に自分から積極的に笑顔で挨拶しようと心に決めている。

そう心に決めて入居したが、このマンションに優香が引っ越してきた時にいた住人はたった一人だった。

しかもその住人は二〇四号室に住んでいる厳つくて無愛想な男だった。優香からいくらあいさつをしても、無言で睨んでくるだけだ。その男を見ていると恐怖すら感じた。店長からの忠告が頭を過った。

卒業して接客の仕事がしたくて、今の職場に就職した。仕事は楽しくてやりがいがあった。自分は人と接するのが好きなんだと改めて思った。

高校時代はそれなりに友達もいた。友達といっしょにいるのが楽しかった。しかし、今の仕事は土日出勤が多いので休みが合わず、友達とは疎遠になってしまった。

一年前には彼氏もいたが、二股をかけられていたと知ってすぐに別れた。それ以来、イケメンと口の上手い男は嫌いになった。飾った男より不器用でも正直な男がいいと思うようになった。

今は彼氏はいないけれど友達がほしい。できれば、お兄ちゃんやお姉ちゃんと慕えるような友達がほしい。弟や妹もほしい。もっと言えば、お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんのような友達もほしい。

けど、ここのマンションには、怖い男しかいなかった。

家賃は安く職場からも近い。綺麗でいいマンションだが住人がいないことに少しがっかりした。

これから春に向けて誰か新しい住人が引っ越してきてくれないかなと優香は願った。そんな優香の願いが、この後次から次へと叶うことになった。

見市麗子

ベージュの壁に白いスチールの柵が夕陽に赤く染まる。道路を挟んだ向かい側には緑が多い大きな公園がある。

駅まで歩いて五分、間取りは六畳と三畳のキッチン、これで家賃はたったの三万円は確かに破格だなとあらためて思う。

見市麗子は今日から暮らすマンションを目の前にして、これまで抱いていた一人暮らしへの不安が消えて少しワクワクしていた。

この条件の物件なら、家賃はこの倍以上してもおかしくない不動産屋の志賀という男は言っていた。

後でネットで周辺の家賃の相場を調べてみたら、志賀の言うことは嘘ではなかった。「じゃあ、おねえさんの美貌と名前が気に入ったから、とっておきの特別な物件を紹介しますよ」

志賀が言って、麗子に笑みを浮かべた後、背表紙に赤で『特』と書いたファイルから資料を一枚抜き取り、川西マンションという物件を紹介してくれた。

麗子は、志賀の『おねえさんの美貌』というねちっこい声に虫酸が走った。風船のようにブクブクした中年男のいやらしい視線に怒りを覚え帰りたくなった。

男から特別扱いされたり優しくされると、下心があるんじゃないかと疑ってしまう。男の優しさとはそういうもので、男はそういう生き物だと麗子は思っている。しかし、この物件を逃すわけにはいかなかったので、その時はグッと堪えた。

「いかがですか」

志賀は自信たっぷりといった表情で訊いてくる。

麗子は「気に入りました」と短く答えた。

「部屋は今見えています二〇三号室でよろしいですか」

特にどこでもよかったが二階の方がよかったので、それで結構ですと答えた。

「そうですか。それでは、このマンションまでご案内しましょうかね」

志賀のいやらしい視線は麗子の顔を見た後、胸元に下がるのがわかった。麗子は胸元を隠すように右手を当てた。この後、このいやらしい男とマンションまでいっしょに行くことに不安があった。どこか別の場所に連れて行かれるんじゃないか。マンションまで連れて行ってくれたとしても、この男とマンションの一室で二人っきりになるのは危険だと思った。しかし、このマンションの魅力は麗子のそうした不安を上回った。

麗子は「は、はい」と返事した後、志賀の顔を見た。

志賀はニヤリといやらしい笑みをうかべた。

「渡辺さん、ちょっといいか？」

志賀は奥に座っていた若い女性に声をかけ、手招きをした。

「はい」

渡辺という若い女性がハツラツした声で返事して立ち上がった。彼女はニコニコした表情のまま、志賀の方に早足で歩いてきた。

「悪いけど、見市さんを川西マンションまで案内してくれるかな」

志賀は渡辺を見上げて言った。

「はい、わかりました」

渡辺はまたハツラツとした高い声で返事をした。彼女の声を聞いていると気持ちがいい。

麗子は渡辺の顔に視線を向けた。まだあどけなさが残る若くて可愛い女性だ。どうやら、この渡辺がマンションまで案内してくれるようだ。麗子は胸を撫で下ろした。

「頼むね」

志賀は渡辺に向けて右手を上げた。

「わかりました」

渡辺が志賀に返事をしてから、麗子の方に体を向けた。

「見市さん、この前まで車をまわしてきますので、しばらくお待ちください」

渡辺はそう言って麗子の顔を見て笑みを浮かべた。

「よろしくお願いします」

麗子は立ち上がり渡辺に頭を下げた。

「では、いってきます」

渡辺は不動産屋のガラスのドアを開けて出ていった。

「今から今の渡辺が現地まで案内します。二、三分で車をまわしてくると思いますので、この前で待っていて下さい」

志賀はそう言って立ち上がった。

「はい、ありがとうございます」

「いいマンションですよ。きっと気に入ってくれると思います」

志賀はそう言って右手を差し出した。握手を求めているようだが、麗子は志賀の芋虫のような指が気持ち悪くて無視してしまった。

「ありがとうございます」

麗子は深々と頭だけを下げてごまかした。志賀は出した手を引っ込めた。

不動産屋を出るとすぐにコンパクトで丸みのあるレモン色の車が麗子の前にとまった。エンジンが切れて運転席から渡辺が降りてきて、後部ドアに回ってきた。

「見市さん、どうぞこちらから乗ってください」

渡辺はずっとニコニコと笑みを浮かべている。麗子は渡辺が開けてくれたドアから後部座席に乗り込んだ。

「見市さん、渡辺です。よろしくお願いします」

渡辺は運転席に乗り込んでから振り向いて丸い笑みをくれた。

「こちらこそよろしくお願いします。お忙しいのに申し訳ありません」

麗子は渡辺に向かってペコリと頭だけを下げた。

渡辺はマシュマロのようなほんわかした女性で、ずっと笑みを絶やさず話しやすい印

象だ。

「では、見市さん、今から川西マンションに向かいますね。マンションまでは大体二十分ほどで到着すると思います」

渡辺が言ったあと、窓の景色がゆっくりと動き出した。

「これから行く川西マンションは御社でも特別な物件みたいですね」

車が走り出してすぐに、麗子は運転する渡辺に訊いた。

「えっ、そ、そうなんですか」

渡辺がフロントガラスを向いたまま答えた。

「そうじゃないんですか」

麗子は首を傾げた。志賀は特別な物件と言っていたが、渡辺は知らないのはどういうことだろうか疑問に思った。

「実は、今から行く川西マンションは、さっきの志賀さんだけが担当している物件なんです。だから、わたしや他の社員は川西マンションのことをよく知らないんです。ごめんなさい」

渡辺はフロントガラスを向いたまま頭を下げた。

「そうなんですか。志賀さんてさっきの方ですよ」

「はい、そうです。ああ見えて、いい人なんですよ。よくシュークリームとか甘い物を差し入れに買ってきてくれるんです。へへへ」

ルームミラーから見える渡辺の目は三日月のように細くなっていた。

「渡辺さんは、これまでも川西マンションに行ったことはあるんですか」

「ええ、一度だけですけど、若い女性を案内したことがあります」

「若い女性ですか」

「ええ。あたしより若いと思います。羨ましいくらい可愛い二十歳くらいの女性でしたね」

「その女性は今もお住まいなんですか」

「そうですね、三週間ほど前に入居したばかりですからね」

麗子は若い女性が入居していると聞いて少し安心した。男性が入居していないことを祈った。

「他にはどんな方がお住まいなんですか」

「あとは、男性が一名だけみたいですね」

男性がいるのかと思うと、今度は少し憂鬱な気分になった。それにしても、入居者が二人だけとは、あまりにも少なすぎるなど思った。

「今は二人しか入居していないんですか」

「そうなんですよ。志賀さんがあまり紹介してないみたいなんです。条件がいいみたいですから、紹介すればすぐに埋まると思うんですけどね」

三週間前に入居した女性と自分をいれて、入居者が三名ということは、その若い女性が三週間前に入居するまでは男性が一名だけだったということだろうか。

もしかしたら、ちょうど新年度の季節で、入れ替わりのタイミングなのかもしれないと思った。

「なぜ、特別な物件なのに、そんなに部屋が空いてるんですか」

「いやー、どうなんでしょうね。あたし、実は最近この会社に入社したばかりで、よく知らないんです。お役に立てなくてごめんなさい」

「いえ、大丈夫です。それにしても、家賃三万円は安すぎませんか」

「そ、そうですね。三週間前に入居した女性も同じことを言っていました。あたしもその女性に家賃を聞いてビックリしました。でも、今回はうちの志賀に紹介してもらえてよかったじゃないですか」

「ええ、まあそうなんですけど……」

麗子は不審に思った。なぜ、こんな条件のいい物件が空き部屋だらけなのだろうか。この渡辺の言うとおりに、紹介してもらって良かったのだが、なぜか腑に落ちない。

それから渡辺と出身はどこだとか、今年は特に暑くなるみたいだとか、たわいもない話をしていると、あっという間に川西マンションに到着した。

「見市さん、着きましたよ。そこのマンションです」

渡辺がマンションの前で一旦車を止めてから、マンションを指差した。

「へえー、ここですか。ほんと綺麗なマンションですね」

麗子は窓から川西マンションを覗いた。想像以上にきれいなマンションで驚いた。

渡辺はマンションのすぐ隣にあるコインパーキングに車を入れた。麗子は渡辺がエンジンを止めてバッグを取っている間に車から降りてマンションを見上げた。

「じゃあ、お部屋をご案内しますね」

渡辺がそう言ってバッグから鍵を取り出し、マンションの階段へ向かった。麗子は渡辺の後ろについて階段へと向かって行ったが、階段の手前にあるポストの前で立ち止まり、ポストに名前が入っている部屋を確認した。麗子が入る二〇三号室の隣の二〇四号室にはきれいな女性っぽい手書きの文字で『石中』と書いてあり、一〇三号室にはワープロ打ちで『浦川』と書いてあった。

渡辺の話では現在の入居者は男女一名ずつということだ。どちらかが男性でどちらかが女性だろう。『石中』という手書きの文字を見る限り二〇四号室の方が女性のような気がする。

「見市さん、どうしましたか」

麗子がポストをじっと見つめていたので、渡辺が階段を上がりかけたところで立ち止まり、麗子に声をかけた。

「すみません。ポストの名前が気になってしまって」

「あー、今の入居者はポストに名前が入ったその二名だけです」

渡辺がポストを覗きこんだ。

「車の中で話してました三週間前に入居した可愛い女性はどちらですか」

渡辺の口から石中さんですという答えを期待したが、渡辺から「一〇三号室の浦川さんです」と返ってきた。

麗子はガックリと肩を落とした。てことは隣の部屋の石中は男性ということになる。部屋を決める前に入居者の情報を入れておくべきだった。それに男のクセにポストに紛らわしい女性っぽい文字を書くなと思った。

それから渡辺について階段を上がり二階の二〇三号室の前まで来た。渡辺が鍵を開けて、どうぞ中を見てくださいと部屋の中に入れてくれた。

麗子は「失礼します」と言って、渡辺より先に部屋に入り、部屋の中を見渡した。広くてきれいな部屋だ。隣の部屋が男性ということが気になったが、立地といい、建物といい、家賃といい、ここに勝る物件はないだろう。

この川西マンションは、この春から教鞭を執ることになった東上学園高校まで歩いて十五分くらいで通えるので通勤に便利だし、駅からも近いので買い物やどこかへ出掛けるのにもとても便利だ。

東上学園高校から社会科の教員として同校で教鞭を執ってほしいと話をいただいた時はすごく光栄な話だったので素直に嬉しかった。

ただ、そうなると東上学園高校まで自宅から通えなくなるので必然的に引っ越しをしなければならなかった。

麗子は一人暮らしすることに抵抗があった。これまで見知らぬ人に対して異常なまでに警戒心や恐怖心を持ってしまい、コミュニケーションがうまくとれなかった。そんな自分が一人暮らしなんて出来るのだろうか。

特に男性に対しては、自分でも信じられないくらい臆病になってしまう。これはきっと結婚まで考えていた男性に二股をかけられていたショックのせいだと思っている。同世代の男性を見るとなぜか嫌悪感を持ってしまう。

職場が変わり、その上一人暮らしをはじめるとなると、当然職場でも私生活でも新しい人間関係を築かなければならなくなる。それに自分は耐えられるのだろうか。

しかし、せっかく名門高校で教鞭を執れるチャンスなのに、それをみすみす棒に振るのはもったいない。麗子は清水の舞台から飛び降りるくらいの気持ちで一人暮らしする決心をした。

麗子の川西マンションでの一人暮らしがスタートした。隣に住む男性は厳つい顔をした無愛想な男性で、麗子を避けるようにしていた。男性は他人と関わりたくないといった感じだが、それは麗子にとってありがたいことだった。麗子も他人と出来るだけ関わりたくなかった。

もう一人の女性は浦川優香という百貨店の洋菓子売場で働く女性だ。いつも笑顔で明るく挨拶してくれるので、すごく好感が持てる。朝、出勤の時に彼女と顔を合わせると、気持ち良い気分が一日がはじまる。優香は自分とは正反対のタイプで彼女の性格が羨ましく思った。

その明るい優香のおかげで、一人暮らしは思っていたほど苦痛ではなかった。

しかし、麗子が引っ越してから、一ヶ月おきに続けて二人の男性が入居してきた。なぜ男性が続けて入居してくるんだと、入居してきた男性たちに怒りをおぼえてしまった。

先に入居してきたのは原田という体の大きな男で、後から入居してきたのは瀬川とかいう原田とは正反対に華奢な男だった。

原田や瀬川の姿を見ても挨拶をする気にはなれず、汚ないものでも見るようについ睨んでしまう。原田や瀬川が悪いわけではないことはわかっている。しかし、どうしても彼らを見ると嫌悪感を持ってしまう。

原田は夜のアルバイトをしているらしく、顔を合わす機会は、ほとんどなかったのが良かった。一人暮らしのマンションの人の繋がりの希薄さは麗子にはありがたかった。

瀬川の方は最初にわざわざ菓子折りを持って挨拶にやってきた。麗子が仕事から帰っ

てきた時に、瀬川が部屋の前に立っていたのを見て、怪しい男だと決め込み、体が熱くなり頭の中がパニックになった。

そこから先は自分でもわけがわからないくらい、瀬川を罵り、彼に暴力を奮ってしまった。本当に申し訳ないことをしたと反省はしたが、男性が女性の一人暮らしのマンションに引越の挨拶に菓子折りを持って現れるのはどうかと思う。下心があると思われても仕方がないと自分を弁護した。

このマンションに引っ越してきて、唯一、会話ができる優香はこの二人の男性は真面目でいい人だと言っていた。麗子も優香のように、いずれは二人の男性と普通に会話ができるようにならなければならない。

今は女子高勤務で男子生徒はいない。男性の教師はいるが、会話する男性といえば校長と数人の教職員だけで、さほど問題なく過ごしているが、これから先の人生を考えると、早く失恋から立ち直り男性嫌いを解消しなければならない。

一〇三号室の優香も同じような失恋経験があると言っていたが、麗子とは全く違う。優香は自分よりずっと年下なのに凄いなど尊敬してしまう。

優香は母子家庭で育ち、家族の愛情に飢えているから、このマンションの住人とは家族のような付き合いがしたいと言っていた。ちょっと変わった娘だが、明るく活発なのが本当に羨ましい。

迷惑な隣人

今日も仕事の帰りにコンビニによって弁当とカップ麺を買って帰った。一人暮らしをすると決めた時に母親からは自炊するように言われていたが、次郎は母親の教えを守ることにはなかった。母親の言いたいことはわかる。健康面や経済的なことを考えると自炊した方がいいと言っているのだ。

確かにその通り、母親の言うことに間違いはない。しかし、朝から晩まで立ち仕事をし、重い荷物を運ぶ。華奢で体力のない次郎にとっては重労働だ。その重労働を終えて家に帰ってから自炊する気力も体力も残っていない。

次郎は仕事から帰ると、まず疲れをとるために風呂に入る。汗を流してスッキリした体でテレビを見ながら、のんびりコンビニ弁当を食べるのが、今の次郎の至福の時間だ。仕事で疲れて帰ってから夕飯を作る気にはなれない。

今日もトンカツ弁当の最後の一切れを口に放り込み、カップ麺の汁を啜り、最後に缶ビールを喉に流し込んだ。

空腹が満たされ、あとはテレビのバラエティ番組を見て過ごす。

テレビからはペットのおもしろ動画特集が流れている。テレビから出演者の大きな笑い声が流れると次郎はテレビの音量が気になる。隣に住む三浦が文句を言ってくるかもしれないと思うからだ。出来るだけ関わりたいくない相手だからそっとしておきたい。はじめての一人暮らしは比較的快適だが、両隣の部屋に住む三浦と見市麗子だけが唯一の誤算だ。まあ、関わらないようにしておけば、特に問題はないので物音だけは注意している。

この日、次郎は部屋で寛いでいるうちに、睡魔に襲われ、いつの間にか意識を失っていた。

『パパッパパー、パパッパッパパー』

三浦の部屋から聞こえてくる。トランペットのような音で目をさました。窓を開けていたせいもあるが、そこそこ大きい音だ。

こっちには物音を立てるなど言っておきながらと思ったが、クレームを言える相手ではない。

窓を閉めても音は漏れてくる。気になって壁に耳を当てて聞いていると、トランペットの音は意外と次郎を元気にしてくれ聞き入ってしまった。続いてピアノの音が聞こえてきた。ピアノの音色はきれいで次郎はそれに癒された。

三浦が演奏しているのだろうか。三浦の厳つい顔を思い浮かべる。似合わないなど思った。

次に女性の笑い声が聞こえてきた。三浦の部屋に女性が訪ねて来ているのだろうか。三浦の恋人か家族だろうか。

それからしばらく聞こえてくるのは、女性の声とピアノの音色ばかりだった。三浦の
声が聞こえてこないと思っていると、急に「ウォーッ」と地響きのような声が飛び込ん
できた。

次郎はビックリして壁から耳を遠ざけた。それから「ウォーッ、ウォーッ」と男の
声が響き、『ドーン』『バーン』『ガシャーん』と激しい物音がした。

次郎は怖くなって、体を小さくした。

物音を立てるなど言ってたくせに、自分はいいいのかよと思った次郎だが、ここはおと
なしく耐えるしかない。

先に聞こえてきた女性の声は、一体誰なのかが気になった。三浦の恋人だろうか。今、
部屋にその女性がいるのだろうか。すごい物音がしたが、まさか三浦はその女性に暴力
を奮っているのではないだろうか。もしそうなら女性のことが心配だ。何とかしないと
いけない。警察に相談するべきかもしれない。

次郎はもう一度、壁に耳を当てて三浦の部屋の様子を確認した。しかし、その後は何
も聞こえてこなかった。

それから毎日のように騒音に悩まされた。

一〇二号室に引っ越します

「そうですか、二〇四号室の三浦さんがですか」

麗子は隣の二〇四号室に住む三浦が部屋で暴れて、物音がうるさすぎることを不動産屋の志賀のところに抗議に行った。すると、志賀は渋い表情を浮かべ頭を抱えた。

「これまで三浦さんに対して住人からのクレームはなかったんでしょうか」

麗子はこのマンションの入居者が少ない理由は三浦のせいではないかと思った。

「そうですねー、記憶にはないですかね」

志賀の言葉は歯切れが悪い。何かを隠しているように感じた。

「あの部屋から女性の声も聞こえてきますが、三浦さん以外に女性が住んでいますか」

麗子が訊くと、志賀は目を大きく見開いた。

「女性の声ですか。いえいえ、そんなはずはないです。そんなはずは絶対にはないです」

志賀は慌てているように見えた。

「トランペットやピアノの音色が聞こえたり、女性の声が聞こえたりするんです。その音自身は大した音ではないんですけど、ちょっと気になったんで、そうですか、女性は住んでいないですか」

麗子は首を傾げた。三浦が不動産屋に内緒で女性と同棲していても、それは麗子にはどうでもいいことだ。それより、三浦が部屋で暴れて激しい物音を立てるのを何とかしてほしい。

「志賀さんから三浦さんに注意してもらえませんか」

「そうですねー」

志賀が口を尖らせた。しばらく宙を眺めて口を開かない。

「してもらえますよね」

麗子は痺れを切らして前のめりになってテーブルを叩いた。

「見市様の部屋を一階に移動するというのはどうでしょうか」

志賀が提案してきた。

部屋を一階に移動するという志賀の提案はありがたいが、それは志賀が三浦に注意をしないということだろうか。

「部屋を一階にしてもらうことはいいですが、三浦さんに志賀さんから注意はしてもらえるんですよね」

麗子は確認した。あやふやにしているのは、次に二〇三号室に入居する人が今の自分と同じ思いをすることになる。自分が一階に引っ越して、それで済ませていい話ではない。問題の根っこは三浦にあるのだ。そこを何とかしなければ本当の解決にはならない。

「ええ、もちろんです。それは私から三浦さんに注意しておきますが、それと同時に見市さんも部屋を移動した方がいいのではないかと思いますね」

志賀は額から流れる汗をハンカチを取り出しておさえながら言った。何かを隠しているのか、志賀は落ち着かない様子だ。

「二〇五号室の瀬川さんからは何もおっしゃってこないんですか」

「はい、瀬川さんからは特に何も聞いていないです」

「わかりました。わたしは一階の部屋に変えてもらえますか。部屋は一〇二号室でお願いします」

原田の隣より優香の隣の部屋がいい。

「わかりました。すぐに一〇二号室に入居できるように手配いたします。引っ越しの費用はこちらに請求いただければお支払いします」

二〇五号室の瀬川はどうするのだろうか。瀬川も三浦の物音に悩まされているはずだ。一度優香から訊いてもらうことにしよう。

壁に耳あり

仕事から帰って風呂に入りホッと一息つきたいところだったが、今日はそうはいなかった。

「次郎ちゃん、ここもフランケンの部屋からすごい音が聞こえてきたりするん？」

部屋に帰るとすぐに優香が部屋に訪れ、ズタズタと部屋に上がりこみ、いきなりそんなことを訊いてきた。

「三浦さんの部屋からですか。確かにうるさい音がします」

隣の二〇四号室から三浦の喚き声や壁を叩く音、何かを叩いたり投げつけたりする音に毎日のように悩まされている。その音があまりに激しいので恐怖に感じて、そのせいで眠れない日もあるくらいだ。優香はそのことを言っているのだろう。

「実は麗子さんがフランケンの部屋からの騒音がうるさ過ぎるから不動産屋に相談したみたい。それで一階のあたしの隣の部屋に引っ越すことになったんやて。それで次郎ちゃんは大丈夫なんやろかと心配になって今日は来たんよ」

やはり麗子も同じ目にあっていたのか。次郎は三浦にクレームをつける勇気がなく、耳栓を買ってきたりしてずっと我慢していた。不動産屋に相談して部屋を変えてもらうということは次郎の頭にはなかった。

「引っ越してすぐに三浦さんの部屋から物音は聞こえてましたけど、最近は特にうるさいです。三浦さんの喚き声や何かを殴っている音が聞こえてきます」

「やっぱりね。麗子さんの言ったことといっしょやわ。麗子さんは女の人の声も聞こえてくる言うてたけど、次郎ちゃんとはどうなん？」

「女の人の声も確かに聞こえてきますね。あとトランペットやピアノの音だと思いますけど、聞こえてきます」

「麗子さんもなにかを演奏してる音が聞こえてくるとは言うてたな。それにしても、フランケンてようわからんよな。女連れ込んで暴力とか奮ってるんちがうやろか」

「それだと、不動産屋にだけでなく、警察にも相談しないといけないかもしれませんね」

「麗子さんは女の人の姿は見たことない言うてたけど、次郎ちゃんは見たことあるん？」

「いえ、僕も見たことはないです。三浦さんの部屋から女性の声が聞こえてくるだけです」

「その女の人は、『助けてー』とか、『殺されるー』とか叫んだりしてるん？」

「それもないです。笑い声や話し声が聞こえるだけです。女性の声は心地いい澄んだ声で、そんなに大きな声じゃないです。ベランダの窓を開けている時僕が壁に耳を当てている時にしか聞こえてこないのです、特に支障はないです。三浦さんの喚き声と何かを叩いたり投げつけたりしてる音が問題なんです」

「麗子さんもそう言ってたわ。てか、次郎ちゃん、壁に耳当てて隣の部屋の物音聞いてるんか。それって変態ちがうか。フランケン連れ込んでる女の声聞いて、一人で興奮してるんやろ。やっぱり次郎ちゃんはスケベやわ」

「違います違います。女性のそんな声は聞こえてきませんよ」

「けど、女のあえぎ声が聞きたいから壁に耳当ててるんやろ」

「違いますよ。三浦さんの部屋で何が起ってるのかが気になっただけです。変なこと言わないでください」

「信じられへんな」

優香が軽蔑したように横目で次郎の顔を見てくる。

「そんなこと絶対に太一くんや麗子さんに言わないでくださいよ」

「わかった。次郎ちゃんの名誉のために内緒にしといたるわ」

「内緒にしといたるじゃなくて、僕はそんなことしてませんから」

「それより、次郎ちゃんはどうすんの？ 麗子さんみたいに不動産屋に頼んで部屋変えてもらうんか」

「そうですね、僕も一階に変えてもらいたいですね」

「一階くるんやったら一〇一号室と一〇五号室が空いてるで。一〇一号室にしたら、次郎ちゃんの得意の盗聴で一〇二号室の麗子さんのあえぎ声が聞けるかもやで」

優香が次郎の顔を覗きこんでニタニタと笑った。

「だから、僕はそんなことしません。盗聴なんて人聞き悪いこと言わないでください。それに僕は麗子さんは苦手ですし、変わるなら一〇五号室にします」

「太一くんの隣か。それやったらあたしの声も聞かれへんな。あたしは声大きい方やけど、次郎くん残念やな」

「そんなのに興味はありません」

「太一くんはどうなんやろ。あたしの声、壁に耳当てて聞いているんやろか」

「そんなこと知りません」

優香は部屋でどんな声を出しているのかと次郎は気になってしまった。そして、その声を太一が壁に耳を当てて聞いているかもしれないと思うと心がざらついた。

「麗子さんが言うてたけど、不動産屋の志賀さんは三浦さんに注意する気は無いっばいで。志賀さんも三浦さんのこと怖いんちがうかな。麗子さんに一〇二号室に引っ越してもらって、それで終わりにしようとする言うて麗子さん怒ってたわ」

「僕も明日にでも志賀さんをお願いしに行ってきます」

次郎もあの部屋から早く逃げ出したかった。

「その時、次郎ちゃんも、志賀さんからフランケンに注意してくれって言うといてや」

「僕は三浦さんの隣から一階に引っ越せたら、もうどうでもいいです」

「情けない男やな。自分さえよかったらええんか。この先、誰かが次郎ちゃんの後で一〇五号室に入居してくるかもしれへんねんで。その人のことも考えたらなあかんで。それに部屋が隣でなくなっても、フランケンといっしょのマンションに住み続けるんやから、そこはちゃんとしてもらわなあかんやろ」

優香の正論に返す言葉がなかった。

「わかりました。志賀さんに会った時には三浦さんに注意してもらおうように言います」

「ちょっと待って、あたしええこと思いついたから」

優香がニヤリと笑った。次郎は優香のその笑みを見て嫌な予感しかしなかった。

「それより、フランケンの正体をあたしらで確かめてみいひん？」

優香が急に前のめりになってきた。

やはり嫌な予感が当たりそうだ。

「三浦さんの正体を確かめるって、どうするつもりなんですか」

次郎は恐る恐る訊いた。優香がとんでもないことを言ってきそうで恐ろしかった。

「今度、フランケンの部屋に忍び込んでみいひん。あの人、やっぱり怪しいで。このままにしてたらあかんわ。ほんまに人殺しとかしてるかもやで。もしかしたら志賀さんとグルになって、ここの住人を次々に殺してるんとかがうやろうか」

「そんなことあるわけがないです。そういうのは映画やドラマの世界だけです。優香ちゃんの話は飛躍しすぎです」

「あたしな、こないだテレビで見たんよ」

優香は何が言いたいのかよくわからない。

「テレビで何を見たんですか」

次郎はげんなりしながら訊いた。早く風呂に入ってゆっくりしたい。

「外国で昔ほんまにあった連続殺人鬼の話やねん。その連続殺人鬼は人を殺すことに快感を覚えてしもうて、人の良いふりしてターゲットに油断させて、自分の部屋に招いてから殺すんやて。そんで証拠残らんように遺体を風呂場で切り刻んでたらしいんよ。フランケンが玉の湯に行くんはマンションの風呂場は遺体が転がってて使われへんからとちがうやろうか」

やはり優香の話は飛躍し過ぎている。

「三浦さんは僕たちを避けてますから、人の良いふりして油断させることはしていません。その時点で優香ちゃんが見たテレビの殺人鬼とは全然違うじゃないですか」

「今は女の人を殺害したとこで、その遺体を処分するのに必死やから、あたしらを避けてるだけやで。女の人遺体の処理が終わって証拠隠滅したら、次のターゲットを探しはじめるんとかがうか。あたしがこのマンションに入居した時は三浦さんしかおらへんかったんは、ここの住人全員が殺害されたあとやったんやで。で、今は新しいターゲットの補充を志賀さんがしてるんやわ」

「そうかもしれませんね。でしたら僕もさっさと引っ越します」

次郎は投げやりになっていた。

「次郎ちゃん、あたしの言うてる事、真剣に聞いてないやろ」

真剣に聞けるわけないだろう。

「三浦さんは変わった人ですけど、さすがに優香ちゃんの話は飛躍しすぎです。三浦さんは騒音を出してるだけです。それがなぜ殺人鬼になるわけですか」

「じゃあ、次郎ちゃんが三浦さんがなんで部屋で暴れてるんか調べてよ。女の人声の正体も調べてや」

「何のために僕が……」

次郎が言いかけたところで、優香が話を続け出した。

「あっ、わかった。もしかしたら、次郎ちゃんと麗子さんが聞いた女の人声の主はフ

ランケンに殺された幽霊とちがうやろか。女の人の幽霊がフランケンの前に現れたから、さすがのフランケンも怯えて暴れてるんやで。次郎ちゃん、あたしの推理当たってると思えへん？ めっちゃ怖いやろ」

「それが事実なら怖いですね」

次郎は呆れていた。

「怖すぎるで。これからあたしもここで暮らすのが怖くて不安やわ。だから次郎ちゃん、真相調べてあたしの不安を取り除いてよ」

「なんで、僕がそんなことしなきゃいけないんですか」

「なんでって、次郎ちゃんは男やろ」

優香はこういう時だけ次郎を男扱いする。

「男ですけど、僕は三浦さんの正体を知らなくてもいいです。いっそのこと一階に引っ越すのじゃなくて、このマンションから出ていきます」

「あたしら残してこのマンションから出ていくいうんか。あたしらのこと心配やないんか」

「そりゃあ、心配ですけど」

「あたしらのこと心配してくれるんやったら、次郎ちゃんはあたしらのために、あの二〇五号室に残ってほしい。そんで次郎ちゃん得意の壁に耳当てて盗聴してフランケンを見張っというほしい」

「そんなこと絶対に嫌です。さっさと引っ越します」

「次郎ちゃん、そんな冷たいこと言わんと頼むわ。あたしや麗子さんを守るためにフランケンの正体暴いてや」

「そんな危険な真似はできません。僕は引っ越します」

「わかった。じゃあ、その前にフランケンの部屋に忍び込んで調べるだけでも調べてみてよ。それ終わったら引っ越してもかまへんわ」

「それも嫌です。お断り……」

次郎が言い終わる前に、優香が両手を合わせ、涙目で次郎の目を見つめてきた。

「次郎ちゃん、お願い。あたし、次郎ちゃんだけが頼りやの」

優香はそう言ってから、次郎の隣に来て両手で次郎の腕を握った。

その後、優香は「お願い」と言って次郎の肘を彼女の胸に押し当てた。

次郎は肘にふんわりと柔らかい優香の胸の感触を感じた。

そこで次郎は「わかりました」と頷いてしまった。

志賀の思い

「三浦さん、しばらくここで住まわせてくれと、あなたが石中さんをお願いした時、あなたは石中さんと二度とトラブルは起こさないとお約束しましたよね」

志賀はテーブルを挟んで前に座る三浦の顔を睨んだ。

「すみません」

三浦はテーブルに額をこすりつけた。

「あれからもうすぐ一年です。そろそろ終わりにしませんか。結局、あの部屋からは何も出てこないんでしょう」

冷たい言い方だが、心を鬼にしなければならない。あんなことがあったのだから、三浦の気持ちがわからないわけではない。しかし、周りに当り散らしても何も変わらない。悪い方向へ進むだけだ。

「はい、何も出てきていません。しかし、俺は諦めきれないんです。何も出てきませんが、俺はまだここにいたいんです。お願いします」

三浦は頭を下げたままだ。

「あなたの気持ちは痛いほどわかります。私だって、このまま終わりにしたくありません。一年前の真相を知りたいです。そして、石中さんはあなたや私以上にそう思っているはず。だから石中さんはあなたに託したんです。それを裏切るような行為はしてはなりません」

志賀は三浦の後頭部に向けて言った。

「もう少しここに住まわせてください。石中さんには今回のことは内緒にしておいてください」

この男の姿を見ているとこれ以上冷たく突き放せない。

志賀は「わかりました」と首肯した。

「これまで少くらは何か手掛かりになるものは見つかったんですか」

「具体的なものはないですが、ある日を境に彼女の気持ちに変化があったことはわかります。几帳面な彼女が日記をつけるのをやめてしまっていますから」

「それだけだとなんとも言えませんね。ですが、その日に彼女の心境に変化があった何かが起こったことは間違いなさそうですね」

「はい、絶対に何かがあったはず。その何かがあるまで、ここに住まわせてください。お願いします」

三浦はまたテーブルに額をこすりつけた。

「わかりました。三浦さん、顔を上げてください」

三浦は「はい」と言って顔を上げた。その額は日の丸のように赤くなっていた、

「とりあえず二〇三号室の見市さんには一階の部屋に変わってもらいます。ただ、これからこのマンションに入居者はいれていきます。次に入居した人から、同じようなクレームがきた時は、私は石中さんに相談します。そうするとあなたには出て行ってもらうことになります。それは約束してください」

「わかりました。約束します。ありがとうございます」

三浦は体をずらして床に額を押し当てた。

これから先、彼はどうなっていくのだろうか。ここに居続けて立ち直ることが出来るのだろうか。いっそのこと忘れてしまうという選択もあるかもしれない。

「もう過去のことだ。さっさと忘れろ」

それを志賀の口から彼には言い出せなかった。

三浦の部屋の秘密

「行ったで一。さあ、次郎ちゃん、そろそろ行こか。太一くん、しっかり脚立押さえたってやー」

三浦の出掛ける後姿を確認した優香が次郎と太一に向かって叫んだ。

なぜこんな役回りになってしまったのだろう。次郎は二〇四号室のベランダにかけてある脚立を見上げながら「ハァー」とため息を吐いた。

なかなか脚立に足をかける勇気がない。次郎は高いところが苦手だ。

「のんびりせんと、さっさと始めよかー」

優香が現場監督のように腕を組んで、次郎の後ろに立っている。

次郎が振り向くと仁王立ちした優香が顎だけを突きだして、早く行けと合図した。

「はいはい、行きますよ」

次郎はそう呟いてから、しぶしぶ脚立の一段目に右足をのせた。

「次郎さん、気をつけてくださいよ」

脚立をおさえてくれている太一が心配そうな表情を浮かべた。

「あ、ありがとう」

次郎は太一に礼を言って、脚立の二段目に左足をのせた。次郎の全体重が脚立にかかった瞬間に脚立の右足が少しずれた。

思わず、「ウワーッ」と声が出た。

太一が脚立の左側しかおさえていないので、逆に不安定だった。

「なにしてんねん。しゃあないな、あたしもおさえたげるわ」

慌てて優香が太一の反対側から脚立をおさえた。

「三浦さん、急に帰ってこないでしょうね」

「麗子さんが見張ってるから、帰ってきたら、すぐにあたしの携帯に電話してくれるから、その時はそこからすぐに飛び降りたらええねん」

飛び降りたらええねんって簡単に言うなよと次郎は心の中で優香にクレームを言った。

次郎は一段一段、ゆっくりと震える足を堪えながら脚立を上がっていった。二〇四号室のベランダの高さまで来て、ベランダの手摺に手をかけようとした瞬間に脚立がガクッと揺れて手摺をつかみそこねて落ちそうになった。

「うわー」とまた声を上げた。脚立にしがみついてから下を見ると太一と優香が脚立から手を離し、二人でスマホをいじっていた。

「しっかり、おさえてて下さいよ」

次郎は優香と太一に対して声を荒げた。

「ちゃんとおさえてるし」

優香がふて腐れた顔で次郎を見上げた。

「おさえてなかったじゃねえか」と心の中で叫んでから、「お願いしますよ」と二人に声をかけた。

やっと、二〇四号室のベランダの手摺に手をかけて、ベランダに足をのせた。下を見ると思った以上に高いので足が竦んだ。震える足を堪え、手摺を乗り越えてベランダの床に降りた時には、全身が汗まみれになっていた。

「次郎ちゃん、どう？ 鍵かかっている？」

下から優香の叫ぶ声が聞こえる。

「ちょっとまって下さい」

あんまり大きな声で叫ぶなよと思いながら、ベランダのドアに手をかけて引いてみたが、全く動かなかった。やはり鍵はかかっていた。

「ダメです。鍵かかっています」

次郎はベランダの手摺から顔を出し、下にいる二人に向けて手を交差させバツ印を作った。

「やっぱり、ダメっすか」

太一が次郎を見上げた。

「部屋の中は覗けそう」

優香が両手でメガホンをつくり大声を上げた。

「そんな大きな声出さなくても聞こえますよ」

優香に聞こえないように呟いた。

「次郎ちゃん、なんか、言ったー」

また大きな声が返ってきたので、無視した。

「次郎さんどうですか」

太一が訊いてきた。

カーテンは開いていたので部屋の中は覗けた。

「中は見えます」

手摺から顔を出して二人に向かって両手で丸を作った。

「そしたら、部屋の中の写真だけ撮って、後で確認しよか。次郎ちゃん、ピンボケはあかん」

「言われなくてもわかっていますよ」

次郎はまた優香に聞こえないように呟きながら、ベランダから部屋の中を覗いた。次郎の部屋と同じ間取りだが、次郎の部屋に比べて家具が多い。そして意外と部屋はきれいに片付けられていた。

部屋を見た次郎はそこで違和感を覚えた。

「なんか変だな」

覗きながら首を捻り呟いた。きれいに片付いたこの部屋は三浦の部屋というより若い女性の部屋のように思える。部屋の右側に洋服ダンスと本棚が並ぶ。左側を見るとベッドがあって、その奥に鏡台が見える。その向こうが問題の風呂場だ。部屋の真ん中に小さなテーブルがあり、そこにはノートパソコンが置いてあった。

家具類は淡い色で統一されていて清潔感のある部屋だ。本棚の中の本は難しそうな本が並んでいた。鏡台には口紅などの化粧品が見えた。

真ん中のテーブルの上のパソコンには、『TOJO』と『ishinaka』と書かれたシールが貼ってある。

どう考えても、この部屋の住人が、あの三浦だとは思えない。この部屋の雰囲気と三浦とはあまりにもイメージがかけ離れている。

優香の言う通りかもしれない。次郎はポケットからスマホを取り出し、部屋の中の写真を何枚も撮った。

「あたしの言ったとおりやん」

次郎がスマホで撮った三浦の部屋の画像に優香は目を凝らした。

「ほんまそうやな」

太一が横からスマホを覗きこみ呟いた。

「次郎ちゃんも、さすがにこれで、フランケンがおかしいと思うたやろ。これ見てみ、この鏡台の上にあるんは女性が使う化粧品ばかりやで。間違いなくこの部屋の住人は女性やで。フランケンやないわ」

優香がスマホに映る化粧品の画像を指で大きくして次郎に見せた。

「ああ見えて、三浦さんにそういう趣味があったりしてな」

太一が腕を組んだ。

「なにわけのわからんこと言うてんねん。フランケンがそんな格好したとこ見たことないやろ」

優香が太一を睨みつけた。

「ま、まあ、そうやけど」

太一が口を尖らせた。

「やっぱり、おかしいで。フランケンの部屋の風呂場はやっぱり調べなあかんで。死体なかったとしても、血痕とか残ってるんちがうやろか」

優香は黒目勝ちな大きな目を見開いて身を乗り出し、次郎と太一を交互に見た。

「ちょっと見せてもらっていいですか」

これまで黙っていた麗子が、優香が見ていたスマホに手を伸ばした。

「麗子さんどうしたん？」

優香が麗子にスマホを手渡しながら訊いた。

「ええ、ちょっと」

スマホを受け取った麗子は指で写真を大きくしてじっと見ていた。

「麗子さん、何か気になるところありますか」

次郎がスマホの画像を真剣な目でじっと見ている麗子に訊いた。

「このノートパソコンのここに『TOJO』って書いてあるわよね」

麗子はスマホの画面を指差して次郎に向けた。次郎は麗子の指差す位置を目を凝らして見た。

「そうですね、『TOJO』ですね」

「これって、うちの学校のことかしら」

「東上学園ってことですか」

「そう。違いかしら」

麗子が右手を頬に当て首を捻った。

「いやー、何とも言えないですけど、可能性はありますよね」

次郎は腕を組んで首を捻った。

「次郎ちゃん、直接、フランケンに訊いてみたらどうなん？」

「えっ、ぼ、僕が、ですか」

次郎は自分の鼻に人差し指を向けた。

「そう、次郎ちゃんがやで」

「いや、でも、三浦さんに訊くのは、他の誰かでもよかったですか。優香ちゃんが訊いてみたらどうですか」

「次郎ちゃん、か弱い乙女にそんな危険なことさせて平気なん？ あんた男やろ。フランケンの隣の部屋やろ。次郎ちゃんがやるんが一番自然とちがう？」

「いや、そ、それは、ちょっとー」

次郎は頭を掻いた。

「次郎さん、お願いします。おれもこのままだと、ゆっくり眠れません」

太一が訴えるような目で次郎を見つめた。

「いやー、でもなー」

次郎は頭を掻きながら、お前らがやれよと思ったが、言葉を呑み込んだ。

「次郎ちゃん、あたしらを助けると思って頼むわ」

優香がじっと次郎を見つめて両手を合わせた。優香の柔らかい胸の感触がよみがえった。

「うーん」

次郎は首を捻った。

やっぱり自分がやるしかないのか。確かにこのままだと、全員がゆっくりと夜眠れないだろう。次郎は腕を組んで天井に視線を向けた。

「次郎さん、お願いします」

太一が正座して額を床に押し付けた。

「次郎ちゃん、お願い」

優香は胸の前で両手を合わせた。

「わ、わかりました。や、やってみます」

結局、次郎がやるはめになった。

三浦はいつも運送屋の制服を着て、朝早くに出掛けていく。帰る時間はまちまちで、早い時だと午後六時くらいで遅い時は午後九時くらいだ。

次郎と太一と優香が午後六時前に次郎の部屋の前に集合した。

麗子は職場でいろいろとトラブルが続いていて、今日は来れないということだった。

「もしかしたら、三浦さんの帰る時間次第で、ここで三時間待つ可能性もあるわけか」

太一はため息を吐いた。

「最長が三時間いっただけで、もしかしたら五分後に帰ってくるかもしれへんねんで。油断しとらんと、しっかり準備しときや」

優香が気合いを入れるように、次郎と太一の背中をパン、パンと叩いた。

五分後に三浦が現れるかもしれないと思うと、次郎の鼓動は急に激しくなった。

優香が勝手に考えた作戦は、次郎の部屋の風呂のお湯が急に出なくなったので、三浦のところはどうなのかと訊いてみて、三浦の風呂を見せてほしいといって三浦の風呂場を覗く作戦だ。次郎はそんな簡単に三浦が風呂場を見せてくれるとは思えなかった。

「そんな簡単に三浦さんが風呂場を見せてくれるとは思わないですけど」

優香の作戦を聞いた時、次郎は口を膨らませて言った。

「その時は物音がうるさい言うてクレームつけたらええやん」

優香は簡単にそう言った。

「あの三浦さんにそんなこと言えませんよ。それが言えてたら苦労しません」

「とりあえず、やってみてや。風呂場見せてくれへんかったら、次は次郎ちゃんの部屋に女の人の声が聞こえるから幽霊かもしれませんとか言うて、フランケンに相談してみたらええやん。フランケンの部屋は女の人の声は聞こえませんかとか言うてみいや」

「たぶん、無視されるだけですよ」

「あー、次郎ちゃん、ほんま面倒臭いことばかり言うなー。後は次郎ちゃんのアドリブでなんとかしてや。それでフランケンのこといろいろ探ってみたらええんとちがうん。とりあえずやってみてーや」

最後は優香に丸投げされた。

どう考えても、三浦は凄んでくるとしか思えない。三浦に凄まれて、引き下がらずに強く出る勇気は次郎にはなかった。

『カツカツ、カツカツ』

マンションの階段を上がってくる足音が聞こえてきた。三浦が帰ってきたようだ。早すぎる。心の準備が全く出来ていない。次郎は焦った。

「ほら、待ち時間五分で帰ってきたやん」

さすがの優香も緊張しているのか、次郎の二の腕を握りしめてきた。太一も緊張しているのか胸に手を当てていた。

次郎はみぞおちの辺りがキリキリと痛み出した。

「次郎ちゃん、頑張ってな」

優香が次郎を黒目勝ちな目でじっと見つめてきた。この目で見つめられると、大抵の男は、今の次郎のように優香のいいなりになるのだろう。

階段を上がりきった所に大きな黒い影が見えた。黒い影がゆっくりこっちに向かってくる。遠くからでも胸板の厚さがわかる。黒いTシャツの袖からは丸太のような腕が覗いている。あの腕で殴られたら、失神するんじゃないだろうか。三浦はゆっくりと次郎たちの方へ近づいてきた。次郎はゴクリと生唾を飲み込んだ。

こっちに向かってくる三浦と一瞬だけ目が合った。ギロッと睨まれて、次郎はすぐに目を逸らしてしまった。

「次郎ちゃん、頑張って」

優香が耳元で囁いた。次郎の二の腕を握る手に力が入る。

次郎は顔を上げ、もう一度三浦を見た。三浦は俯いていたが、次郎の視線を感じたのか、急に顔を上げ次郎に視線を向けた。目が合った瞬間、三浦は口元を歪め次郎を睨みつけてきた。

次郎の足はガクガクと震え出した。呼吸するのも苦しくなった。優香が背中をさすってくれた。何度も深呼吸をして落ち着こうとしたが全く効果はなかった。

三浦が二〇四号室の前に来て、ズボンのポケットから部屋の鍵を取り出した。次郎は覚悟を決めて一歩前に出た。三浦が次郎の方を見た。次郎は三浦に向けて頭を下げた。

「こ、こんばんは」

三浦は次郎に一瞬だけ視線を向けたが、一瞥して鍵穴に鍵を差し込んだ。

「あ、あの、僕、隣の瀬川といいます」

次郎が言うと三浦は次郎の顔をギロリと睨んだ。

「ああ、それが？」

「いや、あの……」

「次郎ちゃん、頑張ってる」

優香が次郎の背中に隠れながら小声で囁いた。次郎は頷いてから、背筋を伸ばした。

「えっと、ですね」

三浦は次郎の方を見ようともせず鍵を回した。

「次郎ちゃん。早よ言い」

優香が次郎の背中をつねった。

「いてっ」と声が出た。

「なに？」

三浦が凄んできた。

「あ、いえ、あの、み、み、三浦さん」

次郎が顎を引いて声を張った。

「さっきから、なんなんだよ。うっとうしいな」

三浦が次郎の方に一歩足を踏み出してきた。

次郎は殴られると思い両腕で頭を覆い隠し後ずさりした。足元がふらつき、そのまま後ろ向きに倒れそうになったところを優香が次郎の背中を支えた。

「いや、あの、僕は隣の瀬川と言いますが覚えてますか」

次郎は優香に体を支えられたままだ。

「ああ、何度も言うな」

「今日もお仕事だったんですね。お疲れさまでした」

次郎は体を立て直してから深々と頭を下げた。

「フン」

三浦が面倒臭そうに鼻を鳴らした。

「あ、あのですね。う、うちのお風呂のお湯が出なくなったんですが、三浦さんとは、どうかと思ひまして」

次郎は声が震えるのを必死で堪えた。次郎は嘘をつくのが苦手だ。その上、こんな厳つい大男を前にすると声が上ずってしまう。

「風呂の湯か？」

三浦が眉間に皺を寄せた。

「は、はい」

喉に何かがつっかえたように声が高くなり裏返った。

「うちは問題ない」

三浦がそう言って部屋に入ろうとドアを開けた。

「きょ、今日は大丈夫ですか」

次郎が勇気を出して一歩前を出た。

「今日？」

三浦は次郎の方に体を向けた。威圧感がハンパではない。

「は、はい。うちはさっき急にお湯が出なくなりました」

「今、帰ったとこなのに、そんなのわかるかよ」

「じゃ、じゃあ、一度、確認してもらえませんか」

「今からか」

「は、はい、ぼ、僕と一緒に」

次郎が言うと、三浦はハ虫類のような目を見開いて次郎を睨んだ。

「なんで、お前といっしょに確認しなきゃいけないんだ」

「いや、三浦さんとはどうなのかが早く知りたくて……」

「俺が一人で確認してくるから、お前はここで待ってろ」

三浦はそう言って部屋のドアを少しだけ開けて部屋の中に体を滑らせるように入っていった。

部屋に入る時、次郎に部屋の中を見られないようにしているのが見え見えだ。三浦の体が入るだけの必要最小限の隙間だけしかドアを開けなかった。三浦が部屋に入ると同時にカチャッと鍵をかける音がした。

部屋の中を見せないようにしているのは明らかだ。女性の部屋としか思えない二〇四号室にはどんな秘密が隠されているのか。

次郎は優香と太一に顔を向けて、首を捻りながら両手を上げてお手上げのポーズを見せた。

「次郎ちゃん、次は女の人の声が聞こえる話をふってみて」

優香が耳元でこそそそと言った。

「言ったところで、無理……」

次郎が優香に言いかけると、三浦の部屋の鍵が開く音がした。

次郎は優香に話すのを途中で切って、ドアの方に顔を向けた。ドアが少しだけ開いて、三浦が顔を覗かせた。

「うちは問題なく、湯は出る」

三浦は外に出ようとはせず、ドアの狭い隙間から顔を覗かせて言った。

「じゃ、じゃあ、三浦さんの部屋には、女性の幽霊が出たりしませんか」

次郎は三浦が閉めようとするドアノブに手をかけ、慌てて声を発した。

心臓が飛び出しそうなくらい緊張していたが、なぜか少しずつではあるが次郎は度胸がついてきた。

「女の幽霊って、どういうことだ」

ドアの隙間から三浦の顔が少し歪むのがわかった。

「は、はい、女性の幽霊が出てるかもしれないんです」

三浦は次郎の顔をじっと見ていた。その時、三浦の喉仏が激しく上下するのがわかった。さっきまでの凄んでいた三浦とは明らかに違った。

「幽霊なんて出るわけないだろ。いい加減にしろ」

そこでドアがピシャリと閉まった。

「あの、それ……」

次郎の声は閉まったドアに跳ね返された。

次郎は振り返り、優香と太一に向かって「やっぱり、無理です」と両手を上げた。

「次郎さん、凄いつす。怖くなかったんっすか」

太一が尊敬の眼差しを次郎に向けた。

「怖かったですよ。体がガクガク震えてましたけど覚悟を決めました。でも、結局なにもわかりませんでした。確かに、優香ちゃんの言うとおりに、三浦さんは怪しいんですけどね」

次郎は廊下の手摺にもたれかかった。体が震えていたので、二本の足だけでまっすぐに立っていられなかった。

「幽霊の話した時のフランケン態度、変やったと思えへん？」

優香が次郎と太一の顔を交互に見た。

「それは思いました。僕が女性の幽霊の話をした途端、ちょっと辛そうな顔になりました。それまでは凄んでいましたけど、その時はこの場から逃げ出そうとしてる感じがしました。きっと、女性の幽霊に思い当たるフシがあるんだと思います」

「でも、この先、どうしたらいいのかな？」

太一が首を捻った。

「これで、やばいかもしれへんな」

優香が口元を歪めた。

「やばいって、何がですか」

「もし、フランケンが殺人鬼やったら、それに勘づいてるあたしらが邪魔なんどちがうやろか。特に次郎ちゃんはフランケンからしたらめちゃくちゃ邪魔やと思うで。次郎ちゃん可哀想やけどちょっとヤバいんちがうかな」

優香が次郎に悲しげな視線を向けた。

「三浦さんにとって、ぼ、僕は邪魔者ですか」

次郎は自分に人差し指を向けた。どういう意味かよくわからない。

「そりゃそうやろ。殺人の痕跡を消そうとしてんのに、それに気づいた次郎ちゃんはフランケンにとって邪魔やと思うで。これで、フランケン次郎の殺人を考えるかもしれへんな。次郎ちゃん、今日から鍵はちゃんとかけときや。それから外出する時は後ろとか注意した方がええんとちがうかな」

「えっ、え、ちょっと待ってください。この先、僕はずっと三浦さんに怯えなければならぬんですか」

「まっ、そういうことやね」

優香と太一が声を揃えた。

「そんなの耐えられないです」

次郎が頭を抱えて天を見上げた。

『タッタッタッタ』

激しい靴音が聞こえてきた。マンションの階段を駆け上がってくる靴音だ。一体誰だろうか。二階に住んでいるのは今は次郎と三浦だけだ。

そこにいた全員が階段の方に視線を向けた。するとそこに階段を上りきった麗子の姿が見えた。麗子は肩で息をしている。

「あっ、麗子さん」

優香が麗子に向かって右手を振った。

麗子は優香の声が聞こえていないのか、優香に手を振り返すこともなく凄惨な形相でこっちに向かってきた。何かを睨んでいる目をしているが、それはどこに向いているのかわからない。次郎たち三人の姿は視界に入っていない様子だ。

麗子はまっすぐ前を向いて早足でこっちに向かって歩いてくる。

「麗子さん、どうしたの？」

優香がもう一度麗子に声をかけたが、全く耳に入っていない様子だ。眉間に深い皺を寄せ険しい表情を浮かべていて目はギラギラとしていた。

麗子は二〇三号室の前を通り過ぎた。まだずっと前を向いている。

次郎たちは異様な麗子の様子に三人揃って息を飲んだ。

麗子は二〇四号室の前で立ち止まった。すぐ横にいる次郎たちの存在に気づいていないのか、次郎たちを完全に無視している。

『ドンドン、ドンドン』

麗子は二〇四号室のドアを激しく叩いた。

「麗子さんダメや。そんなことしたらフランケンが怒り出して殺されるで。怖い思いするんは次郎ちゃんだけで充分や」

優香が声を上げた。次郎はなぜ自分だけが怖い思いをしなければならないんだと優香に文句を言いたかったが、今はそれどころではない。

「三浦さん、出てきて下さい。お話したいことがあります」

「麗子さん、やめてー」

優香が麗子の体に抱きついて悲鳴のような声を上げた。そこで、やっと麗子は冷静になったのか優香に顔を向けた。

「あら、優香ちゃん」

麗子はひきつるような笑みを浮かべた。

「麗子さん、どないしたんよ」

優香が麗子の腕を引っ張った。

そこで三浦の部屋のドアが少しだけ浮いた。

「やかましいな。お前らしつこいぞ」

ドアの隙間から三浦の声がした。

「三浦さん、お話があります」

麗子がドアの隙間に顔を突っ込んだ。

麗子の異常ともいえる行動に次郎は恐ろしくなった。

「なんだよ、ボンクラの次はババアかよ」

ドアの隙間から覗く三浦の表情は、次郎の時以上に険しくなっていた。

「三浦さん、お話があります。今からわたしのお話を聞いて下さい」

麗子は叫ぶような声で三浦に訴えた。

「風呂場の湯の次はトイレの水が出ないとかいうのか。俺は暇じゃねえんだ。さっさと失せろ」

三浦がドアを閉めようとしたが、麗子はドアの隙間に靴の爪先を突っ込みドアが閉まらないようにした。

三浦はそれでもドアを閉めようと引っ張った。麗子の爪先がドアの隙間に挟まれ、靴がへしゃげそうになっていた。それでも麗子は怯むことはなかった。

次郎たち三人はどうすることも出来ず、ポカーンと口を開けてその様子を見ていた。

「あなたにとって、とても大切な話です」

麗子の高い声が響いた。

麗子はドアの隙間に顔を突っ込む勢いだ。ドアに頭が挟まれて麗子が殺されてしまうと思い、次郎と太一がドアを引っ張った。

「てめえらの、わけのわからん話は聞きたくねえんだよ」

三浦が怒鳴った。

「わたしは東上学園高校の教師をしております見市麗子と申します」

「東上学園だと？」

三浦の声がさっきまでの怒声とは違う低く探るような声になった。

「はい。昨年まで東上学園高校で音楽の教師をしていた石中香代子さんについてお話したいことがあります」

麗子が言うと三浦のドアを閉めようとする力が緩んだ。次郎と太一が引っ張っていたドアが勢いよく開いた。二人はその勢いで尻餅をついて転んだ。

「石中香代子について何か知ってるのか」

さっきまで怒り狂っていた三浦の表情が悲しそうな表情に変わった。

「はい、石中香代子さんについて、わたしの知っていることをあなたにお伝えしたいと思ひまして、今日ここに来ました」

麗子が言うと三浦はおとなしくなった。

「わかった。話を聞かせてくれ」

三浦はそう言って、麗子を部屋に招き入れようとした。

「ちょっと、待って」

優香が後ろから声を上げた。部屋に入ろうとする麗子と三浦が優香に視線を向けた。

「優香ちゃん、どうしたの」

麗子が優香の方に振り向いた。

「あたしたちも中に入れて下さい。あたしたちも、話を聞く権利があると思います」

荒れた名門

真っ白で滑らかな曲線を描く瀟洒な校舎が夕陽で赤く染まる。重厚な校門に名門の貫禄を感じる。

麗子はこの春から東上学園高校に赴任し、三年A組の担任になった。

名門進学校の東上学園高校の三年の担任ということでプレッシャーも感じていたが、それ以上にやりがいを持って挑んだはずだった。

しかし、入ってみると、中身は名門進学校というのとは程遠く、麗子は戸惑いを隠せなかった。特に担任を持つ三年A組は進学校とは思えないほど荒れていた。

麗子をはじめて教壇に立って見た光景は、髪の毛を赤色や金色に染め派手な化粧をした生徒たちの姿だ。彼女たちは椅子に真っ直ぐに座らず、斜に構えふてくされた表情を浮かべていた。目が死んでいる生徒や麗子に攻撃的な視線を向けてくる生徒たちを見て、麗子は恐怖を感じた。

麗子が思い浮かべていた大学進学のために目の色を変えて勉学に励むといった学生の姿はこの教室にはなかった。

「先生、最悪のクラス持たされたね。あたしらは元々の落ちこぼれだから、このクラスの成績が悪くても先生の責任じゃないから、気楽にやってくれたらいいよ」

一番後ろの席で真っ赤な髪の毛をした生徒が麗子をバカにするように言った。教壇の上にある座席表を見てその生徒の名前を確認した。そこには持田翔子と書いてあった。この名前は東上学園の先輩教師から少し問題があると聞かされていた。

「そうそう、あたしたちには勉強教えなくてもいいからさ、その代わり自由にさせてね」

持田翔子の隣に座る生徒が言った。彼女の名前は高橋沙耶香と書いてあった。この名前も先輩教師から聞いていた。

「そういうわけにはいかないわ。あなたたちは名門の東上学園に入学してきたんだから、元々の落ちこぼれのはずないわ。あなたたちはみんな名門大学を目指せるはずよ。これから受験勉強に頑張りましょう。先生もあなたたちをしっかりとフォローさせてもらうわ」

「先生、そんな面倒臭いこと言わないでよ」

持田翔子が椅子にふんぞり返り腕組みをした。

「何が面倒臭いのよ。高校三年生にとって、この一年間は大切な時よ。しっかり勉強しましょうよ」

麗子はそう言って教室を見渡した。みんな違う方向を見て、麗子と目を合わせようとしない。

「先生が勝手にすればいいわ。あたしたちも勝手にするからさ。あたしたちが大学に行けなくても、先生の責任にしないから、そこは安心して」

持田翔子は麗子に向かってニヤリと笑みを浮かべた。

一年生の時の持田翔子は成績優秀で模範生のような生徒だったと聞いている。二年生に進級してしばらくしてから授業をサボるようになり、化粧をし髪の毛を染めるようになったらしい。

三年A組が荒れているのは持田翔子が他の生徒に悪い影響を与えているからだと言った先輩教師たちは口を揃えて言う。

東上学園での教師生活は麗子が最初に思い描いていたものとはかけ離れていた。持田翔子さえいなければと麗子は思った。持田翔子のせいで自分の思い描いていた名門進学校での教師生活は灰色になってしまった。

「見市先生、大変です。今、駅前のコンビニの店長から電話が入っていて、すぐに持田翔子の担任に変われと言っています」

国語教師の山中が麗子の座る席までやってきて、机に両手をついた。山中の紺色のストライプ柄のネクタイが麗子の目の前で揺れている。

「山中先生、そんなに慌ててどうしましたか」

麗子は山中の顔を見上げた。

「だから、駅前のコンビニの店長が見市先生と話がしたいと電話してきているんです。すぐに電話に出てください」

「駅前のコンビニですか。コンビニの店長が一体わたしに何の用があるんでしょうか」

麗子は訳がわからず首を捻った。

「決まってるじゃないですか。万引きですよ。きっと持田翔子が万引きで捕まったんですよ」

「えっ、ど、どういうことですか」

麗子は驚いて立ち上がった。

「私に言われても。とりあえず電話に出てください」

山中が麗子の机の上の電話を指さした。外線一番のランプが赤く点滅していた。麗子は受話器をとり、赤く点滅するボタンを押した。

「大変お待たせいたしました。見市と申します」

「あなたが見市先生ですか」

しゃがれた低い男の声が受話器から聞こえてきた。

「はい、わたしが見市ですが」

「持田翔子ってあんたとこの生徒ですよ」

「はい、わたしのクラスの生徒ですが、持田翔子がなにか？」

「なにかじゃないですよ。うちの店で万引きしたんです。今、捕まえて事務所にいますから、先生にすぐ来てほしいんですよ」

「持田翔子が万引きですか」

麗子の声は裏返ってしまった。

「そう。警察に連絡しようと思ったんですけどね、若いし将来もあることですから、警察はやめて、とりあえず学校に連絡させてもらったんです」

「そうですか、それは申し訳ございません」

麗子は受話器を持ったまま頭を下げた。

「警察に連絡しないかわりに、先生にこの生徒を引き取りに来てほしいんです。このまま黙って帰すわけにいかないですからね。しっかり反省してもらわないと困りますからお願いしますよ」

「わかりました、すぐにお伺いします」

「こっちもこれでメシ食ってるわけですから、こんなことを繰り返されたら、たまったもんじゃないですからね」

「ごもっともです。本当に申し訳ございませんでした」

受話器を持ったまま、もう一度頭を下げた。

「じゃあ、待ってます。こっちも忙しいんで、すぐに来て下さいよ。お願いしますね」

そこで電話がプツリと切れた。麗子は受話器を置いてテーブルに両手をつき項垂れた。どういことだ。信じられない。持田翔子はなぜ万引きなんかしたんだ。麗子の頭の中は混乱した。

「見市先生、大丈夫ですか」

ずっと隣でいた山中が麗子の顔を覗きこんだ。

「ええ」という掠れた声しか出せなかった。

「私がかわりにコンビニまで持田を引き取りに行きましょうか」

山中が眉をハの字にして心配そうな表情を浮かべた。

「ありがとうございます。でも、大丈夫です。持田さんはわたしのクラスの生徒ですから、わたしが行ってきます」

麗子はハンガーに掛けていた上着を手を取った。

「では、行ってきます」

「見市先生、大丈夫ですか。顔色が真っ青ですよ。私も着いて行きましょうか」

山中がまた心配そうに声をかけてくれた。

「ありがとうございます。山中先生もお忙しいでしょうから、わたし一人で大丈夫です」

麗子は上着を羽織り山中に一礼し、職員室を後にした。

テレビで万引きする若者が多いと聞いたことはあったが、自分とは全く関係のない世界のことだと思っていた。ここに赴任した時にはまさか自分の教え子が万引きで捕まってお詫びに行くことになるとは思ってもみなかった。

「東上学園の生徒がこんなことするなんて思ってもみませんでしたよ。優秀な生徒ばかりだと思ってましたからね。これからしっかり教育をお願いしますよ」

喉仏が目立つ鶏のようなコンビニの店長は口元を歪めた。

「申し訳ございませんでした」

麗子は隣に立つ持田翔子の頭をおさえながら一緒にコンビニの店長に頭を下げた。

「盗ったものがこの口紅とボールペンです」

持田翔子が万引きした商品がテーブルの上に並べて置いてある。麗子はそれに視線を落とし唇を噛みしめた。悔しくて悲しくて涙が出そうになった。

「本当に申し訳ございませんでした。これらは、わたしの方で買い取らせていただきます」

「先生に買い取ってもらうのは有り難いですがね、それで終わらせないで下さいよ。しっかり本人に注意して、支払いも本人にさせて下さいね。先生や親が甘やかすと、こうい

う奴はまたおんなじこと繰り返しますよ」

コンビニの店長が翔子に蔑むような視線を向けた。

「わかりました。しっかり指導して、この代金はわたしが立て替えて、後で本人に支払わせませす。本当に申し訳ございませんでした」

麗子は深々と頭を下げた。持田翔子が頭を下げようとしないので、「持田さん、店長に謝りなさい」と強い口調で言った。

持田翔子は蚊の鳴くような声で、「すいませーん」とだけ言って首を左右に折っていた。

その反省していない謝り方を見て、麗子は「ハァー」とため息を吐いて首を折った。

コンビニの店長は「フン」と鼻を鳴らしてから、「こりゃ、ダメだね。警察に被害届を出した方がよかったわ。先生、あんたはこいつに舐められてるよ」と呆れたように言って椅子に腰を下ろした。

「持田さん」と麗子が持田翔子の正面に立って彼女の両肩を揺らした。

「先生、もういいよ。こいつを早く連れて帰ってくれ。顔見てるだけでムかつくからさ」

店長はそう言って椅子を回し、背中を向けた。

「申し訳ございませんでした。今後このようなことのないよう、しっかり指導いたします」

麗子が店長の背中に向けて深々と頭を下げた。涙がこぼれ落ちそうなのを必死で堪えた。

「東上も地に落ちたもんだな」

店長は麗子に顔を向けることもなく、吐き捨てるように言った。

麗子がイメージしていた東上学園高校は、コンビニの店長と同じく、優秀な生徒ばかりで万引きする生徒がいるなんて思ってもみなかった。将来の進路に向けて不安を抱きながらも希望に満ちた生徒ばかりだと思っていた。

教師は、そんな生徒達の不安を取り除いてやり、彼女たちを志望校に合格させるため、しっかりとフォローすることだと思っていた。

そして、生徒が難関の志望校に合格した暁にはいっしょに喜びを分かち合う自分の姿をイメージしてこの東上学園高校にやってきたはずだった。

麗子は理想と現実のギャップに、何もかもが嫌になってきた。この学校で働きたいがために、実家を離れて引っ越しまでしたのにと暗鬱な気持ちが広がっていく。

そして、引っ越し先のマンションに帰れば迷惑な住人に悩まされなければならない。一体、自分は何のために教師になったんだろう。

持田翔子は、一年生の時は優秀な生徒だと聞いていた。ブラスバンド部に入部していて、いつも夜遅くまで練習をしていたそうだ。ブラスバンド部の練習が忙しくても、学業を疎かにすることなく、成績はいつもトップクラスだったそうだ。

そんな持田翔子が急にブラスバンド部を辞めて学校をサボるようになった。トップクラスだった成績は、急降下して、今では最下位を争うところまで落ちている。なぜ持田翔子は変わってしまったのだろう。

なんとか昔の彼女に戻ってほしい。麗子はそう願っていたが、今の持田翔子に声をかける言葉が思い浮かばないまま学校までの道のりを翔子と並んで歩いた。

今回の万引きの件を辻野校長に報告しお詫びするため、麗子は持田翔子と校長室のド

アの前に立った。

「持田さん、大丈夫？ わたしから校長先生に今日の件を報告するから、最後に頭を下げて、校長先生、すみませんでしたと頭を下げるのよ。それでしっかり反省してね」

麗子が翔子の正面に立ち、彼女の両肩に手を置いて言ったが、彼女の目は遠くを見ていて麗子に視線を合わせようとはしなかった。

「ハァー」

麗子は今日何度目になるのかわからないため息を吐いた。

「校長先生を待たせてるから中に入りましょう」

麗子は気を取り直して、翔子の目をじっと見た。今から校長に頭を下げなければならぬのに、翔子からの反応はなかった。

不安な気持ちのまま、麗子は校長室のドアをノックした。中から「はい」と声がして、しばらくするとドアが開いた。校長が赤ら顔を覗かせた。

校長は麗子の顔を見て頷いてから、翔子を蔑むような目を見た。

「とりあえず中に入ってください」

校長が顎で校長室の中を指した。

麗子は翔子の手を引いて中に入ろうとしたが、彼女は動こうとしなかった。

「入りたくない」

翔子が首を横に振って、麗子の手を振りほどこうとした。

「持田さん、いい加減にきなさい」

麗子は強い口調で言って、強引に彼女の腕を引っぱり校長室の中へと連れて入った。

校長は麗子たちが校長室に入ると同時にソファに腰をおろした。麗子は立ったまま、校長に今日の万引きの件を報告した。

「わたしの指導不足でご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

最後に校長に頭を下げたが、翔子はコンビニの時と同じように首を左右に折って、「フッ」と息を吐くだけだった。

「困ったね。こんなことが外に知れたら、うちの学校の評判はガタ落ちだ」

校長はそう言ってから、立ち上がり、ギョロリとした目を麗子と翔子に向けた。

「わたしの指導不足です。本当に申し訳ございませんでした」

麗子はまた深々と頭を下げた。

隣に立つ翔子は宙に視線をやり、口を尖らせていた。彼女の後頭部を押さえ無理矢理に頭を下げさせた。

その様子を見た校長は「フン」と鼻を鳴らした。

「今回は、赴任してきたばかりの見市先生に免じて処分はしないでおくけど、次はないからな」

校長は翔子をギョロリとした目で睨みつけた。

「今回の万引きの件について、持田さんの処分は本当に無しでいいんでしょうか」

麗子は目を見開いた。

「ええ、今後の見市先生の指導に期待していますので」

校長はそう言って口角を上げた。

「校長先生、ありがとうございます。今後は絶対にこんなことがないように指導してま

います」

麗子は校長に言ってから、「持田さん、わかった？ もうしないよね」と彼女の肩に手を置いた。

しかし、翔子は宙に視線を向け口を尖らせたままだった。

「持田さん、校長先生が今回の件の処分は無しにしてくださったんだから、校長先生にちゃんとお礼を言いなさい」

麗子が言うが、翔子の態度は変わらなかった。

「校長先生、申し訳ございません。今後、わたしがしっかり指導してまいります」

校長に向けて頭を下げた。

「ええ、ぜひそうしてください。次はないですからね。くれぐれもお願いします」

「はい」

麗子は背筋をピンと伸ばした。

「見市先生、それでですね」

校長は顎を擦っていた。

「はい、なんでしょうか」

「見市先生は、今日この後、時間ありますかね」

校長が腕時計に視線を落として訊いてきた。

「あ、はい、なにか？」

「この後、彼女の今後のことについて、少し話し合いたいと思ひましてね」

校長が翔子に視線を向けた。

「あ、はい、そうですね。校長にそうしていただけると、わたしも心強いですし有り難いです。是非お願いいたします」

「でしたら、私は今から残っている仕事を終わらせないといいけませんので、それが終わってからでいいですか」

「はい、校長のお時間に合わせます」

「そうですね、それでしたら見市先生は、まず彼女を自宅まで送って帰ってください。それから夜の八時に、もう一度ここに来てもらえますか」

「わ、わかりました。午後八時ですね。校長、お忙しいのにお時間をとっていただきありがとうございます」

「いいですよ。かわいい生徒たちのためですからね」

校長がソファに腰を下ろし、翔子の方を見た。彼女は校長に顔を合わせようとせず下を向いていた。

「二度とやらないよな」

校長が下を向く翔子に言ったが、彼女は「校長先生こそ二度とやらないでよ」とわけのわからないことを言った。

「なんだと」

校長のこめかみに青筋がたった。

「申し訳ございません」

麗子は慌てて頭を下げた。

「じゃあ、夜八時にここで待っています。その時に今後のことを話し合ひましょう」

「わかりました。では、彼女を自宅まで送ってきます」

麗子は翔子を自宅まで送りながら、彼女になんと声をかければいいのかわからなかった。ただ二人並んで口を開くことなく翔子の自宅まで歩いた。

この沈黙の時間が苦しい。彼女の心を開いてあげられない自分が情けなかった。自分はたった一人の女子生徒の心を開いてやることもできない。教師失格だなと暗くなっていく空を眺めた。沈みかけている太陽が潤んで見えた。

今日この後、校長に相談してみよう。校長ならこんな時、持田翔子になんと声をかけてあげるのだろうか。校長なら、きっと昔の彼女に戻れるための気のきいたアドバイスを教えてくれるはずだ。

持田翔子の自宅の前に到着した。お互い言葉を発することがなかったが、別れ際に彼女が口を開いた。

「先生」

風にかき消されそうな掠れた声だった。

彼女は麗子の目をじっと見ていた。彼女の茶色かかった虹彩が悲しげに光っていた。

「なに、持田さんどうしたの？」

麗子は持田翔子の肩に手を置き、彼女の目をじっと見た。

「ううん、なんでもない」

彼女は俯いてしまい、首を横に振った。

「持田さん」

麗子が声を掛けると「先生、ごめんなさい。さよなら」彼女はそう言ってペコリと頭を下げて家に入っていった。

持田翔子はなにか言いたそうにしていた。しかし、自分の力不足で聞き出すことが出来なかった。もっと、生徒から信頼される教師にならないといけない。

麗子は持田翔子の自宅を眺めてから、踵を返し、校長に会うために学校へ戻った。

辻野校長

ソフトボール部が練習を終えて帰り支度をしている。整備されたグラウンドが月明かりで白く輝いて見える。麗子はグラウンドを横目に体育館の前を歩いた。バレーボール部の練習が今終わったようで体育館の明かりがパチンと消えた。辺りが一気に暗くなった。体育館の隣の校舎の一階の一番奥が校長室だ。

麗子は校舎に入り校長室へと向かった。廊下には非常灯以外の明かりはなくかろうじて歩ける状態だ。夜の学校はやはり薄気味悪い。校長室に校長がいなければ決して一人では来ないだろう。

校長室の前に立ち背筋を伸ばし髪のを整えた。深呼吸してから木製で重厚なドアをノックした。しばらくすると、ドアが少し開いて校長が顔を覗かせた。

「八時ぴったりだね」

校長はそう言って腕時計に視線を落とした。

「校長先生、お待たせして申し訳ございません」

麗子は腰を折った。

「いいですよ。どうぞ、中に入りなさい」

校長が笑みを浮かべ、ドアを大きく開けた。

「失礼いたします」

校長室に足を踏み入れたが、照明がついていなかった。廊下より窓がない分、中は真っ暗だった。

「見市先生、お一人で来ましたか」

暗いなかで校長のギョロリとした目だけが光って見えた。

「はい、一人で来ました」

校長は時間まで照明を消して眠っていたのかもしれないと思った。校長は疲れているのに、わざわざ時間をとってくれたのだと恐縮した。

「それなら、結構。じゃあ、奥に入って」

校長に言われるがまま、暗い校長室へと入っていった。バタンとドアが閉まる音がしてガチャと鍵がかかる音がした。

「校長お休みになられてたんですか」

後ろに立つ校長に声をかけ、振り向こうとした瞬間、強い力で背中を押され、右足の靴が脱げて前につんのめった。体を立て直そうとしたが、背中から押される力が強くその勢いのままソファにうっぶせた。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。気がつけば目の前にソファの手摺が見える。うっ伏せのままソファに倒れ上から強い力で押さえつけられた。

「キャー」と声を出すと同時に後頭部を強い力で押さえつけられソファに顔が埋まった。声を出そうとするが、ソファに押し付けられているため「ムグムグ」としか声が出ない。

「おとなしくしなさい」

耳元で校長の低い声がした。首筋に冷たい金属のような感触があった。刃物を当てられているようだ。怖くて体が硬直した。

そのままガムテープで口をグルグルにまかれた。

背中から校長の全体重をかけられ、身動きがとれなかった。抵抗したいが、麗子の力では校長はびくともしない。

「見市先生がおとなしくしていたら、持田さんを悪いようにしませんから、可愛い教子の為に、ここは少し辛抱しましょうか」

また首筋に冷たいものが当たった。下半身の辺りに違和感を感じた。校長が自分の下半身をグイグイと麗子のお尻に押し付けていた。逃げ出したいが、どうしようもできない。校長の手が胸元に伸びてきた。

「や、やめてください」と言いたいが、ガムテープで口をふさがれているので、「ムグムグ」としか声が出ない。

「見市先生、持田さんの為にも、ここは抵抗しない方がいいですよ」

声が出ないので首だけを激しく振った。

「持田さんを退学にしてもいいならやめますけど、それでいいですか」

何故、校長がこんなことをするのだ。悲しくて悔しくて苦しいけど、どうしようも出来ない。尊敬していた校長までがこんなことするとは思ってもみなかった。やはり、男という生き物はこういうものなのだ、涙がボロボロと溢れ出てソファを濡らした。

もう限界だった。失望で体に全く力が入らない。持田翔子のためにも、このまま校長に逆らわない方がいいのかもしれないと諦めかけた時だった。

『パッパンパーン、パッパンパーン、パパッパパ、パパッパパ』

校長室の外から大きな音がした。トランペットの音だ。校長がその音に驚いて、麗子を押さえつけている手を緩めた。その隙に麗子は覆い被さっていた校長を押し退けた。

バッターンと音がして、校長はソファから転げ落ちた。

『パッパンパーン、パッパンパーン、パパッパパ、パパッパパ』

外から聞こえてくる音は一段と大きく鳴り響いた。

麗子はドアへと向かって一直線に走った。ドアを開けようとしたが、鍵がかかっている。鍵に手をかけるが、手が震えてうまく開けられない。

『パパッパパ、パパッパパ』

音はまだ鳴り響いている。

「ウォー、逃げるなー」

背中から校長の悪魔のような声がした。震える手でなんとか鍵を開けようとした。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせた。そこで、やっと鍵が開いた。

「逃がすか」

ドアを開けようとしたところで、校長の右手が麗子の肩にかかった。力いっぱい引っ張られ、後ろに倒れそうになった。

『パッパンパーン、パッパンパーン、パパッパパ、パパッパパ』

ドアの向こうから、また激しい音が響いた。

そこで校長の麗子の肩を握る右手の力が緩んだ。麗子は校長の右手を振り払い、力いっぱいドアを開けて、外に転がるようにして出た。

『パッパンパーン、パッパンパーン、パパッパパ、パパッパパ』

外に出るとトランペットの音が大きく聞こえた。

腰が抜けて立ち上がれない。床を這うようにして必死で逃げたが、このままではすぐに校長に捕まってしまうと思った。

しかし、校長が追ってくる気配はなかった。振り向くと、校長は校長室のドアの前で立ち尽くし、麗子より先の方に視線を向けていた。

麗子は校長の視線の先を見た。そこには持田翔子が立っていた。彼女の顔を見ると、校長をじっと睨みつけていた。彼女の右手にはトランペットが握られていた。

「持田さん」

麗子は持田翔子を見上げた。

「先生、早く逃げよ」

彼女が倒れている麗子に右手を差し出した。

「ええ、あ、ありがとう」

麗子は何がなんだかわからなかったが、翔子の差し出したに右手を握り、彼女に引っ張られて立ち上がった。

「おい、待ちなさい。持田さんの今後について、これから話し合う予定じゃなかったのか」

校長が追いかけて来て、麗子の肩に手を伸ばした。

「やめてください」

肩にかかる校長の手を払った。

「見市先生、あなたがそんな態度を取るなら持田さんを退学処分にするしか……」

校長が言い終わる前に、『ガーン』と鈍い音が廊下に響いた。見ると、翔子が持っていたトランペットを校長の脳天めがけて振り下ろしていた。

校長は「グワァー」と変な声を発して、頭をおさえうずくまった。

校長の頭からビューッと血が吹き出た。校長は頭を押さえながらそのまま床に落ちた。

「先生、早く」

翔子が麗子の右腕を引っ張った。

「え、ええ」

麗子は翔子に引きずられながら廊下を走った。足がもつれそうになって、何度も転びそうになるのを必死で堪えた。

校門を出たところで、翔子が立ち止まった。肩で息しながら麗子に顔を向けた。

「ここまで来たら、人目があるからもう大丈夫でしょ」

翔子が麗子に向けて笑みを浮かべた。

「持田さんありがとう」

麗子は何が起こっているのか頭の整理がつかなかったが、まずは助けてくれた翔子に頭を下げた。

「うん。万引きしたあたしを迎えにきてくれたお礼。ていうか、先生があんな目にあっ

たの、あたしのせいだから。先生ごめんね」
翔子が涙声で言って麗子の胸に顔を埋めた。
「持田さん」
麗子は翔子の背中をさすった。
「先生、ごめんね。本当にごめんね」
翔子が麗子の胸の中で泣いている。
「持田さん、いいのよ。それより、わたしが校長にあんな目に遭ってるってなぜわかったの」
「先生、校長から、今日八時に校長室に来るように言われてたでしょ」
「そ、そうだけど」
「あたし、先生が校長に呼び出された時に、絶対ヤバイと思ったの。それもあたしのせいで……、だから、……、麗子先生ごめんね」
翔子の目から涙がポロポロと溢れだした。
「どうして、絶対ヤバイと思ったの？ わたしは全然思わなかったわ。校長先生は普段すごくいい人だから、あんなことするなんて夢にも思わなかった」
「あたしも一年前までは校長はいい人だと思っていた。でも、あの人はいい人じゃなかった。校長は卑劣な人間だったの」
翔子の目が三角になった。
「持田さん、ま、まさか」
麗子は彼女の目をじっと見た。目があつた瞬間に翔子は目をそらして俯いた。
「持田さん、もしかして、あなた一年前に何かあったの？ 校長に何かされたの？ だから、あなたは……」
麗子は翔子の肩を揺らした。
「ううん、心配しないで。あたしは何もされてないよ」
翔子は俯いたまま首を横に振った。
「嘘。一年前に何かあったんでしょ。持田さん、そのせいであなたは変わってしまったんじゃないの」
麗子は俯く翔子の肩を揺すり顔を覗きこんだ。
「麗子先生、違うよ。先生が今思っているようなことは本当に何もなかったよ」
「あなたは校長に何かされたせいでブラスバンド部を辞めて、授業をサボるようになったんじゃないの」
「校長のせいは当たってる。けど、被害にあったのは、あたしじゃないの」
「じゃあ、誰なの、誰が被害にあったの？」
「それは……」
翔子は唇を噛みしめ目を伏せた。
「持田さん、あなたじゃなかったら、誰が被害にあったの」
「先生の知らない人」
「わたしの知らない人？」
「うん、先生がここに来る前にいた先生だから」
「その先生が校長に酷い目にあつたの」

「うん。一年前まであたしたちのブラスバンド部の顧問をしてくれていた先生」

「今、その先生はどうしてるの」

麗子が訊くと、翔子は首を横に振るだけだった。

「その先生はね、麗子先生にすごく似てて綺麗な先生だった」

「わたしは綺麗じゃないわよ」

「それでね、麗子先生みたいに、すごく親身になってあたしたち生徒のことを考えてくれてた。だから、あたしはその先生のが大好きだった」

翔子が空を見上げた。麗子が翔子の横顔を見ると、長い睫毛が月明かりで輝いていた。目からは涙がポロポロとこぼれ落ちた。

「その先生が、今日のわたしみたいに、校長に酷い目に遭ったわけなのね」

翔子はコクリと頷いた。

「あの日は先生、遅くまであたしのトランペットの練習に付き合ってくれてたの。暗くなってきてたから、八時くらいだったと思う」

「練習が終わって、先生といっしょに帰ろうと思ってたんだけど、先生は校長に呼ばれて遅くなるから、あたしに先に帰るように言ったの。あの日、あたしが先に帰らなければよかった。先生を待ってればよかった」

翔子が唇を噛みしめた。

「その先生が今日のわたしみたいに、校長に呼び出されたのね」

「で、あたしは先に帰りかけてたんだけど、忘れ物をしたことに気づいて、学校に戻ったら校長室の方から悲鳴が聞こえてきたの。あたし慌てて校長室まで行って校長室のドアを開けると、先生が校長に押さえつけられていた。校長はあたしが校長室に入ったのに気づいて、慌てて先生から離れてズボンを上げてた。あたしその時の校長の顔は絶対に忘れない。人間のグズだと思った。先生は床に散らかった下着や服を取ってあたしの横を通り過ぎて走って出ていった。あたし怖くて、どうしていいのかわからなくて、泣きながらそのまま帰っちゃった。あたし、何もできなかった」

「それで、今日はわたしが同じような目に遭わされると心配になって来てくれたわけね」

「うん。もし麗子先生が同じ目に遭ったら、あたしもう生きていく自信がない」

「持田さんありがとう」

麗子は俯いている翔子の体をギュッと引き寄せて抱きしめた。彼女は麗子の胸に顔をうずめ嗚咽を漏らしていた。麗子はゆっくりと翔子の背中をさすった。

「あたしのせいなんです。あたしがあんなに遅くまでトランペットの練習をしなければよかったんです」

翔子は麗子の胸に埋めていた顔を上げ、涙を流しながら喚くように言った。

「持田さんが悪いんじゃない。全て校長が悪いのよ。わたしがなんとかするから、持田さんは昔の持田さんに戻って。お願い」

フランケンシュタイン

麗子は全国にチェーン展開するコーヒーショップの一番奥の席に腰を下ろした。アイスコーヒーにコーヒーフレッシュとシロップを入れてストローでかき混ぜ氷をカラカラと鳴らしながら、約束の男性が到着するのを待っていた。

約束の時間までまだ時間はある。コップの中で回る氷に視線を落とし、東上学園高校に赴任してから起こったさまざまなことを思い浮かべた。

名門とは名ばかりの荒れた学校、コンビニで万引きした持田翔子、校長の辻野に襲われそうになったこと、一人暮らしするマンションでの隣人トラブル、本当に嫌なことばかりが続いた。麗子はこんな所に来なければよかったと思っていた。

しかし、落ち込んでばかりはいられない。校長の卑劣な行為によって持田翔子は苦しんでいる。彼女は自分が預かる大切な生徒だ。絶対に助け出さなければならない。昔の彼女に戻ってほしい。それをするのが今の自分のやるべきことだ。

自動ドアの開く気配がして、視線を向けると男性が店内に入ってきた。麗子が呼び出した東上学園の国語の教師の山中だ。山中は店内を見渡していたので、麗子は立ち上がり山中のもとへ向かおうとした。

山中はそれに気づき右手で麗子を制して笑みを浮かべた。麗子が東上学園で一番信頼しているのが山中だ。忙しいはずなのに、山中は麗子の為に時間を作ってくれた。

山中はカウンターでアイスコーヒーを購入し麗子の座る席へと向かって来た。

「山中先生、お忙しいのにすみません」

麗子は山中に頭を下げた。

「いや、いいですよ。大変な時はお互い様ですから。まあ、立っていてもなんですから、座りましょうか」

山中はアイスコーヒーの載ったトレイをテーブルに置いてから椅子に腰を下ろした。

麗子も「はい」と言って椅子に腰を下ろした。

「ところで、お話って何ですか」

山中はアイスコーヒーにコーヒーフレッシュとシロップを入れてストローでかき混ぜながら訊いた。

「この学校の一年前の出来事で、山中先生に教えてもらいたいことがあるんです」

「見市先生は、持田のことで悩んでるんですよね」

山中がストローに口をつけた。

「ええ、まあそうなんですが」

「持田ねえー」

山中が椅子の背もたれに体を預け腕を組んだ。

「持田さんは一年生の時は成績優秀で模範のような生徒だったと聞いているんですが、それは本当なんですか」

「ええそうですね。勉強もトップクラスでしたし、性格も明るくて本当に素直でいい子でしたね。今の姿が本当に信じられません」

「一年前から変わってしまったんですよね」

「そうですね、確かにちょうど一年くらい前からですかね」

山中先生が宙に視線を向けながら言った。

「変わってしまった理由について、山中先生は思い当たることはありませんか」

「そうですね、一つ考えられるのはですね」

山中はそこまで言ってから、また宙に視線を向け唇を尖らせた。

「あくまでも私の勝手な想像ですが、それでもいいですか」

慎重な山中らしいなと思った。こういうところもこの先生は信頼ができる。

「ええ、構いません」

麗子は前のめりになった。

「持田が変わってしまった理由として、私が思っているのは、やっぱり一年前にいた石中先生の件ですかね」

「石中先生の件ですか」

どこかで聞いたことのある名前だ。

「ええ。持田は石中先生のことをすごく慕ってましたから」

「もしかして、石中先生って、ブラスバンド部の顧問だった方ですか」

「ええ、そうです、見市先生、よくご存じですね。確かに石中先生はブラスバンド部の顧問をしていました。持田や他の生徒たちからも慕われていて香代子先生って呼ばれてましたね」

「ところで、石中先生は今どうされているんですか」

麗子が訊くと、ストローでアイスコーヒーを吸い上げていた山中の口がポカンとあきストローが口から落ちた。山中は置物のように動きが止まり、目だけがじっと麗子を見据えた。

「山中先生？」

麗子は首を傾げながら山中に声をかけた。

「あ、ああ、すみません。見市先生は石中先生のあの件のことはご存知ないわけですか」

「ブラスバンド部の顧問だったことは知っています」

「いや、そんなことじゃなくて、彼女の事件のことは知らないんですか」

「事件のこと？ いえ、全く知りません」

麗子は首を横に振った。事件という言葉聞いて、校長の顔が頭をよぎった。

石中先生が校長に襲われたことだろうか。しかし、石中先生の名誉に関わることだ。簡単に口には出せない。

「実は、石中先生は一年前に自殺したんですよ」

山中は苦しそうな表情で唇を噛みしめた。

「えっ、じ、自殺、ですか」

「その事は知らなかったわけですか」

「ええ、全く」

持田翔子は石中先生が自殺したことは話してくれなかった。きっと思い出すことも辛くて、口にも出したくない過去だったのだろう。麗子は持田翔子のことを思うと胸の中がずしりと重くなった。

あの日の持田翔子の涙が頭に浮かんだ。彼女は石中先生が自殺したことを口にすらできないほど苦しんでいるのだ。石中先生の自殺の原因は校長に襲われたからに違いない。

麗子の中に校長に対しての怒りが一段と大きくなり、フツフツとマグマのようにわいてきた。そして全身が熱くなっていった。

持田翔子が変わってしまった理由は、間違いなく石中先生の自殺だ。そして自殺したのは校長の卑劣な行為のせいだ。そのことで持田翔子は責任を感じている。

持田翔子は自分が放課後遅くまでトランペットの練習をしていたせいで、石中先生があんな目に遭い自殺したと思いきこんでいる。

「石中先生の自殺の理由はわかっているんですか」

山中はどこまで知っているのだろうか。

「いやー、誰も思い当たるフシがなくてね。石中先生は仕事の方は順調に見えましたし、学校ではすごく充実しているようで楽しそうでしたからね。生徒たちともうまくやりましたし、私は当時の石中先生の受け持つクラスが羨ましかったですよ。持田をはじめクラスのみんなが石中先生のことを慕ってましたからね。私の方が先輩教師なのに、石中先生の足元にも及びませんでした。彼女からは見習うことばかりでした」

「山中先生も素晴らしい先生だと思います。わたしは山中先生を尊敬しています」

山中は「いやいやいや、私なんてねー」と右手を横に振ってから「でも、お世辞でも嬉しいです。ありがとうございます。そんなこと言ってくれるの見市先生だけですよ」と言って頭を掻いた。

「お世辞じゃありません。本心からですよ」

じっと山中の目を見つめて言った。山中は照れるようにストローに口をつけた。

「まあ、私のことより、持田のことです。見市先生は持田を元の元気で明るい持田に戻ってほしいんですよ」

「ええ、絶対に戻ってほしいです」

「私も、それを願っています。石中先生のことは確かに辛くて悲しい事件でしたが、持田もいつまでも引きずってちゃダメです。見市先生、私に協力できることがあれば何でも言ってください」

やはりこの人は信頼できる人だと思った。今の職場では山中がオアシスのような存在だ。

「ありがとうございます」

校長の石中先生に対する卑劣な行為は、きっと持田翔子以外は知らないのだろう。もし広まっていたら大問題になり、すでに校長ではいけないはずだ。あの男は校長を続けるべきではない。教職を続けてはいけない。絶対に校長の卑劣な行為を公にして罰を与えるべきなのだ。

「もしかしたら、石中先生、私生活で何かあったんじゃないですかね」

山中が少し声のトーンを落とした。

「私生活ですか。それはどういうことですか」

「婚約者とうまくいってなかったんじゃないですかね」

「石中先生は婚約していたんですか」

「ええ、でも、その婚約者ってのが困った男でしてね」

「困った男ですか」

校長以上に困った男なんていないはずだ。

「ええ。実はですね、石中先生が自殺したあと、その婚約者という男が学校に怒鳴りこんできましてね。教室で大暴れしたんですよ。婚約者が自殺したんだから荒れる気持ちはわからないではないですがね。なんでもかんでも学校のせいにされても困りますからね」

山中が口元を歪めた。

「その婚約者は何て言って暴れてたんですか」

「石中先生の自殺の原因を教えろとか、学校に原因があるのは間違いないとか言ってきましたね。あの時は校長も大変そうでした」

「対応したのは校長だったんですか」

「はい。私も隣で聞いてましたが、婚約者の男は絶対に学校に責任があるはずだと言ってすごい剣幕で怒ってました。ほんと、すごかったですよ」

「学校に対してそんなに怒るってことは、婚約者の方と石中先生はうまくいってたんじゃないですか。その婚約者は石中先生が自殺した原因に思い当たるフシがなかったんじゃないでしょうか」

「でも、あの婚約者を見る限りでは、婚約者に問題があったんじゃないかと思っちゃうんですよ。婚約者の人はヤクザみたいに怖そうな人でしたからね。石中先生に暴力をふるっていたとか、そんなことがあってもおかしくないような凶暴な男でしたよ。校長先生も二時間以上怒鳴られて、だいぶ参ってましたから。結局、警察を呼んで、なんとか収まりましたけど」

「そんなに凄かったんですか」

「ほんと、婚約者の男は見た目から怖かったですからね。体が大きくて、まるでフランケンシュタインみたいでしたよ」

「フランケンシュタインみたい」

これも最近どこかで聞いた気がする。

「ええ、フランケンシュタインです。見市先生知ってます」

「え、ええ、もちろん、フランケンシュタインは知ってます」

「私の倍くらいの肩幅がありましたもんね。これくらいかな」

山中が両手を広げて見せた。

「フランケンシュタインですか」

麗子は宙に視線をやって呟いた。

「そう、フランケンシュタインです」

「自殺したのは、石中先生でしたよね」

「そうですよ」

最近耳にしたワードだ。『石中』と『フランケン』

麗子は自分の住むマンションの二〇四号室のポストに書いてある名前が頭に浮かんだ。

確か、『石中』と書いてあった。その住人は三浦と名乗っていたので、最初は名前が違うことを不思議に思った。

そして二〇四号室に住む三浦は体が大きくて、優香がフランケンと勝手にあだ名をつけて呼んでいた。これはただの偶然だろうか。

「山中先生、石中先生の住んでいた所はわかりますか」

「いやー、知らないな。実家は愛媛でみかん農家をやってるとか言って、みかんをもらったことがありますけど、こっちに出てきて、どこに住んでたまでは聞いてないですね。ただ、学校まで歩いて来てたんじゃないかな。学校からも駅からも近くて新しく綺麗でいいマンションだ、みたいなこと言ってましたからね」

「そうですか。いろいろと教えてくれてありがとうございます」

麗子は額がテーブルにぶつかるくらい頭を下げて山中に礼を言った。

「いえ、これくらいお安い御用です」

山中はニコニコと人懐っこい笑みを浮かべた。

これでいろいろなことが繋がった。きっと石中先生の婚約者は二〇四号室に住む三浦だ。そして、一年前まで、その二〇四号室に住んでいたのは石中先生だ。三浦は自殺した婚約者の石中先生のことが忘れられずに、あのマンションに住み続けているに違いない。

一年前の校長のやったことを、三浦はどこまで知っているのだろうか。たぶん何も知らないはずだ。知っていたら、きっと三浦ならあの校長をぶん殴っていただろうから。

三浦があんなに怖い態度をとるのは石中先生が自殺したことで苦しんでいるからだ。

これから三浦に会いに行ってみよう。三浦に自分の推理をどこまで話すべきなのか。いや、悩むことはない。当たっているかわからないが自分の推理を全て話すべきだ。

校長をこのまま野放しにしてはいけない。優香や次郎、太一たちにも応援してもらおう。

「山中先生、呼び出しておいて申し訳ないですが、わたし、急用ができたので今から帰ります。今日は本当にありがとうございました。またお礼させてください」

「お礼なんていいですよ。気をつけて帰ってくださいね」

麗子は椅子から立ち上がり、コーヒーショップの出口へと向かった。出口で振り返り山中に頭を下げてから、踵を返し川西マンションへとダッシュで帰った。

うら・み・はら・せ

麗子はテーブルを挟んで三浦の座る正面に正座し、じっと彼の顔を見つめている。三浦の方は腕を組み胡座をかいている。俯き加減で麗子と目を合わせようとしめない。

これまで、この男のことを得体の知れない恐ろしい男だと思っていたが、そうではなさそうだ。麗子の右側には優香と次郎と太一が横一列に並んで正座している。

「今からわたしはとても大切なお話をさせていただきます」

麗子がうつむく三浦に向けて言った。

三浦は麗子たち四人の前に座っているのが耐えきれなかったのか、急に立ち上がった。

「ビールでも飲みましょうか」

三浦は冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出した。そして麗子たち四人の前に一缶ずつ置いていった。今はビールなんていない。ビールを飲んでいる時間すらもったいないと麗子は思った。

「どうぞ、飲んでください。おつまみになるような物はないから、今からコンビニでなにか買ってこようかな」

三浦はそう言って、部屋を出て行こうとした。

「いえ、結構です。大切なお話ですから、ビールを飲む前にわたしの話を聞いてください」

麗子はそう言って背筋をピンと伸ばした。

「麗子さん、どないしたん？」

優香が心配そうに麗子の顔を覗きこんだ。

「今から、わたしはとても大切なお話をします」

麗子は三浦から視線を外さずじっと彼の目を見つめた。

「大切な話って石中香代子に関する事なのか」

三浦は麗子に睨めるような視線を向けた。

「はい、そうです。元東上学園高校の教師でプラスバンド部顧問だった石中香代子さんに関する大切なお話です。三浦さん、これからわたしがお話する内容は三浦さんにとって、とてもショッキングな話になるかもしれませんが、三浦さんは知っておくべきだと思ひ、わたしは今日ここに来ました」

麗子は胸に手を当てながら話し、三浦の表情を窺うように見た。

「大切でショッキングな話か。わかった聞こう」

三浦は覚悟を決めたように、麗子の前に腰を下ろした。

「はい、ぜひ聞いてください」

麗子は丁寧に頭を下げた。

「あなたの話は俺がこの一年間知りたくて仕方なかった内容かもしれない」

三浦は大きく息を吸った。

「では、お話しします」

麗子はそう言ってから、一語一語、ゆっくりと丁寧に話しはじめた。

石中香代子は生徒から慕われていた素晴らしい教師だったことをまず伝えた。それを聞いた三浦は目を潤ませていた。そしてこれまでに見せたことのない柔らかい表情を浮かべた。

続けて、先日麗子が校長に襲われ、間一髪のところを持田翔子という生徒に助けってもらったことを話した。

その時の三浦の表情は口元を歪め、眉間に深い皺を寄せた。

「麗子さん、そんな酷い目に遭ったの」

優香が心配そうに麗子の顔を覗きこんだ。

確かに麗子は酷い目に遭った。しかし、麗子以上に酷い目に遭った女性がいる。それをこの先話さなければならぬ。一番大切にデリケートな話だ。麗子は一度深呼吸した。「一年程前にわたしと同じような目に、いえ、わたし以上に酷い目に遭った女性がいいます」

麗子は言う前から三浦を見た。三浦の表情は一段と険しくなり大きな体は震えていた。

このまま話を続けても大丈夫だろうかと不安になったが、麗子は覚悟を決めて話し続けた。

校長に麗子以上に酷い目に遭った女性が石中香代子で、彼女はそれが理由で自殺したのではないかと麗子は推測していると話した。

話しながら胸が苦しくなり涙が出てきた。嗚咽が漏れ言葉が途切れ途切れになった。

三浦は麗子の話を聞き終わったあと、「ウォー」と大きな声を発した。テーブルが半分には割れるのではないかと思うくらいの力でテーブルを叩いた。テーブルに置いてあった缶ビールが床に落ちた。次郎と太一が慌てて転がる缶を拾った。

それから三浦は興奮した様子で、何度もテーブルを叩いた。その後立ち上がり、今度は壁を拳で叩きはじめた。誰一人、彼を止めることも、声を掛けることも出来なかった。「ウォー、ウォー」と三浦は吠え続けた。麗子たち四人は黙って唇を噛みしめ、三浦の様子を見守るしかなかった。

三浦は自分の額を壁にぶつけはじめた。

「ウォー、ウォー、ウォー」とずっと大声を發し涙を流していた。

麗子が三浦を見上げると、額から血が滲んでいるのがわかった。麗子は急いで立ち上がり三浦に近づいた。

「三浦さん、もうやめてください」

麗子は三浦の腕にしがみついた。

三浦はそこで動きを止めて麗子に顔を向けた。

麗子は三浦の顔を見上げたまま、ポケットからハンカチを取り出し三浦の血で滲んだ額に当てた。三浦は肩で激しく息をしていた。

「俺はあいつを助けてやれなかった」

三浦は泣き叫んだ。

「石中先生が自殺したあと、彼女の婚約者の男性が学校に怒鳴りこんできたそうです。そ

の婚約者の男性は、石中先生の自殺の原因は学校に問題があると校長に詰め寄ったそうです。その時に居合わせた山中という教師の話では、その婚約者は体が大きくて、まるでフランケンシュタインみたいだったと言っていました」

「フランケンシュタイン？」

優香が目を丸くして麗子の方を見た。

「その婚約者は三浦さん、あなたですよ」

「俺は香代子を守ってやれなかった。俺のせいで香代子は、……」

三浦はそこまで言って項垂れ崩れ落ちた。

「三浦さん、あなたのせいじゃありません。悪いのは校長の辻野です」

麗子の声は怒りで震えた。

「あんたの話が事実なら、俺は、絶対に……」

三浦もそこまで言って、言葉を詰まらせた。悲しみと怒りの感情が極まったのだろう。

「はい、わたしもあの校長を絶対に許しません。あの時、持田さんが助けに来てくれなかったら、わたしも石中先生と同じ目に遭っていたかもしれません。校長は石中先生が自分の卑劣な行為のせいで自殺したとわかっているのに、全く反省していないんです。そんなの、絶対にわたしは許しません」

麗子の声の震えは治まらない。

「香代子があの校長に襲われたのは間違いはないんですか」

三浦は苦々しい表情を浮かべた。

「石中先生を慕っていた持田翔子という生徒の証言です。優等生だった彼女はそれ以来、非行に走っています。彼女が嘘をついてるようには思えません」

「絶対にぶん殴ってやる」

三浦は拳を強く握りしめた。太い腕に青く血管が浮かび上がった。

「このうらみは絶対にはらしましょう」

麗子は三浦の真っ赤な目を見つめた。

「ああ、絶対だ」

三浦が天井をじっと見つめて唇を噛みしめた。

「他の先生とかに話した方がええんとちがうんかな」

優香が身を乗り出してきた。

「それでは、俺の気持ちが収まらない」

三浦が地獄の底から出すような低い声で言った。

「優香ちゃんの言うこともわかるんだけど、なんの証拠もないし、どうせそんなことしても校長はシラを切るだけだから、それでおしまいになる気もするのよ。だから、わたしたちで証拠を探したいと思って、石中先生が何か残してないかと思って三浦さんに訊いておきたかったんです。でも、辛い話をして、三浦さんには申し訳ないです」

「いえ、俺は香代子がなぜ自殺したのか、それが知りたくて、ここに住み続けたんです。香代子が生前過ごしたこの部屋に何か手がかりになるような物が残っていないかと思っていたので、あなたの話が聞いてよかったと思っています。もしあなたの話が本当なら俺は校長を絶対に許さない」

「女の敵や。証拠を探しだして、公にせなあかん。このままにしてたら、絶対にあかんわ」

優香の顔が怒りで真っ赤になった。

「香代子が自殺した理由を見つけようと、この部屋にあるすべての物、パソコンの中身から、そこの本棚に並ぶ本の一ページ、一ページまでめくって、メモでもいいから残っていないかと探しましたが、今のところ、なにも見つかってないです」

三浦は整然と本が並ぶ本棚に視線をやった。

「三浦さんもこのままじゃ、怒りのぶつけようもないし、立ち直ることも出来ひんと思うわ。麗子さんも今のままで東上学園で働くのは精神的に辛すぎる。それに次の被害者が出るかもしれへんから悠長なこと言うてられへん。誰かが校長の卑劣な行為を暴かなあかん。誰かがなんとかせなあかん。その誰かがあたしらなんやわ」

優香が唾を飛ばしながら訴えるように言った。

「この先、どうしたらいいのか。わたし、あの学校で教師を続けていく自信がなくなってしまったけど、このまま生徒たちをを放って、わたしが辞めて逃げ出すわけにもいかないです。次の被害者を出すわけにはいかないんです。生徒に被害が及ぶ可能性だってあるわけだし、もしかしたら、すでに被害にあっている生徒がいるかもしれない。わたしは、教師だから生徒たちを守る義務がある。それが出来ないなら、わたしはこの先、教師をやる資格なんてないわ」

「さすが、麗子さん、格好いいわ。それより、あんたら男二人はポーッと座ってないで、何か言うたらどないなん。二人揃って雁首並べて、三浦さんが出してくれたビールをただ飲みしてるだけやんか。ビール飲むんは話が終わってからやって麗さんが言うてたやろ。ほんま何しにここに入って来たんよ」

優香が隣で黙ってビールを喉に流し込んでいる次郎と太一にキツイ視線を向けた。

優香に睨まれた次郎がゲップをして、優香の顔は怒りで真っ赤になった。

「え、えっと、いや、あの、た、確かに麗子さんの話を聞いてると校長が悪いと思うよ」

太一が首を何度も縦に振りながら言った。

「はあー、そんなことはわかっとるんよ。火を見るより明らかやろ」

「そ、そうやな」

太一が頭を掻いた。

「それより、この先、校長の卑劣な行為の証拠をどうやって見つけるか、みんなで考えなあかんねん。太一くん、そこ座ってポーッとしてたらあかんねんで」

優香が苛立ちをぶつけるように、バーンと太一の背中を手のひらで叩いた。太一がビクッと反応し首を竦めた。

「ちょっと、トイレ。三浦さんトイレ借ります」

太一は立ち上がり逃げないようにして、トイレへと向かった。

「ハァー、ほんま頼んないわ」

優香がトイレに入ろうとする太一の背中に向けて、深いため息を吐いた。

「次郎ちゃん、ゲップしてる場合やないんやで。ちゃんとわかってるよな。そんで、これからどうしたらええか考えてくれてるよな」

「ば、僕ですか？」

次郎が自分に人差し指を向けた。

「そうやで。次郎ちゃんは太一くんとは違って、ちゃんと考えてるよな」

優香が次郎に顔を近づけた。

優香は可愛い顔をしているけど、こういう時は迫力があって怖い顔になる。次郎は肩を竦めていた。

「この人が石中香代子さんですか」

太一がトイレから戻ってきて本棚の上にある写真立てを手にとり、三浦に向かって言った。

三浦が後ろに立つ太一の方に首だけを向けた。

「ええ、二人で琵琶湖に行った時の写真です。それが最後のデートになってしまいました」

三浦の目が潤んでいた。

「ちょっと見せて」

優香が立ち上がり写真立てを太一から奪うようにして取って写真に視線を落とした。

「うわーっ、綺麗な人。次郎ちゃん、ほら見て」

優香が写真立てを次郎に向けた。

次郎は写真立てを見上げた。

「そうですね。本当に綺麗な人ですけど……」

次郎がそこで言葉を切って、視線を写真から麗子に向けた。

「次郎ちゃん、綺麗な人ですけど、何？　そこで言葉切るのは女性に対して失礼やで」

優香の目がつり上がった。

「ああ、すいません。僕、いい作戦が浮かんだかもしれません。うん、いけるかもです」

次郎が一人で納得したような顔をして麗子の顔をじっと見ていた。

「いい作戦って何なん？　それと綺麗ですけどの後はなに？　どっちも気になるわ」

「わたしは、いい作戦の方が気になります」

麗子は身を乗り出した。

「いや、香代子さんの写真を見て思ったんですけど、香代子さんって綺麗ですけど、麗子さんにすごく似てると思いませんか。麗子さんが髪型をショートカットにして、ちょっと化粧とかしたらそっくりになるんじゃないかなと思ったんです」

「あっ、うん、確かに似てるかなー」

優香が写真を見てから麗子に視線を向けた。

「三浦さん、どうですか」

次郎が三浦に訊いた。

「そうですね。確かに似てますかね」

三浦が顎に手を当て、麗子の顔をじっと見た。優香も太一も次郎も全員が麗子に視線を向ける。

麗子は全員からの視線に耐えられなくなり俯いてしまった。

「わたしが、そんな綺麗な人に似てるわけがないです」

他人からこんなに見られる経験ははじめてだ。麗子は顔が熱くなった。

「そんなことないです。麗子さんも綺麗ですし、香代子さんによく似ています」

「で、次郎ちゃん、香代子さんが麗子さんに似てるのはわかったけど、いい作戦ってどんな作戦なん？」

「それはですね、麗子さんが香代子さんに似てるので、思いついたんですよ」

次郎がニヤリと笑みを浮かべた。

「だから、なにを思いついたん？ 焦らしといて、しょうもなかったら承知せえへんで」

「自信はあります。だけど、三浦さんに許可をもらわないと、三浦さんが怒り出すかもしれない」

次郎が三浦に視線を向けた。

「なにをする気だ」

三浦が次郎を睨みつけた。次郎は肩を竦めた。

「三浦さん怒らないで、とりあえず、聞いてくださいね」

次郎がめずらしくヘラヘラと笑っていた。

「次郎くん、どんな内容なのか、早く説明してもらえませんか」

麗子は次郎がヘラヘラとした態度に少し苛立った。

「あ、わ、わかりました。あ、あのですね、校長に香代子さんの幽霊を見せて脅かせて、全てを白状させる作戦です」

「香代子の幽霊ですか」

三浦は口元を歪めた。

「やっぱり、ダメですか」

次郎は肩を竦めた。

「いや、本当に香代子のうらみがはらせるなら、俺は構いません。詳しく聞かせてください」

「次郎ちゃん、遊びやないで、本気で香代子さんのうらみはらすんやで」

優香が身を乗り出してきた。

「はい、ぼくも本気です。遊びや冗談のつもりじゃありません」

「でっ、次郎さん、どんな風にするつもりですか」

麗子はまだ苛立っていた。

「あのですね」

次郎はそこで言葉を切ってみんなの顔を見渡した。

「焦らさんとはよ言いや」

優香がテーブルをバンと叩いた。

「はい、あのですね、麗子さんに香代子さんの幽霊に変装してもらうんです」

「わたしが香代子さんの幽霊に変装ですか」

麗子の声が裏返った。

「は、はい。すいません」

次郎が麗子に向けて頭を下げた。

「それで、どうすんのよ？」

優香がまたテーブルを叩いた。

「それです。校長をこの部屋まで呼び出して、香代子さんの幽霊を見せて脅かせて、これまでの卑劣な行為を白状させる作戦です」

「わたしが香代子さんの幽霊になるの」

麗子は次郎の言ってる意味が理解できず、自分に人差し指を向け口を尖らせた。

「ええ、そうです。麗子さんは香代子さんによく似ています。化粧して電気を消しておけば、絶対にバレません」

次郎の話聞いた麗子はそんなことがうまくいくはずがないと思った。そして自分が香代子の幽霊に化けることが不安だった。失敗は許されないのだ。失敗すると三浦にまで迷惑がかかるだろうし、校長は警戒してしまい真実を闇にほおむるかもしれない。自分には荷が重すぎて無理だと思った。

「麗子さん、いけそう」

優香から訊かれた。

無理だと思っていたはずなのに、優香に訊かれて、なぜか「ええ、大丈夫よ」と答えてしまった。

「麗子さん、すごい。頑張ってる」

優香が両手で麗子の右手を握った。後には引けない状況だ。なぜ優香の問いに大丈夫よと答えてしまったのか。彼女に問われるとネガティブな発言を封印してしまう。これが優香の不思議な魅力だ。

「お願いします」

三浦が深々と頭を下げた。

三浦にまで頭を下げられるともうやるしかない。うらみをはらさなければならないし、生徒たちを守らなければならない、そう思うと不安だった気持ちはどこかへ吹き飛んでしまった。

「でも、次郎ちゃん、校長をどないしてここに呼び出すつもりなん？」

「それはですね、やっぱり麗子さんをお願いしなければならないんです」

次郎が麗子に申し訳なさそうな視線を向けた。

「えっ、それも、わたしがやるんですか」

「はい。麗子さんしか出来ないんです」

「わたしがどうやって校長をここに呼び出すわけなの？」

「それはですね、校長は麗子さんを校長室に呼び出して襲おうとしたわけじゃないですか。それを利用して、校長にハニートラップを仕掛けるんです」

「わたしがハニートラップを仕掛けるんですか」

「ええ、それがいいかなと思うんです」

次郎は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「ちょっと次郎ちゃん、それは危険やし、麗子さんに負担が大きすぎるんちがうか」

優香が次郎に食って掛かった。

「そうっすよ。一度、襲われかけた相手にハニートラップを仕掛けるなんて、精神的にキツイし危険すぎるっすよ」

太一が口を挟んできた。

「太一くんは、ハニートラップ以外でなんかええ案が浮かんでんの」

優香が太一に訊いた。

「えっ、いや特にはないけど」

太一が頭を掻いた。

「じゃあ、中途半端に口出しして邪魔せんといて」

「いや、そんな邪魔するつもりはないけど、麗子さんの負担が大きすぎるかなと思ったからさ」

太一は口を尖らせた。

「優香ちゃん、太一くん、心配してくれてありがとう。でも、危険でも負担が大きくても、わたしがやらなければいけないんです。香代子さんと三浦さんのうらみもはらしたいし、生徒も守りたい。だから、わたしは次郎くんのその作戦をやります。そして、絶対に成功させます。三浦さんいいですか？ わたしが香代子さんの幽霊になっても」

麗子は言い終わってから、三浦の目をじっと見た。三浦の目は少し潤んでいるようだった。三浦は唇を噛みしめて首を縦に振った。

「麗子さん、よろしくお願いします。あなたに託します」

麗子は興奮していた。顔が熱くなった。絶対にうらみをはらすんだと誓った。

ハニートラップ作戦

あの日以来、校長は麗子に対して威圧的な態度をとるようになった。三年三組の成績が他のクラスに比べて悪いのは、生徒を甘やかし過ぎる麗子の指導がまずいからだと言われ、期待して来てもらったのに期待外れだったと他の職員の前で罵った。

校長が麗子に向けてくる視線は爬虫類のように冷たく、あの時のことを絶対に口に出すなといった風を感じた。

麗子は校長と顔を合わせるだけで嫌な汗が体から滲み出て、喉が乾き呼吸が困難になる。しっかり睡眠もとれなくなってるし髪の毛も抜ける。毎朝学校に着いた途端に頭痛や吐き気がする。

こんな状態で校長にハニートラップを仕掛けることが本当に出来るのだろうかと言われ麗子は不安だった。しかし、校長へのうらみをはらすことが出来るのは自分しかいない。次郎の作戦を実行しうらみをはらすしかない。

次郎の考えた作戦は、まず校長室でのあの日の出来事を麗子がお詫びに行くところからはじまる。あの時の麗子は校長を拒んだわけではなく、あまりに急なことでビックリしてしまい、失礼な行動をとってしまったことを詫げる。

そこで校長は気を良くして麗子を再び誘ってくるはずだから、校長がうまくのってきたら前のような邪魔が入るといけないうって、川西マンションの住所と部屋番号二〇四号室と書いたメモを校長に渡して、仕事が終わってから夜に部屋まで来てほしいと誘い出す。

校長がマンションに到着する前に、麗子は石中香代子の幽霊に変装して校長がマンションに来るのを待つ。

校長が二〇四号室に入って来たら、石中香代子の幽霊に変装した麗子が校長を脅かし、石中香代子が自殺したのは、校長の彼女に対する卑劣な行為のせいだったと白状させるという作戦だ。うまくいくものなのか不安だがやるしかない。そのためには、まず麗子がやらなければならないことはあの校長を誘い出すことだ。

麗子は校長室の前に立ち、一度深呼吸してからドアをノックした。

「はい」と校長の低い声が聞こえた。

あの時の恐怖が甦る。それを振り払って、「フー」と息を吐いてから、ゆっくりとドアを開けた。

「失礼いたします」

ドアを開けて校長室内が視界に入った瞬間、麗子の鼓動は激しくなり体が小刻みに震えた。

校長室に入った所で立ち止まった。奥に入る勇氣はない。すぐにでも立ち去りたい気持ちをグッと堪えた。

「なんだ」

校長は威圧的な視線で麗子を睨んできた。この間の件で抗議に来たとでも思っているのかもしれない。

「先日は申し訳ございませんでした」

麗子はまず深々と頭を下げた。

「なんの件で謝っているんだ？」

校長は怪訝そうな顔をした。

「いえ、あ、あの、わたし、あの時は、急なことで取り乱してしまい、校長に失礼な態度をとってしまったことをお詫びしなければならないと思ひまして、本当に申し訳ございませんでした」

この男に頭を下げることは屈辱だが、ハニートラップ作戦の決行の為にはやむを得ない。

「君の言うあの時とは、この間のここでの夜の事かな」

「は、はい、そうです。急なことで驚いてしまいまして、校長にあのような無礼な行動をとってしまいました」

「ほほう、そうかそうか、あの時はわしのことを拒否したわけではなかったということかね」

校長のぼつりした頬が緩むのがわかった。

「はい。校長室でということも抵抗がありましたし、シャワーくらいは浴びさせてほしかったです。それに心の準備が全く出来ていませんでした」

優香が考えてくれたセリフを棒読みした。

「そうか、そうか。そんなこと気にすることはなかったのにな。まっ、いい。そういう真面目なところも君の魅力だからな」

校長の目尻が下がり、鼻の下が伸びた。それを見た麗子は背筋に冷たいものが走った。

この作戦のために優香が校長を誘い出すセリフを考えてくれ、次郎と太一が校長役を順番に引き受け練習を繰り返した。しかし、今校長を前にして思ったことは次郎と太一が校長役では役不足だったということだ。あの二人には校長のようなねちっこい嫌な雰囲気を持ち合わせていないし、危険な匂いもしない。二人とも真面目で優しすぎる。

今思えば、なぜはじめてあの二人に会った時、怖くて避けてしまったのか不思議でならない。あの二人は本当に優しく誠実な男性だ。

優しすぎる次郎と太一との練習は本番に生かせないかもしれないが、麗子はやらなければならない。絶対に成功させなければならない。三浦のため、自殺してしまった石中香代子のため、持田翔子を含め多くの生徒たちのため、そして自分のためにも成功させなければならない。

「今日の夜九時にわたしのマンションの部屋に来てくれませんか」

「き、君の部屋にか」

校長が驚くように身を乗り出した。麗子は「はい」と言って、恐る恐る校長の座る机の前まで進んだ。

「ここにわたしのマンションの住所と部屋番号が書いてあります。今夜九時にここでお待ちしております」

麗子はマンションの住所と部屋番号の書いたメモを校長の前の机に置いて、すぐに元のドア付近まで下がった。優香から校長を完全に騙すには、メモを渡す時に校長に向かってニコリと笑えばいいと言われたが、校長の顔を見ると顔が強ばって笑うことなどできなかった。

それでも校長は騙されたようで、麗子の顔を見てニヤリと笑みを浮かべた。いやらしい視線で麗子の全身を舐めるようにを見ながら、目の前のメモに手を伸ばした。校長はメモを自分の手元まで引き寄せてから視線を麗子からメモに移した。

校長はしばらくメモを見てから顔を上げた。

「ほほう、ここから近いんだな」

校長が麗子の顔を見て右の口角だけを上げた。

「え、ええ。ここからだ歩いて十五分くらいです。鍵は開けておきますので、校長先生は部屋に着いたらチャイムを鳴らして、すぐに部屋に入ってきてくれれば結構です。わたしは恥ずかしいので、シャワーを浴びてから部屋の照明を消してベッドで布団にもぐって待っています」

何度も練習した甲斐があり、最後はしっかりとセリフが言えた。

「わかった。夜九時だな。わしもサウナにでも行ってシャワーを浴びてから行くことにするかな。これは楽しみだ。今夜は君の望みを叶えてあげるよ。楽しみに待ってなさい」

校長がメモを持ち上げヒラヒラさせながらいやらしい視線を向けてきた。

「は、はい。た、た、楽しみにしています」

麗子は背筋が冷たくなるのを堪えて、勢いよく頭を下げた。そしてすぐに踵を返し校長室を飛び出した。校長室のドアを閉めてから涙が止まらなくなった。涙を流しながら廊下をカツカツと歩き校門を抜けた。

川西マンションに帰ってきてすぐに三浦の部屋のインターフォンを鳴らした。

インターフォンから「はい」と優香の音がした。ドアの前でしばらく待っていると、ガチャという音がしてドアが開きドアの隙間から優香の顔が見えた。

「麗子さん、うまくいった？」

優香が心配そうな表情を浮かべた。

「ええ、なんとか」

麗子が言うのと優香は「あー、良かった」と胸に手を当てた。

優香はこの日の仕事をすでに終えて、三浦と二人で麗子を待っていてくれたようだった。

「麗子さん、じゃあ中に入って」

麗子が優香に続いて部屋に入ると、部屋の真ん中に立っている三浦の大きな姿が見えた。

「麗子さん、お疲れ様です」

三浦は麗子に向かって頭を下げた。

「麗子さん、うまくいったみたいよ」

優香が三浦の太い腕に手を回した。その姿を見て、麗子はなぜか心がざらついた。これは嫉妬だろうか。こんな気持ちになったのはいつ以来だろう。

「それは良かったけど、これからが大変だな」

三浦が眉をハの字にした。

「とりあえず座りましょうよ」

優香がそう言って床に腰を下ろした。

「麗子さん、本当にお疲れさまです。どうぞ座ってください。喉が渴いたでしょう。麦茶でも入れますか」

三浦はそう言って冷蔵庫からペットボトルの麦茶を取り出し麗子の前に置いた。麦茶はよく冷えてるようで、ペットボトルからの雫でテーブルがすぐに濡れた。

「ありがとうございます」

麗子はバッグからハンカチを取り出し、テーブルとペットボトルを拭いてからペットボトルのキャップを開けた。渴いた喉に麦茶を流し込むと、体が冷えて少し落ち着くことができた。

「フー」と息を吐いてからペットボトルをハンカチで拭いてテーブルに置いた。顔を上げると三浦と目が合った。そこで麗子の胸は破裂しそうになった。さっきまでの校長と話している時とは全く違う、胸の高まりを感じ体が熱くなった。そこでもう一度麦茶を喉に流し込んだ。

「七時までには次郎ちゃんも来ると思うわ。太一くんも今日は仕事を早退させてもらう言うてたから、八時までには来れるみたいやで」

「皆さん、俺と香代子の為にいろいろとありがとうございます」

三浦がテーブルに額がぶつかるくらいの勢いで頭を下げた。

「三浦さん」

麗子は頭を下げる三浦に声をかけた。

「はい」

三浦が顔を上げた。

「わたし、校長を絶対に許しません。三浦さんのためにも、香代子さんの為にも、持田さんのためにも、他の生徒たちのためにも、そして自分のためにも、わたしは絶対にこの作戦を成功させます」

目頭が熱くなっていた。涙をグッと堪え唇を噛みしめた。

「麗子さん、お願いします」

三浦がもう一度頭を下げた。

そこで、優香のスマホが鳴った。優香がスマホを手に取り電話に出た。

「もしもーし、次郎ちゃん、仕事終わったの」

次郎からの電話のようだった。

「わかった、あと三十分くらいやね。そしたら準備しとくわ」

優香がスマホを切って、麗子の方を見た。

「次郎ちゃん、あと三十分くらいで、来れるって。そしたら、最後にもう一回リハーサルやろか。その前に麗子さんと三浦さんはメイクしよか」

今日までこの部屋でリハーサルを何度も繰り返した。次郎と太一が校長役を引き受けてくれた。そして、本番の今日も次郎は仕事から帰って休む間もなく、最後のリハーサルに付き合ってくれるという。

次郎の立てた作戦はここまでは順調にいった。このあと、麗子は石中香代子の幽

霊に変装して校長を脅して、一年前の卑劣な行為を白状させなければならない。

麗子は最初に次郎からこの作戦を聞いた時、こんな子供だましがうまくいくわけがないと思っていたが、いつの間にか、これを成功させるんだという強い気持ちに変わっていた。

優香は、もしもの時のためにボディガード役として、三浦が風呂場に身を潜めておくことを提案した。その時の三浦も幽霊に変装しておくことに決まり、三浦はフランケンシュタインに変装することに決まった。

優香と次郎と太一は、いつでも部屋に踏み込めるようにドアの外で待機しておくことになっている。校長が逃げ出せないようにドアをおさえる役も三人がやる。

校長がチャイムを鳴らして部屋に入って来た時、麗子がベッドに寝ているように見せるため、太一の部屋にあったパンパンに膨らんだゴミ袋三つを掛布団の下に潜り込ませている。麗子は自分はこのように大きくないと少し不満に思った。

三浦は石中香代子の幽霊に変装した麗子の顔をじっと見つめた。

麗子は三浦に見つめられて胸が破裂しそうになった。三浦の目を見ると涙を浮かべていた。麗子も目頭が熱くなった。

三浦が「香代子」と言って、麗子の両肩に手を置いた。

麗子は今の自分は三浦にとっては石中香代子なんだと、少し複雑な気持ちになった。

次郎が帰ってきて、最後のリハーサルも終わった。太一も予定より早く合流した。あとは本番を待つのみだ。

「二人ともええ感じやで」

優香がメイクを担当した石中香代子の幽霊とフランケンシュタインの姿を見てニタニタと満足そうに笑みを浮かべた。

「すごいっす。暗い所で見たら腰抜かすくらい、怖いっす」

太一が麗子と三浦を頭の前から爪の先まで何度も視線を走らせた。

「そろそろ、あたしらは次郎ちゃんの部屋で待機しとこうか」

優香が腕時計を見て立ち上がった。

「そうですね、そろそろですね」

それにつられて次郎と太一も立ち上がった。

「麗子さん、頑張ってるね」

優香が麗子に右手を差し出した。麗子は優香の出した右手を握りしめた。

「優香ちゃん、ありがとう。わたし頑張るわ」

「麗子さん、頑張ってください」

次郎が麗子に向けてペコリと頭を下げた。

「麗子さん、絶対に成功っす」

太一が親指を立てた。

「みんな、ありがとう」

麗子は三人に向かって深々と頭を下げた。

三人が出ていくのを見送って、三浦と二人きりになった。緊張のせい二人とも言葉は発しなかった。

麗子はこれからの作戦を実行する緊張と三浦と二人きりになった緊張を同時に味わっ

ていた。

「そろそろ、俺は風呂場に潜っておきます」

三浦が麗子の肩に手をのせた。三浦の大きな手の感触を肩に感じ、胸がはじけそうになった。

「わ、わかりました」

麗子は体がガチガチになった。

「緊張しますね」

三浦が笑みをくれた。柔らかくて優しい笑みを見て気持ちが少しだけ和らいだ。

「そ、そうですね」

麗子は自然と笑みがこぼれた。

「でも大丈夫。きつとうまくいきますよ」

三浦が肩を寄せ、顔を近づけた。麗子の体がカーッと熱くなった。何か言葉を発しようとしたが、何も出てこなかった。

「そろそろ部屋を暗くしましょうか」

三浦が部屋の電気を暗くした。暗い部屋で三浦と二人きりだ。このまま三浦の胸に顔を埋めたいと思った。

「じゃあ、俺は風呂場にいますから。何かあったら呼んでください」

三浦はそう言って麗子の両肩に手を置いた。

「わ、わかりました。よろしくお願いします」

麗子はペコリと頭を下げた。今から校長と対決しなければならないのに、自分は何を考えているんだ。三浦は自分のことなどなんとも思っていない。石中香代子のためにうらみをはらそうとしているだけなんだ。

麗子は薄暗い部屋でポツンと校長がチャイムを鳴らすのを待った。

三浦の思い

乾いたバスタブで体育座りをし、膝の間に顔を埋め息を潜めた。目を閉じて過去のことを思い出す。涙がバスタブにポタリと落ちた。香代子は一年前、ここで自分の手首を切って自らの命を絶った。香代子はどんな気持ちでいたのか。考えると胸が詰まる。

この部屋で暮らしてからもここだけには入れなかった。しかし、今日は別だ。香代子を死に追い込んだ男へのうらみをはらさなければならない。

香代子に結婚を申し込み、彼女と新しい人生を歩む未来を想像し心を弾ませた。香代子も幸せすぎて怖いと言っていた。

それなのになぜ、香代子は自らの命を絶つことを選択してしまったのか。一体、彼女に何があったのか。そればかりを考え過ぎた一年間だった。

ある日を境に急に元気がなくなったことには気づいていた。学校でのちょっとした悩み事や楽しかった事を目を輝かせながら話してくれていたのに、急に話さなくなった。彼女は間違いなく学校の話題を避けるようになった。

どうしたんだ、何かあったのかと訊いても、香代子はなんでもないと首を横に振るだけだった。

その時に見せる少し怯えたような素振りが気になった。学校でなにかあったのだと確信した。

自殺した理由を確かめようと香代子の勤めていた学校へ行った。教室に通されると数人の教師に囲まれた。

校長の辻野という男が対応した。香代子はある日を境におかしくなったと伝えたが、辻野は「学校では変わった様子はなかった。学校でのトラブルは考えられない」と抑揚のない口調で言った。その無関心で他人事のような辻野の態度にムカついた。

そんなはずはないと食い下がった。

「私生活でのトラブルを学校のせいになされても困りますな。さっさとお引き取りください。こっちはそれでなくても、教師に勝手に自殺なんかされて、周りからはあることないと言われるし、学校のイメージはダウンするしで大変なんですから」

辻野はそう言って問い詰める三浦に背を向けた。

その態度に、血液は沸騰した。怒り心頭に発し喚きながら、辻野の胸ぐらをつかんで黒板に押し付け睨みつけた。

「お前ら、何か隠してるんじゃないか」

三浦が喚くと、辻野はニヤリと笑みを浮かべてから「フン」と鼻を鳴らして三浦から目を逸らした。

「おい、なんとか言え」

右拳を振り上げた。この男を殴り飛ばしてやりたいと思った。

「私を殴るつもりか。殴ってもらって結構だが、君が困ることになるだけだぞ」

辻野を殴りたい気持ちをグッと堪えた。振り上げた右拳は、辻野の顔面を外し黒板を直撃した。バシッという音がして黒板が割れた。黒板を殴ったあと三浦はその場に崩れ落ちへたりこんだ。

辻野はその隙に三浦から逃れた。

「痴話喧嘩をこっちの責任にするなんて本当にいい迷惑だ」

辻野はそう言って歪んだネクタイを結び直した。

「なんだとー」

立ち上がりまた辻野に向かって喚いた。

「さっさと帰れ。でないと警察に通報するぞ」

辻野が怒鳴った。

「お前が本当のことを話すまでは帰らねえ」

机を持ち上げて黒板に投げつけた。黒板がボコッとへこみ割れた。椅子を持ち上げて窓ガラスを割った。まるで荒れた学校の不良学生のようになっていた。教室の窓ガラスを全て割った後も、まだ気が収まらなかった。机を端から順に蹴り飛ばして倒していった。全ての机を蹴り倒した後、机を持ち上げて窓に投げつけた。窓枠がグニャリと曲がった。

パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。廊下からダッダッダッという足音がした。制服姿の二人の警察官が教室に入ってきた。

「器物破損、傷害の現行犯だ」

警察官はそう言って三浦の腕をおさえ手錠をかけた。

「当校の教師に自殺なんかされて、学校に責任があったとか有ること無いこと言われて、こっちも被害者ですよ」

警察官に連れられ教室から出る寸前に、辻野は口元を歪めて大声でそう言った。

あの時、辻野は自分が香代子を襲ったことが原因で彼女が傷つき自殺したとわかっていたはずだ。それなのにあの時のあいつは被害者面をしていた。そう思うと怒りで体が震えた。

この川西マンションに住む見市麗子から香代子の自殺は辻野の卑劣な行為のせいだと教えられた。

いっしょに聞いていた隣の部屋に住む瀬川次郎が香代子のうらみをはらすために辻野の卑劣な行為を白状させるための計画を立ててくれた。

次郎の計画通り麗子は辻野にハニートラップを仕掛けた。それに引っ掛かった辻野は今からここに姿を見せる。辻野がここに来て自分は冷静にいられるのか、おとなしくここでじっといられるのか、自分でもわからない。

ただ、作戦を成功させるためには、自分はここでじっと耐えなければならない。

今日まで辻野に白状させるためにリハーサルを何度もやった。その時の辻野役は隣に住む瀬川次郎と下の階に住む原田太一がやってくれた。人の良さそうな男たちなので、正直辻野役にはふさわしくないと考えた。

彼らは人が良さそうではなく、間違いなく良い人だと思う。彼らは今回の事件とは、無関係なはずなのにここまで付き合ってくれている。

この一年間、全ての人間が敵だと思っていた。このマンションに幸せそうに入居してくる奴らが憎かった。自分に笑みを浮かべてくるやつらの顔に怒りを覚えた。殴り飛ばしたくなるのを堪え続けた。

それなのに、今、その住人たちが香代子のうらみをはらすために、時間を惜しまず自分に協力してくれている。

なんとしても、この作戦を成功させなければならない。今からここに現れる辻野の顔を見たら殴り飛ばしたくなるかもしれないが、辻野が白状するまでは、自分は堪えなければならない。

辻野を殴ってしまえば、これまで同じマンションに住む四人が香代子の為に計画してくれたことを水の泡にしてしまう。

『ピンポン』とチャイムの音がした。

辻野が来たようだ。フーッと息を吐いてから「冷静に冷静にだ」と呟いた。

校内放送

暗くなった部屋にチャイムの音が響いた。その音にビクリと反応した。「はい」と返事してベランダに出るつもりでいたが声が出ない。返事をしないままベランダにそっと足を置いた。

ベランダから玄関の方を見るとドアノブが回るのがわかった。音を立てないようにカーテンを引いてからベランダのドアを閉めた。次郎からももらったイヤホンを耳に当て、身を低くしてカーテンの隙間から部屋の様子を窺った。

校長がドアを開けて玄関に入ってくるのが見える。息を殺してその様子を伺った。校長は太一の部屋にあったごみ袋で膨らんだベッドを見てニヤリと笑みを浮かべた。

「見市先生」

ニタニタしながらベッドから視線をはずさずに部屋の中に入ってきた。

「緊張してるのかな」

校長のいやらしい声がイヤホンから聞こえてきて、麗子の背筋が冷たくなった。

校長は鼻の下を伸ばし口元が緩んだ情けない顔で、ベッドの膨らみを見下ろして立っている。

ベッドの膨らみから視線をはずさずに上着を脱いで足元に置いた。次にネクタイを外しながらニヤリと嫌な笑みを浮かべている。

「見市先生。いや、今日は麗子って呼んだ方がいいかな」

校長がベッドの端に腰をおろした。

麗子の顎がガクガクと震える。深呼吸してリハーサル通りに手に持つマイクに向かって声を上げた。

「うらめしやー」

声が震えてしまったのが逆によかったかもしれない。幽霊らしい声になった。

校長が「な、なんだ？」と言って、どこから声がしたのかを探るようにキョロキョロと首を回していた。

「わたしは見市麗子ではありません。あなたのせいで死を選んだ石中香代子です」

「い、石中香代子だと」

校長の声も震えている。

「そう、石中香代子です。わたしはあなたへのうらみをはらします」

「なぜ、私をうらんでいるんだ」

校長が立ち上がり天井に向かって叫んだ。

「わたしはあなたに襲われた」

麗子はマイクに向かって悲鳴のような声で叫んだ。校長はここで卑劣な行為を認めるだろうか。

「見市くん、どうなってるんだ」

校長は掛け布団を剥がした。そしてパンパンに膨らんだゴミ袋を見て、「な、なんだ、これは」と言って尻餅をついた。

『ガタガタ、ガタガタ』

入口のドアを外から優香たちが揺らして音を鳴らしている。

「一体、どうなっているんだ。見市くーん、見市くーん、どこだー」

校長の表情は恐怖で怯えている。ここで一気に畳み掛ける。この時の麗子はうらみをはらすことに集中していて、緊張はなくなっていた。

「あなたのせいでわたしは死を選んだんです。絶対にあなたを許さない。あなたがあの時にしたわたしへの卑劣な行為を詫びるまで、わたしはあなたをずっとうらみ続けます」

「なんのこただ。知らない、わしは何も知らない」

校長は尻餅をついたまま首をブルブルと横に振った。

「嘘ばかりつかないで、本当のことを話さない。そして詫びなさい。そうすればわたしはあなたを許してあげます」

麗子はベランダのドアを開けてカーテンの隙間から顔を覗かせ校長を見下ろした。

校長が香代子の幽霊に気づいた。麗子は目を大きくカッと見開いて睨みつけた。校長は口をガクガクさせ後ずさりした。

「い、石中先生……」

校長はテーブルに手をついて立ち上がろうとしたが、体がガクガクと震えて立ち上がれず、そのまま這うようにドアの方へ逃げた。麗子はカーテンを開けてベランダから部屋に入った。

「うらみはらします」

ドスのきいた声を出した。このドスのきいた恐ろしい声を出すために、優香の部屋で何度も練習をした。

練習の甲斐あって、校長は「ヒュー」と声をあげた。

校長がドアまで這うようにして逃げて、ドアを開けようとドアノブを引っ張っていたがドアは開かない。優香と次郎と太一の三人組が外からドアが開かないように引っ張っているはずだ。

「あなたをうらみます。絶対に許さない」

ドアの向こうから優香のドスのきいた低い声が聞こえた。校長は優香の声にも驚いてドアを引く手を離し、へたりこんでしまった。

「ハァハァハァ」

校長が激しく息をする。もう少しで落ちる。

麗子はじっと校長を睨みつけた。

「絶対に許さない」

「す、すまん、申し訳ない」

校長が麗子に向かって土下座して床に額を押しつけた。

ここまではうまく言っている。ここで一気に白状させようと麗子は畳み掛ける。

「あなたのわたしにやった卑劣な行為を、今ここで白状しなさい。そして、詫びな……」

麗子が言い終わる前に、ガチャリと風呂場から音がした。麗子が音のする方に視線を

向けると、フランケンシュタインに扮した三浦が顔を出した。

「絶対に許さん」

三浦は大きな体を震わせていた。三浦がリハーサルにない行動をとった。

「ヒ、ヒャー」

校長は三浦の姿を見て悲鳴を上げた。

「俺は、お前を殺す」

三浦はひざまづく辻野の胸ぐらを掴んだ。麗子は三浦の鬼のような形相を見て慌てた。

ここまで作戦通り順調に進んでいた。あのままいけば校長は白状したはずだったのに、三浦が姿を出したことで狂ってしまう。

三浦が出てくるのは万一の時だけのはずだった。校長が麗子の正体に気づいて、麗子が襲われそうになった時だけのはずだ。ここまでは作戦通りに進んでいたのに、三浦が出てくる必要はなかったのだ。

「す、すまん。許してくれ。わ、わしのせいだ」

三浦は校長を突き飛ばして、ボキボキと指を鳴らし、校長に顔を近づけて睨みつけた。

麗子はどうしていいのかわからず立ちつくし、その様子を眺めるしかなかった。

「お前は一年前に香代子を暴行したんだよな」

「つ、つい、出来心だ。石中先生があまりに魅力的すぎて、わしは理性を失ってしまった」

「香代子が自殺したのは、お前のせいだ」

「本当に石中先生には申し訳ないと思っている。まさか自殺するとは思わなかった。自殺したと知って、わしは反省した」

「反省しただと。嘘つけ、反省した奴が、他の先生にも同じことをするのか」

「すまん、申し訳ない。校長としての自覚が足らなかった。もう二度としない」

「絶対にお前を校長でいられなくしてやる」

三浦がまた校長の胸ぐらを掴み、左手一本で校長の体を宙に浮かせた。そこで校長の顔面に一発目のパンチが入った。

校長は「ウワー」と言ってその場に倒れた。

三浦は倒れた校長の胸ぐらをもう一度掴み、立ち上がらせてから校長のボディに二発目のパンチを放った。校長の口から「グェー」と変な音がして倒れた。

三浦は倒れた校長に馬乗りになり、顔面を何発も殴った。

「お前を殺す。絶対に殺す」

三浦の喚く声と『バシッ、バシッ』と校長の顔面を殴る音が入り乱れた。

そこで、麗子は三浦の背中に抱きついた。

「三浦さん、もうやめてください。このままだと校長が死んでしまいます」

「止めないでくれ。俺は今からこいつを殺すんだ。こいつを殺さないと俺の気がすまない」

三浦の荒い息遣いが麗子の胸に伝わってきた。三浦の気持ちは痛いほどわかる。しかし、校長のような卑劣な男のために三浦に罪を犯してほしくない。

「お願いします、やめてください。わたしも香代子さんのうらみははらしたいです。でも、わたしはあなたを殺人犯にしたくないんです。わたし、あなたのことが好きだから罪を犯してほしくないんです」

麗子は泣きながら三浦に訴えた。

そこで三浦の校長を殴る手が止まった。三浦の体は震えている。震えをおさえるように麗子は三浦を強く抱きしめた。

「わかりました」

三浦はゆっくり立ち上がり校長を解放した。

校長はすぐ立ち上がり玄関から逃げようとした。しかし、そこには優香が立っていた。

「辻野校長、あんたは一年前に石中香代子さんを校長室で強姦したよな。それ認めえや。そしたらここから逃がしたる」

優香が玄関から逃げ出そうとする校長の前に立ちはだかった。

「は、はい。すいませんでした。わしのせいで石中先生は自殺してしまいました。本当に申し訳ないことをしたと思ってる。どうか、許してくれ」

校長は優香に向けて頭を下げた。

「あたしに謝ってもらってもしゃーないで。それに、あんたのこと許すことは出来ひんやろな」

優香が玄関にあった三浦の大きなサンダルで思いっきり校長の頭を張った。

『バシッ』と乾いた音が響いた。

「このエロジジィ、これで終わりやないで、うらみはこれからはらすで」

優香が叫んだ。

「す、すまん」

校長は頭を押さえ、優香の横をすり抜けて玄関を出た。そして廊下を一目散に走って逃げて行った。

「謝っても許さんわ。これからどうなるか覚悟しときやー」

優香が逃げる校長の背中に向かって叫んだ。

麗子は廊下に出て、外の空気を吸ってから「フーッ」と息を吐いた。

「うまくいったっばいね」

優香は玄関に立つ麗子と次郎と太一に視線を向けて笑みを浮かべた。

「ええ、ありがとう」

麗子は体中の力が抜けた。

「うまくいきましたね」

次郎が頷いた。

「でも、三浦さんが出てきて、怒鳴りだした時は、どうなるかとヒヤヒヤしたっすよ」

太一が胸に手を当てた。

「三浦さん、校長の姿を見て怒りが沸点に達したんでしょうね」

次郎が苦笑いを浮かべた。

「けど、うまいこといったんちがうかな。次郎ちゃん、音は録れてる？」

優香が次郎に視線を向けた。

「確認しておきましょう」

次郎がタンスの上と鏡台の上、ごみ袋の中に仕掛けた三つのボイスレコーダーを回収するために部屋に入っていった。

麗子と優香と太一も次郎に続いて部屋に入った。蛍光灯をつけると部屋の真ん中で三

浦がへたりこんでいた。

「お疲れさまでした」

麗子がへたりこむ三浦の前に屈んだ。

「すみません。リハーサル通りにやらなくて。つい、カッとなってしまいました」

三浦が麗子に頭を下げた。

「いえ」

麗子は首を横に振った。

「とりあえず、校長が白状したからよかったやん。これで証拠が出来たわけやし。次郎ちゃんが仕掛けてくれたボイスレコーダーを公にしたら、校長はこれやで」

優香が首を切る仕草をした。

「ばっちり録音できてます」

次郎が指でオーケーマークを作った。

「よし、完璧や」

優香が両拳を握った。

「そのボイスレコーダーをわたしに貸してくれませんか」

麗子は優香に訊いた。

「ボイスレコーダーの録音した中身は、三浦さんと麗子さんのもんやから、そりゃかまへんよ。ただ、ボイスレコーダー本体は、次郎ちゃんが自分の店で社員割引で買ったやつみたいやから、返さなあかんかもやけど。次郎ちゃん、そういうとこケチやからね」

優香が次郎の方を見た。そこでみんなが笑った。

「いや、僕はいいですよ。ボイスレコーダーごと三浦さんと麗子さんにプレゼントしますよ。記念に持っててください」

「じゃあ、遠慮なくいただきます。このお礼は必ずします」

「ボイスレコーダーの一つは校長の奥さんに送ったらええんちがうかな。家庭がボロボロなるんちがうか。それより音源をネットで流してしまう方がええか」

優香が悪戯っぽく笑った。

「ボイスレコーダーの使い道は三浦さんと麗子さんの自由にしてください」

次郎がそう言って、麗子に三つのボイスレコーダーを手渡した。

麗子は次郎からもらったボイスレコーダーを持田翔子に聞かせようと学校に持ってきた。

校長が石中先生を襲ったと自白した音声がここに入っていると伝えると、彼女は目を大きく見開いた。

「どうやって、録ったんですか」

持田翔子が目を白黒させて訊いてきたので、麗子は「わたしには強い味方がたくさんいるのよ」とだけ答えた。

彼女もこれで証拠ができたと喜んだ。

そのあと、翔子がこの音声を今日の昼休みに放送部の友人に頼んで校内放送で流したいと言ってきた。

少し悩んだが、全校生徒にも知る権利はあるのだと、麗子は了承した。

これが流れると、全校生徒に校長の正体がばれることになる。大変なことになるかも

しれない。この名門校が崩壊するかもしれない。

それでもいい。次の被害者を出さないためにも、全員が知った方がいいんだ。麗子は自分にそう言い聞かせた。

そのあと、麗子はボイスレコーダーを持って理事長に会いに行くつもりになっている。これで、校長の辻野は完全に終わるだろう。

『ただいまより、校内放送をはじめます。今日は昨年自殺してしまった石中香代子先生の命日です。なので、今日の放送は、なぜ香代子先生が自殺してしまったのか、それについて辻野校長がお話ししてくれた内容を放送します。みなさん、よく聞いてください』

校内がザワザワとざわついていた。ざわつきが鎮まってから、校長の「何をする気だ」という慌てる声がスピーカーから聞こえた。

麗子は職員室のスピーカーを見上げながら、同じマンションの住人の優香と次郎と太一の顔を浮かべた。ここまでこれたのもあの人たちのおかげだと感謝の言葉を口にした。

「ありがとう」

やっぱりあの川西マンションは不動産屋の言う通り、とっておきの特別な物件だったんだなとニンマリ笑みを浮かべた。

エピローグ

「皆さん、本当にありがとうございました。この一年、世の中の人間が全て敵だと思い込んでしまっていた自分が恥ずかしいです。世の中にはこんな素晴らしい人たちがいることに早く気づけばよかった」

三浦はマンションの部屋の荷物を全てトラックに積み込んでから引っ越しの手伝いをしてくれた同じマンションに住む優香たち四人に向けて頭を下げた。

「フランケンもたまには遊びに来てや」

優香が三浦の前に立ち、彼の顔を見上げた。

「洋菓子を買う時は関急百貨店に優香ちゃんをたずねて買いに行くよ」

三浦はそう言って優香の頭に手をのせた。

「居酒屋ドンドンにも飲みに来てください。その時はビールくらいサービスします」

太一は直立不動で涙ぐんだ。

「ありがとう。今度みんなでゆっくり飲みたいな」

三浦は太一に右手を差し出した。太一は左手で目頭を押さえながら右手を出した。体が大きい二人が握手する姿はプロレスラーの試合前のようだ。

「ぜひ、一緒に飲みに行きましょう」

太一の表情はくしゃくしゃに崩れて目は真っ赤だ。

「テレビを買う時はいつでも声をかけてください」

次郎は鼻をグスグスさせていた。

「テレビの前にエアコンがほしいかな。その時は次郎くんの店に買いに行くよ」

三浦がそう言って次郎に右手を差し出すと次郎は右手をズボンで拭いてから差し出した。

三浦の大きな右手が次郎の小さな右手を包み込んだ。

「三浦さん、あ、あの、こ、これから、頑張ってください」

麗子は俯いたまま、三浦の顔を見ないで言った。

「麗子さんには一番お世話になったよ。本当にありがとう。感謝しかないです」

三浦は麗子に向かって深々と頭を下げた。

「そ、そんな、わたしは教師として当たり前のことをしたまでのことです」

麗子は俯いたままだった。

「ハニートラップを仕掛けるために辻野に近づいたり、幽霊に変装したり、当たり前のことじゃないですよ。こんな俺と亡くなった香代子のために、そして教え子たちのためにそこまでやってくれるなんて、本当に嬉しかったし、素晴らしい教師だと思いました。天国の香代子もいい後輩ができたと思んでいます」

「いえ、そんなことはないです」

麗子は俯いたまま何度も首を横に振り、目から出た雫を飛び散らせた。

「これからどうされるんですか」

麗子がやっと顔を上げ三浦の顔を見上げた。

「この荷物を全て香代子の実家にお返しして、俺も一度、自分の実家に帰ってから気持ちをリフレッシュしようと思っています。香代子のことをいつまでも引きずってはいは俺自身も前に進めないので。そろそろ変わらないといけません。皆さんのおかげでそれが出来そうです。亡くなった香代子もそれを望んでると思います」

「リフレッシュできたら、また、ここに遊びにきてください」

麗子の目は真っ赤で、涙が頬を伝い鼻水まで流していた。

「そうですね。また顔を出します。それまでみんな待っててくれますか」

三浦がみんなに視線を走らせた。優香はうんうんと何度も頷いて見せた。

「わたしは待ってます。ずっと待ってます。わたしは香代子さんにはなれませんが、ずっとあなたを待っています」

麗子の涙と鼻水が止まらない。

「ありがとう。出来るだけ早くここに戻ってこれるようにします。麗子さんのおかげで早く立ち直れる気がしています」

三浦は麗子の肩を抱いた。麗子は三浦の胸に顔を埋めた。

「えーっ、マ、マジ。麗子さん、キャラ変したんか。男嫌いやったんちゃうんかいな」

優香が笑いながら、三浦の胸に顔を埋める麗子に向かって言った。

「す、すいません。つ、つい」

麗子が慌てて三浦から離れ、優香にペコリと頭を下げた。

「ええよ、ええよ。あたし、めちゃくちゃ二人のこと応援するから」

「いえ、そ、そんなんじゃないです」

麗子が右手と首を何度も横に振った。

「じゃあ、香代子の両親を待たせてますので、俺はそろそろ行きます。皆さん本当にありがとうございました」

三浦は優香たち四人に向かって深々と頭を下げてからトラックに乗り込んだ。

トラックのエンジン音が響き出すと、麗子は唇を噛みしめて、運転席に座る三浦を見つめていた。その時の麗子の瞳はこれまでに見たことがないくらい輝いていた。

優香が麗子の肩に左手をのせて右手を三浦さんに向けて振った。麗子はまた俯いてしまったので、優香は「ほら、麗子さん」と言って麗子の右手をとり、三浦に向けていっしょに手を振った。

トラックがゆっくりと動き出したので、優香は「フランケン、またねー」と声を張り上げた。

優香たち四人は一列に並んで走りだしたトラックのテールランプを見送った。三浦の乗ったトラックがドンドン小さくなりテールランプが光った後、左に曲がって見えなくなった。

三浦の運転するトラックが見えなくなったところで四人が並ぶ列は崩れ、誰からともなく「ハァー」と息を吐いた。

「行っちゃったねー」

優香が言った。

「行っちゃいましたね」

次郎が続けた。

「いろいろあったな」

太一が口にした。

そして三人揃って麗子の方を見た。

「なんか二人、熱々だったよね」

三人が口を揃えて麗子を横目で見た。

「そ、そんなんじゃないですね。ただ、ちょっと三浦さんのためにいろいろとやっているうちに、もっと、この人のために何かしてあげたいと思っただけです」

「麗子さん、年上に対して偉そうかもしれへんけど、教えたげるわ。それはたぶん恋やで」

優香が言うと、麗子は「こ、恋？」と言って顔を赤くして俯いた。

「そう、恋。もしかしたら愛かもしれへんなー」

「あ、愛」

麗子は両手で顔を覆った。

「まっ、この先、この愛がうまく成就するよう、あたしは応援するで。まだ先やけど、クリスマスのケーキやバレンタインのチョコレートやったら、おすすめのやつ用意しとくわ」

優香は麗子の肩に抱きついた。

「は、はい。じゃ、じゃあ、それ、お願いします」

麗子が蚊の鳴くような声を出して、ペコリと頭を下げた。

「三浦さんとデートで飲みに来るなら、二階の個室を予約しておきますよ」

太一が麗子の顔を覗きこんで笑みを浮かべた。

「じゃ、じゃあ、それもお願いしておきます」

麗子が太一にもペコリと頭を下げた。

「二人で暮らすことになったら、家電一式買いにきてください。格安にします」

次郎も調子にのって続けた。

「ふ、二人で暮らす？　いえ、まだ、そ、そんな、わ、わたしが決めることではありません」

麗子は顔を真っ赤にしたまま、何度も首を横に振った。

「ところで、話変わりますが、僕たちがこの川西マンションの住人になぜ選ばれたんでしょうか」

次郎は不動産屋が、なぜ自分にこのマンションを紹介してくれたのかが、ずっと気になっていたらしい。

「おれたちがこのマンションの住人に選ばれた理由なんてあるんっすか。貧乏そうだから格安物件を紹介してくれただけじゃないんすか」

太一はそんなことはどうでもいいといった感じだ。

「貧乏そうだからってのも確かにあるかもしれませんが、僕は別に理由があったんじゃないかなと思ってるんですよ」

「それ、あたしらの名前に関係があるんちがうやろか。不動産屋のおじさん、あたしらの名前が気に入ったって言うてたやろ」

「優香ちゃんもそう思いますか」

「おれたちの名前に何か意味あるんすか」

太一が首を傾げた。

「そう思うけど、わからんわ」

「僕もわかりません」

次郎が腕を組んで首を傾げた。

「そんなこと、どうでもいいじゃないすか。格安物件に住めて、いい仲間に出会えて、それでいいじゃないすか」

「まあ、そうですけど」

「太一くんの言う通りや。そんなことどうでもええわ。それより、あたし、この川西マンションに住めて良かったなと思ってる。麗子さんにも太一くんにも次郎ちゃんにも出会って本当に良かった。麗子さんは三浦さんに会えてよかったしね」

優香が満面の笑みをみんなに向けた。

「同じくー」

次郎と太一が声を揃えた。

「ほんと麗子さんは三浦さんに会えてよかったね」

優香がニヤニヤしながら麗子の顔を覗きこんだ。

「三浦さんに会えて良かったとは思いますが、それは特別なことではなくて、優香ちゃんや太一くん、次郎くんと会えて良かったと思うのと同じです」

麗子は俯いて手をモゾモゾさせていた。

「すいませーん」

急に明るく透き通る声が出た。その声に四人が振り向いた。そこに立っていたのはキラキラと耀いて見える若い女子だった。

次郎の顔がパッと明るくなるのがわかった。太一は女子の方へ一歩前を出た。

「な、なんすか」

太一の目はキラキラと耀いている。

「あの一、この川西マンションに住んでいる方たちでしょうか」

彼女はニコニコした笑顔で訊いてきた。

「そうやけど」

優香がこたえた。

「やっぱりー」

彼女が嬉しそうに両手を胸の前で合わせた。

「あんたは誰なん」

今度は優香が一歩前を出た。

「あたし、今日からここの住人になる、種田未来です。よろしくお願いいたしまーす」

彼女は深々と頭を下げた。

「種田未来さんていうんすか」

太一が彼女の横に並んだ。

「はい」

彼女は右手を上げた。

「俺、太一、原田太一す。よろしく」

太一が彼女に右手を差し出した。

「原田さんですか、よろしくお願いまーす」

種田未来は、太一と握手せずに頭をペコリと下げた。

「このスケベ」

優香は太一が種田未来に出した右手を思いっきり叩いた。

太一はその手をすぐに引っ込めた。

「若くて可愛い娘みたら、すぐこれや」

優香は太一の頭を叩いて横目で睨んだ。

太一は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

「ところで、種田さんは、ここを紹介してもらった時に不動産屋の人に、名前が気に入ったとか言われませんでしたか」

次郎が訊いた。

「ああ、言われましたー。顔が可愛いし、名前が気に入ったって。けど、顔が可愛いのはわかるけど、名前が気に入った意味はわかりませんでした。あたし自分の名前、あんまり好きじゃないんです」

「あっ、そうなんや。顔が可愛いのは否定しないんやね」

優香は自分の顔がひきつるのがわかった。優香が種田未来を睨むように見ると、そこで火花がバチバチと散った。

「先輩もなかなか可愛いですし、そちらのおばさんも綺麗ですから、不動産屋の人は面食いなんですかねー」

「おばさん？」

麗子まで目をつり上げた。

変な娘やけど、この川西マンションに個性的な新しい住人が増えることは優香にとって嬉しいことだった。このマンションの住人は変わり者ばかりだけど、なぜか、みんな心がきれいな人ばかりだ。種田未来もきっと心はきれいだろう。小生意気だけど、これから優香たちと仲良くなれるはずだと思った。

女性陣が三人になったので、これから次郎と太一の男二人をもっとからかってやろう。

次郎を見ると、鼻の下を伸ばしてニヤニヤと笑っている。

「次郎ちゃん、麗子さんがおばさんて言われたのに、なにニヤニヤしてんの」

優香は次郎に突っ込んだ。

「そんな、別にニヤニヤなんていませんよ」

次郎はにやけていた顔を真顔に戻して右手を横に振った。

「太一くんも、なんで、こんな小娘に鼻の下のばして、にやけてんの」

今度は太一に突っ込んだ。

「いやー、彼女、可愛いなと思ってさー」

太一は正直に言っただけで頭を掻いた。

「ホント、男ってスケベやわ。麗子さんが男嫌いになる気持ちわかるわ」

「僕たち男はこのマンションに女性が一人増えて、これから一段と大変になるかもね」

次郎が太一の耳元で囁いていた。

「そうっすね。怖いっすね。けど、なんか楽しいっす」

太一が囁き返していた。

「二人とも聞こえてるで。なに、あたしらの悪口言うてんの」

優香が二人の男にきつい視線を向けた。

「悪口なんて言ってませんよ。ねえ、太一くん」

次郎は慌てて否定して太一の方に顔を向けた。

「聞こえてるちゅうてるやろ」

優香は口を尖らせた。

「あ、ああ、聞こえてましたか、すみません」

次郎が頭を掻いた。

「種田さん、俺、荷物運ぶの手伝います」

太一はそう言って、種田の足元に置いてある荷物に手を持った。

「うわー、やさしいー。あたしやさしい男性が大好き」

種田は嬉しそうに胸の前で小さく手を叩いた。

「じゃあ、僕も」

次郎はもうひとつある荷物を手に持った。

優香は次郎と太一のことをスケベ野郎とは思ったが、あの校長とは違う。本当は心優しい男たちで他人のために一生懸命になってくれる人たちなんだと種田に自慢したい気分だった。

「部屋は二〇二号室ですか。じゃあ二階ですね」

次郎の声が弾んだ。

優香は次郎と太一が荷物を持って種田に続いて階段を上っていく背中を眺めた。

「フフフ」と麗子が階段を上る三人を見て笑った。

「うらみはらせたね」

優香は麗子に向かって言った。

このマンションから、うら・み・はら・せ

著 まつだつま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
